
ANOTHER WORLD “ 禍根Xの原本 ”

天城 百於馨

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ANOTHER WORLD “禍根Xの原本”

【コード】

N0006C

【作者名】

天城 百於馨

【あらすじ】

『禍根X…』の素材的なものです。こちらには『悪の種子』の概念が無いので、登場人物は同じですが、一応別物です。

作者曰く

作者曰く…

これは“禍根X”の素材になったものである。

作者曰く

気まぐれで更新するかもしれない(らしい)

作者曰く

小説を書くきっかけになった記念の品！ みたいな

人物紹介

登場人物

>レミア<

魔女の母親を持つ少女。地元で差別を受けていたが、ある日男性（ゲアン）に助けられたことをきっかけに家を出ることを決意し、新たな自分の居場所を求めてその男性と共に旅立つ。おばけ、暗闇などの怖がり。歳は十代半ば頃。

>ゲアン<

民衆向けの青空教室の講師や重要書物の配達、魔物退治も行うドチユール国王お気に入り、『出張勇者(?)』。冷徹、勇壮な面を持つ美男子。二十歳前後。

>バド<

手首に魔神を封印している魔物ハンター。その実力と美貌は同業者から嫉妬を買い、異性を魅了して止まない。二十代半ば頃。

その他の登場人物

>アーク<

青空教室でゲアンと出会い、彼とその経歴に憧れと好奇心を抱いて仲間になる。人懐こく、愛嬌たっぷりな少年。レミアの一歳下。

>アール・グレー<

ジャスミンの双子の兄。笛が上手で、ジャスミンの踊りと組んで道

端芸をやる。

寡黙で、いつも冷静な目で周りの様子を見ている。十代半ばより上。

>ジャスミン<

踊りが上手な美少女。積極的で実は大胆。たまに毒を吐く。(トークで)

>ビアーナ<

ゲアンに思いを寄せる癒し系美人の女性。それとなく自分の気持ちをゲアンにアピールするが……その関係に発展はない。十代後半。

この物語は話ごとに重要人物が変わりますが、前記の三名が主要人物になっています。その他は作者のきまぐれにより、時々ちょっと個性的なキャラが登場することもありますのでチェックしてみてください(←→)

ANOTHER WORLD “禍根Xの原本”

人物紹介

(後書き)

本編へどうぞ

第一話：〈王家〉 真実の愛の形【姫と王子編】

人気の少なくなつた薄暗い町。一人の少女が長い金髪の髪を揺らしながら走り、それを追いかける不審な二人の男達。

「へへへ……」

少女は必死で逃げ、路地裏や店の裏などに入るが、とうとう逃げ場を失い男の手が彼女に伸びた。

「いやっ！」

少女が叫んだその時 誰かが男の前に立ちはだかった。なかなかの長身に金髪。後ろに向かって流した髪型は若々しく、立ち姿も美しい。

「何だてめえは！？ そこをどけ！」

彼女を捕らえようとした男は罵倒するように言った。

「邪魔すると怪我するぜ？」

もう一人の男はニヤニヤと怪しげな笑みを浮かべている。

「助けてください！？ この人達、私に襲いかかってきたんです！」

少女は涙声になりながら、必死に助けを求めた。

「分かった。私……いや、“オレ”が何とかしよう」

「何だ兄ちゃん。やる気か？」

男が挑発する。

「君は離れてろ」

謎の人物に言われ、少女は離れた。

「やっちまえ！」

男の一人がナイフで謎の人物に襲いかかる。謎の人物はさっと避け、男がまたナイフを振り回した。

「うっ！……」

謎の人物の手刀で、男のナイフが地面に落ちる。男は顔をしかめ、そのナイフを拾おうとした。

「！……」

謎の人物がそれを蹴り、ナイフが遠くに滑って行き溝に落ちる。

「野郎　っ！」

もう一人の男が後ろからナイフで謎の人物に襲いかかる……が、謎の人物が素早く身を翻すとともに男の腕を捕らえ、捻った。

「あっ……」

男は思わず手からナイフを落とし、謎の人物がまた同じようにナイフを遠くに蹴飛ばした。

「畜生っっ……覚えてやがれえっっ!？」

そう捨て台詞を吐き捨て一人の男が逃げて行き

「ばっか！」

と情けない台詞を言ってから、もう一人の男も逃げて行った。

「……」

一段落すると謎の人物は乱れた髪を手櫛でさつと直した。

「ありがとございました。何とお礼したら良いのか……」

少女が言う途中、謎の人物は黙って行こうとした。

「待ってください！　せめて、お名前を」

すると謎の人物は立ち止まった。

「そんなに知りたいのか？」

「ええ……もちろん。ちゃんとお礼もしたいですし」

「そうか……では、仕方がないな……んっん　ッ！」

「ルド」

「ルド？　ルドさんていうのね？」

少女は表情を明るくした。

「ルド？……あ、あゝっそうそう“ルド”だ。はははは……」

ルド(?)は苦笑した。

「素敵な名前……」

少女はうつとりして呟いた。

「そう？　はは……ありがと。じゃあ、また」

そう言い、ルドは去ろうとした。

「あっ!?!　待ってください。まだ私、何もお礼してないわ!」

慌てて少女が呼び止め、ルドは立ち止まる。

「礼などいらん。ボランティアだ」

「そんな！？ あんな危険な目に遭わせてまで助けて頂いたのに、何もお礼が出来ないなんて……」

ルドの言葉に少女は泣き崩れた。

「わっ分かったから、泣かないでくれ……」

ルドは仕方なく折れ

「本当に？」

少女はしくしく泣きながら尋ねた。

「ああ……？」

彼は少女の付けていたネックレスを見て驚愕した。

「どうかしました？」

不思議そうに少女は尋ねた。

「え？ いや、別に……ところで君の名は？」

「私はマージュといいます」

「マージュか……」

マージュはにっこりと微笑みながらルドを見ていた。

うわぁ〜何だこのとろけるような甘い微笑みは！？

「ルドさん」

「えっ？」

「せめて、お食事だけでも御一緒にしませんか？」

「あ、ああ〜いいね？ そうしよう。はははは……」

そう言ったルドの顔はだいぶ引きつっていたが

「良かった。やっと打ち解けたみたい」

とマージュは安堵した。

それから二人は適当にある店に辿り着くとそこで食事を始める」

とにした。

「ごめんなさい。外で……」

そこはキャンプ場に近い造りで外に丸太で組んだテーブルが何台かあるだけだった。

「いいって、気にするな。はは……」

ルドは軽く笑い、料理を食べていたが、時々吹く風が冷たく二人とも震えていた。

「ルドさんはここに住んでらっしゃるんですか？」

「え？ あ、住んでないよ」

ルドは何故か陽気に答えた。

「では、どちらに住んでらっしゃるの？」

「深い深……い海の底」

ワインを飲みながら陽気にルドは言った。顔がほんのり赤くなっている。

「海の底？」

マージユは不思議そうに尋ねた。すると

「嘘　　！　信じた？　信じた？」

とルドは楽しそうに笑った。

「少し……」

「あはははは。バツカじゃないの……！　あははは」

「ルドさん酔ってるでしょ？」

ルドがあまりにも陽気になったので、いい加減マージユもその異変に気付いたが

「酔ってるわけないだろ？」

とルドは急にキリツとした表情になった。

「そ、そう……？」

マージユが驚いていると

「だって、こんな綺麗な女性が側にいるのに酔ってなんかいたら……」

…口説けないだろっ？」

格好付けてルドは言った。

「……………」
マージユは対処できず啞然とする。
一方ルドは、ギャグだったらしく一人でウケていた……

数時間後

「……………」

鳥の囀りを聞きルドが目覚ますと、辺りはまだ薄暗かったが日はだいぶ昇り始めていた。

どこだここは？

辺りを見回すと同じ木のテーブルが並んでいる。

あっ！？

テーブルの上に何か書いてある紙を見付け 読んでみた。

『起きなかつたので私は宿屋に行きます。 マージユ』

ルドは考え込む。

“マージユ”？ 誰だっけ……………？

昨晚オレは何を……………

ルドは頭がズキズキと痛んだ。

痛っ…………… あっ！？ そうだ思い出したぞ。 確か一緒に食事した、あのお姫様みたいな娘だ！

それからルドはあてもなく町を歩き始めた。 まだ朝早かったのでほとんどの店は閉まっている。 ふと彼はその中で、開店の準備をしている金髪の女性を発見した。

「マージユ！？」

ルドが彼女の肩に触れる。

「何ですか？」

振り向いたのは全く別の女性だった。

「あっ？ 失礼、人違いでした……」

ルドは落胆して肩を落とす。

「ルドさん？」

「？」

後ろから声を掛けられ、彼が振り向くと

「マージユ!？」

後ろにマージユの姿があった。

「昨日はごめんなさい。店に置いて来てしまつて」

申し訳なさそうにマージユは言った。

「気にするな。そんなこ……つくしッ！」

ルドはくしゃみをした。

「大変!？ 風邪を曳いてしまったのね？ あんな所で寝かせてし

まったから……ごめんなさい、私のせいだわ！」

マージユは今にも泣き出しそうな目をした。

「平気だ。これぐらい。……ずずっ……」

ルドは鼻を啜った。

「本当に？」

不安な顔でマージユは尋ねた。

「ああ」

ルドは少し苦笑いして答えた。

「……」

「それより君、この辺に住んでるのか？」

「違うわ……」

静かにマージユは言った。

「……」

その様子を見たルドは何か理由^{わけ}ありな予感がした。

「ねえルドさん！」

急に元気な声でマージユは言った。

「何？」

「私、凄く素敵な場所を見付けたの。ちょっと来て！
妙にマージユははしゃいでいた。」

「ん？ ああ……」

マージユに案内されやって来ると

「わあああ……」

思わずルドは感嘆の声をあげた。野原一面に蓮華の花が咲いてい
る。

「ねえ、凄いでしょ？」

マージユはにっこりと微笑んだ。

「ああ、とても」

二人は芝生の上に腰を下ろした。

「ルドさん」

「“ルド”でいいよ」

ルドは優しくそう言った。

「じゃあ、ルド？……」

少し恥ずかしそうにマージユが言う。

「何？」

「ルドはどこから来たの？」

「マージユが先に教えてくれ。そしたら言う」

「……カルーナという所よ」

「カルーナ？……」

ルドは首を傾げた。

「まあ、小さな村だから知らないのも無理ないわ

ルドは？」

「あっ、オレ？ オレは……」

ルドは口ごもった。

「オレは？」

マージユは更に問い詰めた。

「オレはこの近く」

「この近くってどこに住んでるの？」

「後で教えてやるよ……」

「何故、今教えてくれないの？」

「実はオレ、記憶喪失で昔のこととか全然覚えてないんだ」

ルドは苦笑いした。

「そう……それならどうやって後で教えるつもりだったのかしら？」

少し呆れたようなマージユのその言葉に

「……」

ルドは何も言い返すことが出来なかった。

「いいわ。そんなにいいたくないなら言わなくても」

マージユはすっかり機嫌を損ね、立ち上がるうとした。

「待ってっ！」

ルドが彼女の腕を掴んだその時 首元で何かがキラリと光った。

「それは ……!?」

「……」

ルドの首にぶら下がるネックレスにマージユは釘付けになった。

「それ、どうしたの……!?」

「あっ、これか？ これは祖父からもらったんだ……」

ルドは少し焦っていた。

「これに見覚えはない？」

マージユは自分が付けているネックレスのペンダントヘッドを掲

げてルドに見せた。

「あっ!? こ、これは……!」

わざとらしくルドは驚き

「“王家の紋章”よ」

とあっさりマージユは言った。

「うわああ……マジかよ!?!」

ルドはたじろいだ。

「あなたのネックレスに書いてあるのも、王家の紋章よ」

「え……これが？」

「ええ」

真つ直ぐな瞳でマージユは言った。

「驚いたなあ……これがそんな凄い物だったなんて全然“知らなかった”……」

「そつちに書いてあるのはドチュールの紋章で、こつちに書いてあるのはスターフォックスの紋章よ」

「そうなんだあ……？」

既にルドの目は笑っていないかった。マージユは話を続ける。

「このネツクレスは祖母に頂いたの」

「へへえ」

「祖母は昔、異国の男性と恋に落ちたの。でも、彼女には決められた婚約者がいて、とうとう式を挙げなくてはならないことになり 二人は別れる決意をした……」

「……」

ルドは話に聞き入った。

「そして、その時二人は永遠の愛を誓い、お互いのネツクレスを交換したらしいの。それが このネツクレスよ」

「！……」

ルドはゴクツと生唾を飲み込んだ。

「裏にイニシアルが刻んであるはずよ。こつちはJ・S・S <ジ

ヨージア・シュガー・スターフォックス>。そつちはW・M・D

<ウイナーラ・モカ・ドチュール>。そう刻まれてあるはずだわ」

ルドが自分のしているネツクレスの裏を見ると 『W・M・D』

と刻まれてあった。

「ルド、あなたのお祖父様はご健在かしら？」

マージユが尋ねる。

「いや、四年前に亡くなった」

静かにルドはそう答えた。

「四年前？」

マージユは啞然とした。

「ああ、何で？」

不思議に思い、ルドは尋ねた。するとマージユは答えた。

「私の祖母が亡くなったのも 四年前だから……」

「!?!」

「そう……二人共、同じ年に亡くなったのね。 天国で一緒にな

れたのかもしれない……」

マージユは切ない瞳で微妙した。

「そうかもしれないな」

「もし、二人が生きている時結ばれていたらどうなったのか
しら……?」

ぼんやりとした様子でマージユは呟いた。

「多分、オレ達は、生まれて来てないだろうな」

「そ、そうよね?」

マージユは少し笑い

「でも、何だか複雑よね……」

また切ない瞳をした。

「二人が生きている時、結ばれなくて可哀相だと思うのに……そう
なっていたら私達は、こうして出会うことも……生まれ来ること
すら無かったなんて……」

「確かにな」

「生前、祖母はおっしゃってたわ。あなたのお祖父様と結婚するこ
とは出来なかつたけど、真実の愛を知ることが出来たと。両親も婚
約者も裏切らず、誰も傷付けぬ方法を選び そして二人は誓った
の。『いつかお互いが天に召される時が来たら、その時こそ 天
国で結ばれよう』と……」

哀しい瞳でマージユは微笑んだ。

「そんなことがあったのか……」

ルドは切ない気持ちになった。表情が少しずつ萎えていく。

「死ぬ前に祖父がこう言ってたのを覚えている 、『お前達に会え
て良かった』と」

「そう……私の祖母も『夫（祖父）と結婚し孫にも恵まれて幸せだ

った』とおっしゃってたわ」

「そうか。それじゃあ二人とも幸せだったのかもしれないな」
穏やかにルドは微笑んだ。

「そうね。きつと幸せだったんだわ……」

そう言ったマージユの瞳には涙が光っていた。

「マージユ」

ルドはもう、ふざけるのはやめにした。

「何？」

「オレ達もう、ここまで話したわけだし、そろそろお互いの身分を明かさないか？」

「そうね」

「オレが先に言う 本当の名前は、ジェラルド・B・スターフォックス。スターフォックス国王の長男だ」

さつきまでの“ルド”とは違い、彼の少しタレ目でアーモンド色の瞳には、気品が滲み出ていた。継いでマージユも告白する。

「私はドチュール国王の娘、マージユ・F・ドチュールよ」

その頃ほとんどの店は開き、町はすっかり活気が出ていた。宿屋から出たゲアンが急に立ち止まる。

「どうした？」

バドが言った。他の仲間も立ち止まる。

ゲアンの視線は、まるで何かを捕らえるかのようにある方向に集中していた。

「ちよつと確かめてくる」

ゲアンは人込みの中へと入って行った。

「あっ！ 先生！？……」

アークの呼び掛けは空しくフェイドアウトしていった。

「どうしたのかしら？」

ジャスミンが尋ねるとアークは首を傾げた。

「知り合いでもいたのか……？」

アール・グレーが呟く。

「……」

首を傾げるバド。

「私達も付いて行ってみましょう？」

レミアが言い、彼らはゲアンの後を追うことにした。

ゲアンは人込みの中を更に突き進み……

「姫！」

そう叫んだ。

「!？」

するとその中の一人がびくっ！ と反応し

ゆっくりと振り向いた。

「やっぱり」

ゲアンが納得したように呟く。

「ゲアン!？」

その騒ぎを訝しげに思った周りの人々は、ざわつき始めた。

「ちょ、ちょっとこんな所で……そんな呼び方しないでよ!？」

振り向いたのはマージュだった。彼女は焦ってゲアンの腕を掴み、

一目に付かない路地裏へと連れて行く。

「困るじゃない!？ 私はここでは“一庶民”てことになってるん

だから。姫なんて呼ばないで!」

駄々を捏ねるようにマージュは言った。

「いったい、こんな所で何をなさっているのですか？」

「……!」

マージュはたじろいだ。彼女を真っ直ぐに見るゲアンの青い瞳は

切れ長で凜としていて、眼鏡越しだが吸い込まれそうになる。

「ちよつとした旅行よ……あなたのほうこそ、こんな所で何してるの？」

「仕事です」

「仕事？ そうだったの……最近あなた全然お城に来ないからあまりにも退屈で私、内緒でお城から出て来ちゃった……」

すねたような顔でマージュは言った。

「内緒で？ 大変だ。すぐに帰りましょう！」

「……」

マージュは俯き、心の中で舌を出す。

「さあ、私と一緒に帰りましょう？」

ゲアンは少し優しい声で、マージュを諭した。

「いやよ。あんな退屈な所、もう帰りたくない！」

「いけません。帰りますよ」

「帰らないっ！」

「姫！ 帰りますよ？」

ドスを利かせてゲアンが言い

「……？ 怖い、ゲアン」

マージュは泣きそうな表情で怯えてみせた。

「……帰りましょう」

ゲアンはやれやれと呆れつつ、今度は少し優しい声で言った。

「……」

ルドはそのやりとりを見て苦笑していたが

「もう、やだ！ ルド助けて!？」

とそこへ半泣きになりながらマージュが駆け寄ってきた。彼女はルドに助けを求め、彼の背中の中の後ろに隠れた。

「姫、こちらの方は？」

「“ジエラルドさん”。私を強姦から助けてくださったの」

「初めまして、ジェラルドです」

「ルドは普通に自己紹介した。」

「私は^{わたくし}ゲアンと申します。その説はとも、マージユ姫を助けていただき、誠にありがとうございました。心からお礼申し上げます」

「ゲアンはそう言い、慇懃で綺麗なお辞儀をした。」

「いや、そんな……そこまでお礼言われると、何か照れるな……はは」

その時ルドが首にぶら下げていたネックレスが襟元から飛び出した。

「？」

「それは……？ 失礼ですが、あなたは“王家”の方ではございませんか？」

「！？」

ゲアンの問い掛けに動揺したルドは、もろに表情に出てしまった。

「やばい……っ！」

「やはり、そうなのですな？」

冷静なゲアンの問い掛けにルドは

「違う！ オレは“王子”なんかじゃない。そんなもの……捨てたんだ！」

と完全に動揺を隠せずにいた。

「ジェラルド様。どうか、もう一度お考えになってください」

「お前、このオレに説教するつもりか！？」

ルドの目付きが変わった。

「オレを誰だと思ってる！？ スターフォックス国王の息子、ジェラルド・B・スターフォックスだぞ！？」

まるで別人のように激しい口調になったルドの様子を見てマージユは啞然とし、ゲアンは冷静な面持ちでそれを見詰めていた。

「……オレは今何を？」

ふとルドは我に返る。何を口走ってしまったのかと記憶を辿り、虚空を見詰めた。

「御自分は、スターフォックス国王のご御子息だとおっしゃいました」

ゲアンが落ち着いた声でそう言われ

「……」

ルドはすっかり言葉を失った。

ゲアンはルドに向けて微笑した。

「帰りましょうジェラルド様。私が責任わたくしを持って、城までお送り致します」

ゲアンはひとまず仲間のいる所へと戻った。

「話は済んだのか？」

バドに聞かれてゲアンは頷く。

「ああ」

「それで、どうなったんだ？」

「オレがお二人を城まで送ることにした。みんなには悪いが、オレが戻るまでこの町で待機していてくれないか？」

「それは構わないが、どれぐらいかかるんだ？」

「そうだな……明日の夕方頃には戻れるはずだ」

「そうか。では、明日の夕方ここで待ち合わせしよう」

「ああ」

ゲアンは仲間と一旦離れ、馬車を店で借りるとそれにマージョとルドを乗せ、ともに町を出て行った……

第一話：〈王家〉 真実の愛の形【姫と王子編】（後書き）

是非、次話も御覧ください

第二話： 〱王家〱 邪念を喰らう物【姫編】（前書き）

今回は姫ルートです。

第二話： へ王家 邪念を喰らう物【姫編】

「姫、着きました」

ドチュールに到着し、ゲアンは馬車を停めた。

「オレはここで待ってる」

手摺に肘を突いてルドは答える。

「分かりました」

ゲアンは先に降り、踏み台を設置するとマージユの座る座席のドアを開け、手を差し延べた。

「……」

マージユはその手に掴まり、むすっとした顔で降りた。

ゲアンとマージユは城下町を進み、城へ向かって歩いて行った。

風も無く穏やかな陽気。平和な町並みが広がっていたが

「何か……全然騒ぎになってないんだけど」

いつもと変わらぬ町の様子に、マージユはがっかりした。

「確かにそうですね」

ゲアンも同意した。一国の姫君が突然姿を眩ましたというのに……まるで無関心のようにこの町は平然としている。

二人が歩いていると通行人の男性に声を掛けられた。

「姫様。御機嫌、麗しゅうございます！どちらかに“お出かけ”ですか？」

呑気なその台詞にマージユは切れた。

「はっ！？ 何言ってるの？ 今、“帰って来た”ところよ！」

それから二人は何人か町の人間に会ったが誰も驚かず、普通に挨拶して来るだけだった。

「何故、みんな私を見ても驚かないのかしら？……まるで、私が居なくなつたことに“誰も気付いてない”みたい……」

マージユはすっかり落ち込んでいた。

「妙ですね……ちよつと聞いてみましょう」

ゲアンは近くにいた男性に声をかけた。

「すみません。お聞きしたいのですが」

「何でしょう？」

男性は振り向いた。

「最近この国で、何か変わったことはありませんでしたか？」

「変わったこと？……あつ！　そついやあ最近、王の様子が……う

つ！」

話の途中女性の蹴りが入り、男性は顔を歪めた。

「あんた！　何言つてんだい。姫様の前だよ？」

女性は声を押し殺して男性を叱つた。

「あの、何か？」

不審に思い、ゲアンは尋ねるが

「いやいやいやいや……何でもありませんよ」

と男性は苦笑いし、明らかに何か隠していそつだった。

「あつ！？　そつだ。残つてる仕事があるんだつた……なあ？」

男性が言い

「あつああ？　そつだつたねえ、あんた」

女性が口を合わせ

「じゃあ、そついうことなんで失礼しま〜〜す！」

二人共逃げるようにその場から居なくなつた。

「……」
「……」

それから歩いて、ゲアンとマージユは城に到着した。しかし中に

入っても、誰も驚いた様子は見せない。

「私、何だか怖くなってきたわ……あの部屋で待ってるから一人で行って来て？」

マージユは益々不安になり、そう頼んだ。

「分かりました。では、行って参ります」

そしてゲアンはマージユを置いて報告に向かった。

ゲアンが王の間へやって来る。中にはドチュール国王エフプロツソが、真つ赤なベロア生地のスにゆったりと腰を掛け寛いでいた。「おお、ゲアン。久しぶりではないか。元気にしておったか？」

「はい、陛下」

ゲアンは王の前に跪き、そう返事した。すると王は微笑した。

「そうか、それは何よりだ。ところで今日はわしに何の用で参った？」

「はっ、只今こちらにマージユ姫がお戻りになられたので、その報告に参りました」

凜とした声でゲアンは答えるが

「何？」

王は意外な反応を示し、こう言った。

「マージユなら“居る”ではないか？……マージユ」

「？」

王が名を呼ぶと黒いカーテンの向こうからマージユの姿が現れた。胸の辺りまである長い金髪、人形のような顔立ち、潤んだ茶の瞳……確かにそれはマージユの姿そのもの。そうとしか言いようがなかった。

「陛下！」

ゲアンが叫ぶ。

「何だ急に大きな声で？」

王は驚き、眉を潜めた。

「それは“偽者”です！」

ゲアンはマージユの姿を指差した。

「何だと？ どこが偽者なのだ！ 見れば分かるであろう。これはマージユではないか！？」

王は苛つき、鼻息を荒くした。

「その者の“影”を御覧ください！」

「影だと？」

それを見た王は愕然とした。

「ああ……！？」

マージユには無いはずの角や尻尾が影には存在し、不気味に揺れ動いている。そして、みるみるうちにマージユの姿から影と同じ姿へと変わり、それは、不気味な魔物の姿へと変貌して行った。

「王を安全な所へ！」

ゲアンは叫び、鞘から剣を抜いた。

「ゲアン殿、後は頼んだぞ！？」

兵士の一人が言い、彼らは急いで王を連れてその部屋から出て行く。

「……」

そして部屋の中はゲアンとその魔物だけになった。

「貴様、何者だ？」

ゲアンは剣を構え、真っ直ぐにその魔物を見据えた。

「我ハ邪悪ナ人間ノ心ニヨリ コノ世ニ生マレシ者……健全ナ人間ノエナジーヲ喰ライ成長スル……悪ノ根源ハ人間ナリ……我ヲ倒ソウト 人間ニヨリ何度デモ生ミ出サレ……途方モナイ話ヨ……」

「たとえそうであっても貴様を倒す！」

ゲアンは揺るぎ無い冷酷な眼差しでそう言った。

魔物はニタニタと不気味に笑い、ゲアンを誘発しようとする。

「良イ事ヲ教エテヤロウ……コウシテイル間ニモ我ニハ パワーガ集まって来ル……人間共ノ激シイ怒リ憎シミガ 我ノ チカラトナ

ルノダ……」

それには構わず、ゲアンは呪文を唱え始めた。

「馬鹿ナ奴メ！ ソンナコトヲシテモ無駄ダト言ウノニ……！？」

次の瞬間 ゲアンが放った魔法が、その魔物を直撃した。そして光の幕が魔物を包み込む。

「グハツ！ オ オノレ……モウスグデ“実体化”デキタモノヲ！」

「やはりな」

冷酷にゲアンはそう呟く。

「グギギ……ギ……全ク動揺セントハ……人間ラシクナイ奴メ！」

光の幕は魔物を押し潰し 光が消えると共に魔物の姿は消滅した。

「……」

戦いを終えるとゲアンは扉を開けた。

「ゲアン殿！？」

すると兵士達が集まって来た。

「魔物は倒しました」

ゲアンが報告すると

「みんな！ ゲアン殿が魔物を倒したぞ つ！」

「おお つ！」

それを聞くなり、兵士達は歓声の声をあげた。

「聞いてくれ！」

その声に歓声は途絶え、皆の視線がゲアンに集中した。

「魔物は倒しましたが、また同じ事が起きる可能性が無いわけでは
ありません」

喜びから一転して緊迫した空気に変わる。

「それはどうということだ！？」

兵士の一人が尋ねた。

「魔物は人間の邪念あれが集まって出来たものだった……」

「人間の……邪念？」

兵士は眉を潜めた。

「そう　そして、その邪念が集まればまた……」

「また現れるというのか!？」

「そういうことになります」

それを聞き、皆は愕然とした。

「では、どうすればいいんだ!？」

兵士は苛つくように結論を急ぎ

「邪念を持たないこと……それしかないありません」

ゲアンは静かにそう答えた。

「ゲアン、遅かったじゃない?」

ゲアンがマージユのいる部屋に戻ると彼女はすっかり暇を持って余し、待ちくたびれた様子だった。

「お待たせして申し訳ございませんが、すぐに陛下の下へ参りましたよ」

ゲアンの急ぐような口振りにマージユは戸惑った。

「何をそんなに急いでいるの?」

「詳しいことは後ほどお聞きください。さあ、急ぎましょう!」

「わ、分かったわ……」

マージユは訳も分からぬままゲアンに連れられ、王の下へ急ぐ。

そして王の間は先程の戦いで修理中の為、二人は別室へとやって来た。

「マージユ!　今度こそ本物のマージユであるな!？」

「え?　ええ……」

王の言ったことにマージユは困惑した。

「……」

王はマージユの影を見て確認する。

「おお、確かに、確かにマージユだ！？ 無事で何よりだった……！」

王はマージユを強く抱き締め

「……？」

マージユはきよとんとしていた。

感動の再会（？）を果たすと、マージユはゲアンの所へ行った。

「私、てつきり怒られるのかと思ってた……」

マージユが言った。

「まあ、良かったではないですか」

ゲアンが微笑む。

「うっくん……」

マージユはなんだか腑に落ちないという顔をした。

「では、私はこれで失礼致します」

ゲアンはお辞儀し、その場から去ることにした。

「ゲアン！」

マージユが呼び止める。

「はい？」

ゲアンは立ち止まり、振り返った。

「もう、城へは来ないの？」

寂しそうにマージユは尋ねた。

「分かりません」

ゲアンが短くそう答え

「ねえ……」

マージユがまた問い掛けた。

「何でしょうか？」

「私も連れてって?」

「マージユはゲアンの側に行き、彼の腕を掴んだ。」

「……お願い?」

「潤んだ瞳で長身のゲアンを下から見詰める。」

「それはできません。あなたはこの国の大事な……?」

「マージユがゲアンに抱き付く。」

「姫、いけません!」

「慌ててゲアンがマージユの身体を自分の身体から遠ざける。」

「私のこと……嫌いな?」

「マージユは哀しい顔をした。」

「そうではありませんが……」

「ゲアンは困り果てていたのだが」

「それじゃあ好きなのね?」

「マージユはそう解釈し、甘々い微笑みをした。」

「……」

「ゲアンは黙秘した。」

「何故黙るの? 本当は嫌いなよね……?」

「マージユは一気に落胆し、ショックのあまり目眩を起こす。」

「姫!?!」

「ゲアンはその倒れそうになったマージユを素早く支えた。」

「姫、お気を確かに!?!」

「その呼び掛けに、マージユはパッチリと瞼を開く。」

「ゲアン……」

「はい」

「一つだけお願いがあるの。聞いてくれる?」

「私にできることでしたら^{わたくし}」

「……」

「マージユは自分の足で立ちゲアンの顔を見詰めた。」

「眼鏡を外して?」

「?」

ゲアンが言われた通り眼鏡を外す。

「外しました」

「貸して？」

ゲアンはマージユに眼鏡を渡した。

「これは一旦、私が預かっておくわ」

「いつ返して頂けるのでしょうか？」

「私のお願いを聞いてくれたら返すわ」

「……」

「ゲアン」

「はい」

沈黙が流れる……

そしてマージユが再び口を開いた。

「私にキスして？」

「……」

ゲアンは言葉を失った。

「お願い、ゲアン？」

マージユは瞳を潤ませ、泣きそうな顔でおねだりした。

「本気でそう、おっしゃってますか？」

「本気よ」

マージユはきっぱりと答えるが

「いくら姫の御要望でも、さすがにそれは……」

ゲアンは困り果てた。

「そんなに拒絶するなんて……」

マージユは悲しみに暮れ、今にも泣き出しそうになる。

「“拒絶”しているわけではありません。私はただ、本当に好きな方とされたほうが良いと思っただので」

するとマージユはすねた顔をした。

「聞いてくれないなら私、あなたに付いてくから！」

「ですから、それは……」

「あなたがお願いを聞いてくれるなら私、これ以上わがままは言わないわ！」

半ば強引にマージユは言い、ゲアンは考え込み やがて口を開いた。

「本当ですね？」

彼はマージユの顔を真つ直ぐに見詰めた。

「ええ」

とマージユは真面目な顔で答える。

「分かりました。その言葉を信じましょう」

そう言うつとゲアンはマージユに顔を近づけ 瞼を閉じた。

「……」

マージユは寸前まで接近する彼の顔を眺め 瞼を閉じ ゲア

ンはマージユの唇にキスをした。

「……」

マージユが余韻に浸っている。

「では、私はこれで」

ゲアンが言うつとマージユは、まだぼーっとしていて……ふらつく

……

「姫!？」

慌ててゲアンはマージユの身体を支え、マージユは支えられながら改めてゲアンの青く凜とした瞳の美しさに魅了される。

「姫、大丈夫ですか？」

心配したゲアンはマージユの顔を覗き込んだ。

「そっ、そんなに顔を近づけないで!？」

マージュは焦ったようにそう叫び、赤面した。

「申し訳ございません。近付かないと見えないので
ゲアンが顔を離す。」

「そっ、そうよね……あなた目が悪いんですものね」

マージュは苦笑いし

「これ返すわ」

とゲアンに眼鏡を返した。

「では、失礼致します」

「……」

ゲアンの言葉にマージュは寂しそうな顔をした。

「お元気で」

ゲアンは踵を返した。

「ゲアン！」

マージュが呼び止める。ゲアンは振り返った。

マージュが駆け寄り、ゲアンを抱き締める。

「少しだけこうさせて？」

マージュはゲアンの胸に頭を付けて寄り添った。

静かに時が流れ、やがてゲアンが優しくマージュの身体を離す。

「もう、行かなくては」

第二話： へ王家へ 邪念を喰らう物【姫編】（後書き）

是非、次話も御覧くださいませ

第三話：〈王家〉 誇り【王子編】

「大変お待たせ致しました」

ゲアンが馬車へ戻ると、待ちくたびれていたルドは居眠りしていた。

「ん……終わったのか？」

ルドは目を覚まし、伸びをした。

「では、出発致します」

ゲアンが馬車を出す。時折ルドが方向を知らせながら進み、やがてスターフォックス城前にある森へとやって来た。

「うわっ……何か急に寒気がしてきた」

その辺一帯が異様な空気に包まれ、ゲアンもそれを感じていた。

「大丈夫ですか、ジエラルド様？」

「ああ……とにかく、この森を抜けたらすぐだ。急いで行ってくれ

！何か……嫌な予感がする」

「かしこまりました。では飛ばしますので、しっかりとお掴まりください」

ゲアンは馬車の速度をあげた。

やがて森を抜けるとそこに予想もしていなかった光景が広がっていた。

「こっ……これは!？」

ルドは慌てて馬車を降り、辺りを見渡した。そこに以前の姿は残っておらず、城やその他の建物全てが破壊され、辺り一面焼け野原と化していた。

「何故……こんなことに……？」

その悪夢のような光景にルドは呆然と立ち尽くしていた。ゲアン

が馬車を止め、そこに降り立つ。

「!?!」

はっとしたルドは家族の名を呼び、そこら中を探し始めた。

「……」

しかし返事は無く、やがて彼は崩れるように地面にしゃがみ込んだ。

「こんなやり方、とても人間の仕業とは思えません」

ゲアンのその言葉にルドは苛立ち、立ち上がった。

「では、いったい誰がやったというのだ!? 人間以外に誰がやる
!」

「“魔”の仕業かと」

「……魔の仕業!? 魔物がやったと言うのか!?!」

「はい、その可能性が高いかと思われまます」

ゲアンは凜とした眼差しでそう答えた。しかしルドは信じれなかった。彼は魔物という物を実際に見たことがない。話には聞いたことがあったが、そんな得体の知れない物のせいにしてこの事を片付けたくはなかった。

「それなら、その魔物とやらをここへ連れて来い。このオレがそいつを仕留めてやる!」

そう言った時だった……

『消工テ無クナレ』

不気味な声と共に唸るような雷鳴が鳴り始める。空に暗雲が現れ、みるみるうちに辺りを暗くした。

「今、何か言ったか?」

「いいえ、私わたくしは何も」

ゲアンがそう答え、ルドは冷や汗を掻く。その瞬間、稲妻が光った。

「危ない!？」

「あ、ああああ……!？」

ルドの頭上に雷が直撃してきたが、バリアにより跳ね返る。

「間に合ったか……」

安堵したようにゲアンが言った。

「？」

ルドは顔を上げ、無事だったことに戸惑っていた。

「ジェラルド様、ここは危険です。後は私わたくしに任せて、早く安全な場所へお逃げください!」

「……」

「さあ、早く!」

ゲアンはそう促すがルドは動こうとしない。

「ふざけるな! オレは家族やこの国の人々の仇を打つんだ。よそ者のお前になど任せられるか!？」

「ご理解ください! 今は……」

再び雷鳴が鳴り響く。

「うるさい! 大体、さっきから魔物がやったなどと訳の分からぬことを……!？」

雷鳴の音が激しくなり、ルドは息を飲んだ。

『醜イ……』

さっきの不気味な声がする。

「？……」

ルドはゲアンと目を合わせ青ざめた。するとゲアンは彼の前に手をかざす。

「何をした？」

「バリアを張りました」

冷静にゲアンはそう答えたが、ルドはますます困惑した。

「お前……いったい何者だ！？」

その時、辺りが一瞬激しく光った。その直後、先程よりさらに強力な稲妻がそのバリアを直撃する。

「！？」

そのあまりの衝撃に耐え兼ねてバリアが軋み、亀裂が生じた。

「ジエラルド様、これ以上強力な稲妻が来たら今度こそバリアでも防げません！早く、お逃げください！」

「黙れ！？ 逃げてなどいられるか！」

次の瞬間、再び稲妻が光った。そして間隔も空けず、すぐに雷は落ち……

「あゝあゝ あああ………！！」

ゲアンを直撃し、彼はその場に倒れ込んだ。

「ゲアン！？」

ルドの周りには一際厚くなったバリアが張られていたが、今の落雷のショックを受けてバチバチと音を立てている。

『次八 才前ダ』

その声が出た途端、真っ暗な空から一筋の光が差し込んできた。その光が地面に倒れたゲアンの身体を包み込む。

「ゲアン!?」

ゲアンの身体がぴくりと動く。

「フォ……ガード……」

そして彼はゆっくりと瞼を開き、起き上がった。

「いったいどうなってるんだ!? お前は今、雷に打たれて死んだはずじゃ……?」

「死ぬ寸前に助けられました」

落ち着いた声でゲアンは答えるが、ルドは腑に落ちずに眉を潜める。

「助けられたって……誰にだ?」

「私の師にです。今、天から差し込んだ光は彼によるものです」
わたくし

ルドは辺りを見渡した。しかし彼ら以外に誰も見当たらない。

「どこにいるんだ?」

「ここにはいません」

「どういうことだ? いないのにどうやって助けられたんだ!」

「彼の力を持つてすれば離れた場所への魔法の使用も可能なのです」

「今度は “魔法” か? 理解に苦しむ……」

魔法の認識も薄かったルドは更に困惑した。すると真つ暗な空に再び一筋の光が差し込み、それが序々に広がって行った。

『ゲアンよ、時は満ちた。今こそ私と力を一つにし、悪を葬り去るのだ』

その声が出したのは空からだった。

「何だ今の声は!?!」

「今お話しした私の師、フォガードの声です」

ゲアンがルドの周りに新たにバリアを張る。そして鞘から剣を抜

き、天に掲げ　そこへ空からの光が集中した。

「今度は何が始まるんだ……!?」

ルドはどうしていいのか分からず、それを黙って見ているしかなかった。

雷鳴が再び鳴り始め、その低音が大気を震わせる。その音はルドの脳裏に最悪の事態を予測させ、その不気味な前触れにこれまでにない恐怖心を与えた。

『撃て　　っ!』

フォガードの掛け声でゲアンは剣を振り下ろす。その剣先から反射した光は“ある方向”に衝突した。

『後悔サセテヤル……思イ知レ　　ッ!』

激しく空が光り次の瞬間、稲妻が空からジグザグに降りて来る。

「!」

その稲妻とゲアンの放つ光りが衝突した。ゲアンは呪文を唱え、再び剣を天に掲げると天の光がそこに降り注ぐ。そして先程より多く力を溜め込んだ。

『いかん！ その剣では、それ以上持たぬ。撃て！』

ゲアンの剣が軋み、とうとう亀裂が生じた。

「うおおおお　　っ！」

ゲアンはついに剣を振り下ろした。剣先から彼とフォガードの魔力を込めた光が形の無い悪の根源に向かって飛んで行く。

『己　　ッ！』

同時に空から激しい怒りを表すかのように巨大な稲妻がジグザグを描きゲアンの放った光に向かって走る。それらは激しくぶつかり合い、次の瞬間……

空一面が真っ白になった。

「……うっ！」

呻き声とともにゲアンが瞼を開ける。

「ゲアン!？」

それを心配そうにルドが見下ろしていた。

「ジエ……ラルド……様」

身体中が軋むように痛い。ゲアンは自分が地面に倒れていることに気付いた。

「良かった……もう、目を覚まさないのかと思った……」

「……」

ゲアンは痛みを堪えつつ俄かに顔を歪めながら起き上がった。

「おい、無理するなよ？」

「敵は……敵はいつたいたいどうなったのですか!？」

危機迫るようにゲアンは尋ねるが

「もういない」

ルドは首を横に振った。

「……」

「お前が倒したんだ。覚えてないのか？」

「ええ、情けない話ですが全く……最後に攻撃したことまでは覚えているのですが、その後どうなったのか……」

それを聞いたルドは目を細め、静かに言った。

「情けないのはオレのほうだ」

「そんな、あなたは必死で戦おうとしたではありませんか？」

「戦ったのはお前だ」

「そうですか……」

「分かってるんだ。オレは口先だけで何もしちゃいない。あんな強大な敵に立ち向かおうなど愚かすぎた」

「ジエラルド様……」

「ゲアン、お前には本当に感謝している」

ルドは穏やかに微笑し

「実はあの後、生存者が見付かったんだ」

手招きすると、どこからともなく老夫婦が現れた。

「オレ達はこれから、この地で暮らすことにした。そして最期は

この地に眠りたい」

「そうですか。私もあなたのお側で力になりたいのですが……」

沈んだ口調でゲアンが言うと、ルドは軽く微笑んだ。

「気にするな。お前にはもう充分助けてもらった。後はお前の自由
にしてくれ」

「ありがとうございます……では私はこれわたくしで」

ゲアンはお辞儀して馬車へ向かった。

「ゲアン」

ゲアンが振り返る。

「はい」

「お前は“勇者”か？」

伺うような眼差しでルドは訪ねるが

「そうかもしれません」

ゲアンのその答えに眉を潜めた。

「何故、そう曖昧なんだ？」

「肩書きだけの勇者にはなるな　というのが私の師わたくしの教えでして」

「そうだったのか……だが、お前にはそう呼ばれるだけの価値がある」

「そう言っただけで頂けると光栄です」

ゲアンは青く凜とした瞳を細め、微笑した。

「ゲアン、お前のことは一生忘れない。お前がオレをここに連れて
来なかったらオレは……！」

再びルドの中に悔やむ思いが込み上げ、彼は拳を強く握り締めた。

「これが運命だったのかもしれない」

「運命？」

ルドは疑問の表情でゲアンの顔を見た　穏やかで、憂いを秘めたような瞳。

それからゲアンは語り始めた。

「私は十歳の時、住んでいた村を魔物により滅ぼされました」

「!?!」

あまりの衝撃にルドは言葉を失った。ゲアンは話を続ける。

「その時私は最後の生き残りとして逃がされ、生き延びることを託されました」

「……」

「しかし私の脳に焼き付いたのは惨劇と絶望でしかなく、私はその

時　『世界が崩壊した』……そう思いました」

「!?!」

ルドはぞつとした。その時のゲアンの瞳は哀しむというより冷酷で、殺意を感じさせるほど凍り付いて見えた。

「お前もオレと同じ目に遭っていたのか?……」

ゲアンは少し目を細める。

「ええ、しかし決定的な違いがあります」

「決定的な違い?　何だそれは?」

「あなたは逃げなかった。しかし、私は逃げた　ということですよ」

「しかしそれは、お前が生き延びるために逃がされたから仕方のないことではないか!?!」

ルドは否定して声を荒げたが、ゲアンは静かにこう言った。

「そう、仕方がなかったのです。そして私はその罪を背負い……“生かされている”のです」

それは、あまりに絶望的な言葉だった。

「それは罪なのか?　オレは違うと思う。それはきつと……お前に与えられた試練だ!」

「……」

「“生かされている”なんて言うな!それではまるで　“死にたい”　と言っているようにも聞こえるぞ!?!」

吐き捨てるようにルドは叫ぶ。

「そうです。私はあの時、本当は死んでしまいたかった」
ゲアンは消えてしまいそうなほど儂げな瞳をした。

「ゲアン……」

それがあまりにも哀れでルドはゲアンを抱き締めた。

「お前は、その気持ちを押し殺して生きて来たんだな……」

「あまりにも重荷でした……しかし私の身代わりになって助けてくれた母の死を無駄には出来なかったのです。私は運命を受け入れました」

「ではもう“死にたかった”なんて言わないでくれ」

「……」

「お前がいてくれたから今のオレがあるんだ！」

「ジエラルド様……」

「だってそうだろ？ 道を外しかけていたオレをここに連れ戻し、最後まで見放さずに助けてくれた。そのお前が“死にたかった”なんて言うのはやめてくれ！」

そんな絶望的な言葉は言っただけで欲しくない。心からルドはそう思った。

「分かりました」

ゲアンは静かにそう言い、穏やかな笑みを浮かべた。

「つい弱音を吐いてしまいました。申し訳ありません。あの惨劇以来ほとんど感情を失ったと思っていましたが、ここに来て再びあの悪夢を思い出し、感情的になってしまったようです。どうか、お許しを」

「もう、あんなこと考えるなよ？」

「はい。ご心配をおかけしました」

「もう大丈夫だな？」

ルドは安堵し、微笑んだ。

「お前とこんなに話せて良かった。ありがとう」

「とんでもない。こちらこそ、お礼申し上げます」

「いつかまた会えるといいな？」

「私が役目を果たし終えた時、またお会い致しましょう」
わたくし

「ああ、では頑張ってください。陰ながら応援している」

「ありがとうございます。では、お元気で……」

ゲアンは一礼し、そのスターフォックス王国の跡地を後にした。

第三話：〈王家〉 誇り【王子編】（後書き）

是非、次話も御覧くださいませ。

第四話：引力【予感編】

ここはラフエ レオの町。

「ゲアンは今日の夕方頃に帰って来るはずだ。それまでは自由行動にしよう」

バドが言った。

「アール。私、久しぶりに踊りたいわ」

「よし、じゃあやるか。バド、オレ達はその辺で芸やってるか
ら！」

とアール・グレーはそう告げるとジャスミンと一緒に駆けて行っ
た。

「芸？」

二人の芸を見たことがないバドは疑問の表情だった。

「そうだよ。アールが笛を吹いて、ジャスミンが踊るの！」
瞳を輝かせながらアークが教える。

「そうか……」

「あつ！？ 待つて待つて、オレ客引きやる〜〜！」
二人の後を追ひ、アークも走って行った。

「……」

「……」

レミアがそこに残り、バドと二人だけになった。

「オレ達も客引きやるか？」

「……」

バドの提案にレミアは微妙な表情をした。

「う〜ん……」

困ってバドの眉が下がる。レミアはしっかり者だが、知らない町
で一人にするわけにもいかない。が、どうしたものかと。

「じゃあ、こうしよう」

二人は賑やかそうな通りへとやって来た。

「今から適当に話を合わせてくれ。頼んだぞ？」

小声でバドがレミアに伝え

「え、ええ……」

レミアは頼りない返事を返し、さっそく彼らは“それ”を始めることにした。

「なあ、知ってる！？ 今日、この町で超～～美人なダンサーがシヨ～やるんだってえ！」

と以上に上機嫌なバドの演技。

「へえ、すごいわあ！」

棒読みのレミア。

「……………」

会話が途切れた。

指をくわえた幼い子供がそれを珍しそうに眺めている。

「『どこでやってるの？』だ」

すかさず小声で助言するバド。

さっきの子供は母親に連れられて行った。

「どこでやってるのぉ！」

「パン屋の側って言ってたよ！」

「へえ……………」

とここでまた会話が途切れた。周囲の反応は曖昧だったが、かまわずその不自然な会話を続けようとするバドは小声でレミアに促した。

「『早くみたいね』とか何か言ってくれ……！」

「早く、そのダンス見たいね！」

堅いレミアの台詞が痛々しかったが

「早く行かないと始まっちゃうよー！」

と一生懸命なバドだった。

その不自然な会話で締めくくると、二人はその通りから素早くエスケープした。

次に二人は別の通りにもやって来た。石造りのもとは白い壁だったであろう建造物が立ち並ぶ町並み。何色ともつかぬ黒ずんだ石畳古びたような風景が続いていた。ひっそりと静まり返り、湿気を帯びた空気を漂わせている。

「人がいないな……」

愕然とするバドだった。今の時間、その通りは無人大ったのである。

「あつ！ あの店は？ 人がいるかも」

レミアが飲食店を見付け、二人はそこに入ることにした。

中へ入ると木材を組んで作られた椅子とテーブルが並んでいた。

そこにいたのは旅人風の男性と歳がばらばらで数人の男女。同じ服装で、いかにも仕事の合間に来た人風だ。

「ごめんなさい」

勿論入ってすぐにレミアは、謝ったが

「気にするな」

バドはそう返し、二人はそこで寛ぐことにした。

空いていた隅っこの丸いテーブルの席に向かい合わせで座る。バドが珈琲、レミアは紅茶を頼んだ。

レミアはカップを両手で包み込むように持って飲む。バドは頼杖を突き、レミアがゆっくりとカップを傾け 途中でバドの姿が視界に入り、レミアは少しドキツとした。

「何か、これってデートみたい……」

レミアはなんだか照れくさかった。彼女はデートというものをした経験がない。だが、懂れてはいた。

「デートしようか？」

「え？」

予想外のバドの言葉にレミアは驚いた。大きな瞳をさらに大きく見開く。

「……………」

バドは珈琲を飲み干すと、また頬杖を突いた。柔らかな表情をしている。それは見詰められると溶けてしまいそうなほど甘く、香り付けの洋酒のように仄かに喉を熱らせる魅惑の表情だった。

「本当に？」

純粋なレミアには少し刺激が強かったが、同時に今の彼の言葉を確かめようと、半信半疑で尋ねてみた。彼の答えは

「ああ」

という短い返事だった。切れ長の美しい瞳で優しく微笑している。

「……………」

レミアは動揺して細かく瞬きした。胸が高鳴る。顔が熱くなるのを感じ、赤面していないか気にするが、興奮して慌ててしまう。気が付くと紅茶をあつという間に喉に流し込んでいた。その様子を微笑ましく、バドは眺めている。

「どうする？」

そして聞き返す。彼のその問いかけが妙に大人の雰囲気漂わせているように感じられ、レミアはますます緊張してしまった。彼の美貌は全てにおいて殺人的だ。それは容姿だけではなく、深みのある声はテノールのような優雅な響きで胸郭を刺激する。透き通るようなグレーの瞳はガラス玉のようだ。均整の取れた体型、所作の一つ一つも男性的だが妙に色気があり、綺麗すぎてまともに見れない。これほどの美貌の持ち主に……………」

「……………」

「やめるか？」

「えっ……………」

一瞬でレミアの表情が哀しい表情へと変わった。窓の奥に広がる

絶景を眺めていた少女の目の前のガラスに亀裂が生じる。それは彼女の憧れを意味していた。

「じゃあ行こうか」

バドが立ち上がる。とガラスは元通りになっていた。それを開け、外に広がる絶景を目にした瞬間が訪れる。彼の言葉は本当だったのだ。

「？」

衝撃の後に衝撃が続き、彼女は困惑してしまう。すぐには話を飲み込めず、結局どうなったのか分からず、不安な瞳で彼を見詰めた。

「デートだぞ？」

穏やかに彼が微笑み、その一言でレミアの瞳は一気に輝く。

「ええ」

と彼女ははにかんだ。

二人が店を出ると通行人の数がいくらか増えていた。

「ねえ」

「ん？」

「私達、恋人同士に見えるかしら？」

恥ずかしそうにバドに尋ねるレミア。こうして男性と並ぶといよいよデートなんだという実感が湧いてくる。

「うん、どうかな？」

バドは少し首を傾げ、微妙な答えを返した。

「じゃあ、これだったら？」

レミアはすねたように大胆にもバドの腕に掴まる。

バドが優しく微笑した。

「これなら見えるよ」

それを聞き、レミアはやっと満足気に笑った。

初めてのデートですっかり夢気分のレミアだったが、黙ってバドに付いて来るといつの間にか殺風景な所に来ていた。店や民家からどンドン遠ざかっている。街のはずれもはずれ、平らにならしただけの小石混じりの道が続き、脇には草が生い茂る。

「どうやらそこは土手のようだった。」

「バド、これ以上行っても何も無いわよ？」

家々などの建物が小さく見える。街をデートするんじゃないかったのか？ とレミアは少し不満気だった。

「何も無いほうがいいんだ」

バドはそう笑顔を返し、更に奥へと進んで行く。その奥に草原を見付けると彼はそこで足を止めた。

「ここにしよう。ここならのんびり寛げる」

「そうね……」

レミアはふとデートってこういうものなのかなあ？ と心の中で呟いた。

「こういう静かな所でゆっくり話をしたかったんだ」

草むらの上にバドが腰を下ろし、レミアはその左側に座る。彼が髪を掻き上げると左耳にしているピアスが揺れた。

「素敵なピアスね」

レミアはその稲妻型のピアスが揺れる様子をぼんやりと眺めた。

「そうか？」

「ええ……それ、誰かにもらったの？」

「ああ、知り合いからな」

「そう……知り合いって“女の人”？」

なんとなくだった。レミアはそう尋ねていた。そのピアスは彼にとてもよく似合っている。デザインも中性的で、自分が選んで買ったといってもおかしくない。だが、そう尋ねていた。

彼は躊躇いもせず

「ああ」

そう答えたが、レミアには含みがあるように感じた。彼の瞳が過去おくを見ているように見えたから……

「その人、バドの恋人？」

「いや、恋人ではない。ただの知り合いだ」

「本当にただの知り合いなの？」

問い詰めるように聞いてくるレミアに、バドは少し戸惑う。レミアは好奇心ではなく、ただ、気がかりだったのだ。

「本当だ。何故そんなに疑う？」

「何となく聞いてみただけよ」

実際そうだった。自分でもよく分からない。だからなんだというわけでもないはずだ。恋人だったとしても……

「そうか」

「……」

そこで会話が途切れる。その後沈黙が流れた。清々しい、少し肌寒い風が吹きぬける。

その沈黙が

「何でもらっ……」「レミアは……」

打ち切られた。二人が同時にしゃべろうとしたのだ。

「ふふっ……先に言っていたいよ」

バドは楽し気に笑った。

「何で、そのピアスもらったの？」

レミアは無意識に、僅かだが口を尖らせる。その“無意識”が、素直な彼女の感情表現だった。

バドの表情が変わる。風により流れてきた雲が影を作り、文字通り雲行きが怪しくなったことを演出した。

「魔物に取り憑かれていた彼女をオレが助けたんだ。その時のお礼にもらった」

「それってもしかして、その“腕”の……？」

「ああ」

「！？」

レミアは気まづくなった。聞いてはいけない事を聞いてしまったような気がして。

「あの頃のオレは自分の力を過信しすぎていてな」

その空気を解きほぐすようにバドは優しくレミアに微笑みかけた。柔らかなその笑みは、どこか陰りを帯びているようにも見える。

「ハンターになって日も浅い頃だった。あまりにも順調に仕事が片付き、オレは物足りなさを感じていた。その時丁度ある噂を耳にした」

「噂？」

「ある町で凶悪な魔物に取り憑かれている女性の噂だった。霊媒師が悪魔祓いを行ったが追い越えずに困っていると。ハンターにも依頼したらしいが、皆失敗に終わりお手上げ状態だった。それを聞いたオレは迷わず依頼を引き受け、その町に直行した。“オレなら出来る”そう思っていた……」

「……！？」

その時、彼の目を見てレミアは鳥肌が立った。それを語るバドの目がまるで別人のように見えたからである。それが魔に対するものなのか、彼自身に対する怒りなのかは分からなかったが、何か強い意識がそこに込められているように感じさせた。

「しかし違った……魔物の強さは予想を遥かに超えていた。倒せないと判断したオレは　この腕に封印した」

「他に倒せる人が現れるのを待つことは出来なかったの？」

溜まらず嘆くように、レミアは彼に哀れな視線を向ける。

「そんな時間は無かった。あの時助けていなければ彼女は死んでいた」

「そうだったの……」

何故救った人が犠牲にならなくてはならなかったのかとレミアは彼の悲劇を酷く悔やんだ。

ふとバドは表情を緩める。

「次はオレが質問してもいいか？」

「え？ ええ」

彼がまた微笑みかけてきたので、レミアはドキツとした。

「レミアとゲアンはどうやって知り合ったんだ？」

「私が住んでいた港町にゲアンが来ていて、その時助けてくれたの……」

その事を口にした途端“あの頃”を思い出し、レミアは口ごもった。

「……」

バドはそんな彼女を静かに見守っていた。彼女が話しを再開する。「私、魔女の娘でしょ？ だから苛められてたの。ほとんど町ぐるみで差別を受けてた……クスツ」

何故かレミアはそこで笑った。哀しいのに何故だろう。今が幸せだから、過去の不幸が滑稽にでも感じたのだろうか。

「でもね、ゲアンに会って救われたの。普通の人として扱ってくれて……この人に付いて行けば自分の運命を変えられるかもしれない！ そう思ったの。あの時が始めてだった。人に優しくされるのは……」

「そうか」

バドは優しく小さな微みを浮かべた。

「バドはゲアンとどうやって知り合ったの？」

レミアは軽く首を傾げる。

「オレの師匠が、山で倒れている子供を発見して連れて帰って来たんだ。それがゲアンで、その時オレ達は知り合った」

「そ、それって“誘拐”なんじゃ……！？」

レミアは青ざめた。

「いやっ、そうじゃないんだ！ すまん、オレの説明不足だった……」

慌ててバドは訂正し、苦笑した。

「？」

レミアはまだきょとんとしている。

「その時ゲアン（あいつ）は十歳の子供だった。しかしそんな悲惨な目に遭遇しながらもゲアン（あいつ）は立ち直った。いつしか不幸に浸るのをやめ、自分のような被害者を出さないようにする為、勇者になった。その志は立派だ。だがゲアン（あいつ）は自己犠牲心が強すぎる」

「自己犠牲心？」

「ゲアン（あいつ）は人を救うために自分の命を惜しまない。いつでも命懸けで悪に立ち向かう」

「それならバドだって、女の人を助けるために魔物を腕に封印したんでしょ？ あなたも自己犠牲心が強いじゃない」

「オレは死ぬ気でなどやっていない。“勝つつもり”でやった。封印は他に方法がなかったただけだ」

「……」

その時の悲劇を何故、彼はピアス（かたち）として残しているのか。特別な理由があるのかもしれない。しかしレミアは聞くことはしなかった。

彼女はそっと封印のしてある彼の左腕を持ち上げた。手首に嵌めた幅の広い革のブレスレット、その下には封印が……

「痛くないの？」

「ああ」

「そう……」

レミアはその腕を静かに下ろした。大きな掌は逞しく見える。しかし手首の封印が彼を縛り付ける呪縛のようで、彼を弱らせている気がした。

ゆっくりと彼女が顔を上げると彼と目が合った。

「……」

「……」

二人はそのまま見詰め合う。

レミアはバドの透き通るようなグレーの瞳を。

バドはレミアの大きな赤茶色の瞳を。

レミアが先に口を開いた。

「バド」

「ん？」

「髪、長いわね。私と同じくらい？」

「そうだなあ。少しだけレミアのほうが長い」

「ちゃんと見せて？」

そう言つとレミアは、大胆にもバドの上着の襟の内側から隠れた髪を前に引き出した。落ち着いた茶でストレートの髪は意外と長く襟足の長さは鎖骨の辺りまでであった。

「長い……！？」

「……」

「あつ、ごめんなさい！」

無言のバドを見てふと我に返り、慌ててレミアは彼の襟足の髪を戻そうとする。

「？」

「どうした？」

手が止まった彼女を不思議そうにバドは見詰めた。

「う、ううん……あ、あのね……」

レミアは急に恥ずかしくなり、赤面した。
「ん？」

「……………」
レミアは何か言いたそうだが、無言で首を横に振る。
「どうした？」

「……………」
レミアの顔は更に赤くなった。接近すると恥ずかしい。でも近付くと“好い香り”がして離れたくなかった。
「？」

バドは自分で髪を整える。するとまた

「好い香り……………」

つい彼女は口に出した。

言っちゃった！？

「好い香り？ この香水のことか？」

「香水？」

「ああ」と彼は頷いた。

「香水付けてるんだ？ 好い香りね……………」

恥ずかしそうにレミアが言い、バドは微笑した。

「この香り好きか？」

「ええ……………」

「嗅いでみるか？」

「ええ……………」

えっ？ ええ……………っ！？

自分で返事しておきながら、レミアは焦った。

バドが髪を後ろに流し、耳を出す。

「この辺」

と彼が言ったのは耳の後ろだった。レミアはドキドキしながら鼻を近付ける。するとまた

好い香り……………！

その香りに酔い痴れた。

「くんくん……」

また嗅ぐ。

「うああ……何て好い香りなの……!？」

彼女はすっかり虜になっていた。

「気に入ったか？」

顔を斜めに傾けていたバドが横を向く。顔が近くなり、レミアは更に意識して鼓動が激しさを増した。息遣いも聞こえてきそうなのどの距離。レミアは恥ずかしいのに目を逸らさず、バドも無言で彼女を見詰めていた。

しかしその瞳からは何も読み取れない。

「バド」

「ん？」

「こういう時、バドはどうするの？」

「どうするって？」

バドは不思議そうな顔をした。

「例えば……キスするとか」

思い切って聞いたものの、レミアは恥ずかしくなって彼から視線を外した。するとバドは微笑した。

「恋人になったら教えてやるよ」

「何よ、それ……？」

レミアが口を尖らせバドを睨む。そして何か閃いた。

「そうだわ。さっきジャスマンのことを“超美人”だって言ったけど、ジャスマンのことそんな風に思ってるの？」

と何うようにバドを見詰めるが

「美人だと思うただけだな」

とあっさり答えるバド。

「本当にそれだけ？」

レミアがまた問い掛けるが

「ああ」

答えは同じだった。

「ふ〜ん。そうなの〜」

それを聞いてレミアは密かにはにかんだ。

「ふっ！」

「？」

「ふふっ！ふふふっ……！」

突然バドが吹き出した。

「バド？」

レミアは不審な眼差しで彼を見た。

「ふっ！？……ふふふ！ あははは！」

とそれを見て更に激しく笑い出す。

「ちよつと、どうしたのよバド？ 何で笑ってるの！？」

「ふふふふ……レミアの顔見てたら……ふふっ！ お、おかしくて

……」

バドは笑いすぎて苦しそうに腹を抱えた。

「酷い……何それ？ 最低……っ！」

レミアは今にも泣き出しそうになり顔を歪めた。

「ふふふふ……！」

バドはまだ笑っている。

「私の顔ってそんなに“おかしい”！？」

「ふふっ……え？」

彼がレミアの顔を見ると、大きな瞳から一筋の涙が流れ頬を伝った。

「あつ？ 違うんだレミア！ オレは君の顔の表情がころころ変わるのがおかしくて……それで笑ってたんだ！」

「ぐすっ……そうなの？……」

レミアの瞳に大粒の涙が溢れている。

「ああ、だから泣かないでくれ……？」

バドはすっかり困り果てた。

「分かったわ……ひっく……」

バドは優しくレミアの頭を撫で、慰める。

「バド……」

「ん？」

「私って、幼い子供みたいでしょ？」

「そんなことはない……きっと純粹なだけだ」

彼は優しく微笑した。

「バドは大人の女性が好きなんでしょ？」

赤く泣き腫らした目で彼を見るレミア。

「別にそういうわけではないが……」

「じゃあ、年下でも好きになる？」

「年は関係ない」

「10歳も年が離れていても？ それでも好きになる？」

「ああ」

「そう……」

悲しみに暮れていたレミアの表情が和らぎ彼女は、はにかんだ。

するとバドは彼女の頭の上に軽く手を乗せるとそのまま立ち上がる。

「そろそろ行くか」

「え？……」

レミアはまた哀しい顔をした。

「もうすぐゲアンが戻って来る頃だ」

レミアは立ち上がるとバドの腕に触れた。

「さっき言ってたこと教えて？」

「え？」

「“恋人になったら教えてやる” って言ったこと」

「……」

バドが彼女を見下ろすと大きな瞳で彼を見上げていた。

「……」

彼は長身の身体を前に傾ける。近づく彼の顔にレミアは硬直して佇む。彼は彼女の髪にキスをした。頭上に僅かだが、その感触が伝わる。

「また今度な」

彼はそう付けたし、レミアはただただ啞然とそして茫然と立ち尽くしていた……

第四話・引力【予感編】（後書き）

是非、次話も御覧くださいませ。

第五話：引力【再会編】

二人はアールとジャスミンの様子を見にパン屋の前に向かった。すると結構人が集まっていた。

「良かった」

「オレ達も見に行こう」

二人はその人だかりに紛れ、見物することにした。

「おい、見ろよあれ！？……」

人だかりの中にいる体格の良い男が言った。

「え？ 何がだよ」

ともう一人の無精髭の男が無関心そうに聞き返す。

「ほら、あのでかくて髪の高い兄ちゃんだよ！」

「あれがどうかしたのか？」

「よく見ろよ！」

体格の良い男は苛立ちながら指差すが

「ここからじゃよく分かんねえよ」

「来いっ！」

無精髭の男の腕を強引に掴むと見物客を掻き分けて奥へと進み

「おっとおめんよ！」

と長身の男性にぶつかつた。

「？」

男性が振り替えると美しい切れ長でグレーの瞳に広角の上がつた

口をしていた。

「！？」

それを見た無精髭の男は仰天した。

「！……」

するとその男を体格の良い男が強引に引きずり、素早く逃げるように退散する。そして、ある程度離れた場所までやって来ると体格の良い男は立ち止まった。

「ちやんと見たな？」

「ああ」

無精髭の男はゴクリと生唾を飲み、二人は顔を見合わせた。

「あれ……“ビアーナ”そっくりじゃねえか!？」

「だろ？ あれはきつとビアーナの生き別れになった弟に違いねえ

……」

「いくら似てるからって、それはねえだろ？」

無精髭の男は軽く笑うが、体格の良い男はかなり真剣だった。

「いや、きつとそつだ。あんな美形、そつはいねえ」

「ははは……この町にいる男は不細工ばつかだしなあ」

無精髭の男がへらへら笑い、体格の良い男が頭を小突く。

「馬鹿つ！ とにかくなあ、このことをビアーナに知らせるんだ」

「痛……っ！ まだ店始まってねえのに、どこにいるのか分かつて

んのかよ？」

「知らねえよ。だから今から探すんだ。手伝え！」

体格の良い男が捲し立てると

「いた」

「馬鹿！ そんなすぐに見付かるわけ……！」

「おっいビアーナ！」

遠くに背の高い女性がいた。無精髭の男の声に気付き彼女が振り

向く。

「本当かよっ!？」

体格の良い男はすぐに駆け寄った。

「ビアーナ、ちょっといいか？ 話したいことがある」

「いいけど何の話？」

女性は疑問の表情を浮かべ、首を傾げた。彼女は営業前の普段着だったが胸元の空いたワンピースになかなか値打ちの高そうなネックレスをぶらさげ、昼間のこの町には派手で浮いて見える。

「お前、弟を探してるって言ってたよな？」

「ええ……」

男の血走った目に彼女は圧倒された。

「お前に似てる奴がいた」

「え？」

彼女は大きく目を見開いた。

「さっきパン屋の前でダンスを見物してた。まだいるかもしれねえ！」

「……」

男は急かすが、彼女は驚きのあまり放心状態になっている。

「何してんだ！ 弟に会いたかつたんだろ！？」

苛立った男は彼女の細い腕を強引に引っ張った。

「あつ……」

よろめきながら男に連れられ、彼女はパン屋の側までやって来る。

「いないな……」

「……」

しかしそこに見物客はおらず、既にダンスは終わった後だった。

ビアーナは愕然とし、肩を落とした。

二人が諦めて行こうとすると

「バド つ！」

遠くのほうで声がした。

「……」

ビアーナが立ち止まる。

「あつ！？ あれだ、いたぞ。あそこにいる背の高い奴！」

体格の良い男が指を差したその方向を彼女が見ると離れた場所に長身の男性がいた。そこへ小柄な少年が駆けて行く。他の人物は彼女の目には入らなかつた。

「先生が帰って来たよ。今、馬車を返しに行つてるとこ」

少年 アークが言った。

「そうか」

と長身の男性 バドが返事を返し、この様子を遠くでビアーナ達が見ていた。

「ビアーナ、早く行けよ！」

男が急かす。

「でも……もし、違ってたら……」

「何言ってるんだ今更！ そんなこと確認してみなけりゃ分かんねえだろ！？」

「でも、怖いわ……」

「頑張れよビアーナっ！」

と男は彼女の背中を押した。

「……？」

彼女が不安そうな顔で振り向き

「ほら、行けっ！」

とまた男が一声掛け、彼女は怯えながらも前へと進んだ。

彼女がバド達の側までやって来ると彼らの視線が彼女に集中した。

美しい切れ長でグレーの瞳、口角の上がった口、すらりと伸びた背、

その美貌は圧倒されるほど妖艶で、まるでバドと瓜二つ。

「あなた……“バド”っていつの？」

彼女は勇気を出してバドにそう尋ねた。

「ああ、そうだけど」

とバドが答え、ビアーナの目から涙が溢れ出す。

「バド……！」

そして彼女はバドを抱き締めた。

「ちよつと……！？」

突然の出来事にバドは困惑し、他の仲間達も啞然としていた。

「本当にバドなのね？」

彼女は顔を上げ、潤んだ瞳で長身のバドを見詰めた。

「ああ」

「会いたかった！ 私の……“弟”」

「弟っ！？」

アークが驚いて思わず大きな声を出す。

「オレがあなたの弟？ あなたはオレの……」

困惑するバドにビアーナは言った。

「姉”よ”」

「姉さん……？」

彼女の容姿の特徴がそれを証明するかのようには彼と類似していた。瞳の色だけでなく形も、輪郭までもが似ている。髪の色は染めているのか赤茶だが、二人が並ぶと疑い様もなかった。

そこへゲアンがやって来る。それに気付くと慌ててレミアが彼に状況を説明した。

「バド、私の家に来て？」

愛しげに弟を見詰めるビアーナ。

「ごめん、姉さん。オレは仲間と共に行動している。だから一人で勝手な行動は出来ないんだ」

それを聞いたビアーナの顔から笑顔が消えた。

「……」

ゲアンがバドに近付き、そつとバドの肩に手を置く。

「バド、話は聞いた……姉さんとゆっくりしておいで」

バドは仲間達と一旦離れ、ビアーナの家以案内された。着くとそこは平屋のアパートだった。

「夢みたいだね。あなたとこうしてられるなんて……」

ソファアにバドと隣り合わせで腰掛け、ビアーナは幸せに満ち溢れた笑みを浮かべた。

「姉さんは、ここに一人で住んでるの？」

「ええ、そうよ」

「そつ」

テーブルの上にはシガレットケースと煙草の吸い殻の入った灰皿、オイルライター、貴金属が無造作に置かれていた。

ビアーナがティーポットを傾け、バドのカップにお茶を注ぐ。

「ありがとう」

ビアーナがバドの全身をじっくりと眺め

「大きくなったわね」

とバドの手と自分の掌を重ねた。

「手なんかこんなに大きい……私よりもずっと小さかったのに」

「姉さんはオレのこと何でそんなによく覚えてるの？」

「だって私、あなたのおしめの世話までしてあげてたんだもの」

ビアーナは幸せそうにバドに微笑みかけた。

「そうなんだ」

「そうよ」

漠然と返事を返す弟に彼女は詰め寄った。彼女の付けている香水が漂う。それはバニラのように甘く、ムスクのように官能的でまるで喉が焼け付くように濃厚だった。彼が好むアクア系の香水とはまるで違う。

「こんなに素敵なお男性になってるなんて思わなかったわ」

ビアーナはうつとりした目でバドを見詰めた。その身体を舐め回すように。

「姉さん、父さんや母さんは今どうしてるの？」

バドのその問い掛けにビアーナの表情が曇った。

「父親は女を作って消えたわ。母親は……自殺した。あなたを捨てた後、気が狂ってね」

「何で母さんはオレを捨てたの？」

ビアーナの眼の色が激しい憎悪の色に染まる。

「父親の愛人があなたを悪魔の生贖にしようとしたの。そしたらあの母親があなたを捨ててしまった。あの愛人^{おんな}をどうにかすれば良かったのに、あなたを犠牲にした……ああなって当然よ！ 死んだって許されないわ！」

彼女は怒りと嘆きで興奮し、感情を露わにした。

「……」
ビアーナの身体が興奮で小刻みに震え、バドはそれを落ち着かせるように彼女の背中に手を当てた。

「バド……」

彼女は彼に抱き付き、彼は優しくそれを受け止める。

「もう一つ聞いてもいいかな？」

ビアーナの眼がぴくりと反応した。

「姉さん以外に兄弟はいるの？」

彼にとつては気になることだったが

「いないわ」

そう短く返され、バドは少しがっかりした。

「ねえ、バド」

「何？」

「私達って似てるんですって」

ガラリと表情を変え、ビアーナは嬉しそうにそう言った。

「似てるかな？」

バドが首を傾げると

「似てるわよ！ 姉弟なんですもの！」

とビアーナはまた気性を荒げ、強い口調で言った。

「そうだね……」

バドは思わず苦笑する。

「バド、今日はここに泊まっていくでしょ？」

笑顔でビアーナが尋ねるが、バドは困った顔をした。

「いや、今日は帰るよ」

「!？」

ビアーナの表情が凍り付く。

「何故!? せっかく会えたのに……」

彼女は悲しみに暮れたような顔をした。

「迷惑かけられないし……」

「迷惑なわけないじゃない!? 私がどれだけあなたに会いたかったか……一日たりともあなたのことを考えない日はなかったわ。それなのにあなたは……!!」

ビアーナは泣き崩れた。

「姉さん……」

その姉をバドはどう慰めればいいのか分からなかった。

「行ってしまふの?……」

泣きながらビアーナが言う。

「落ち着いて?……それから話そう」

バドは彼女を刺激しないように優しくそう言った。

「……分かったわ」

ビアーナがピタリと泣きやむ。

「驚かせてごめんなさい」

そしてバドの頬にキスした。

「落ち着いた?」

優しい瞳でバドは彼女を見詰め

「ええ、もう大丈夫」

とビアーナは微笑んだ。

「姉さん。オレ、今日ここに泊まってもいいかな?」

「嬉しい!是非泊まって行って?」

ビアーナの表情が一気に明るくなりバドは安心した。

「ありがとう」

「最高に幸せだわ」

ビアーナはまるで幸せの絶頂にいるような表情で、バドの頬に左

右交互にキスをして抱き締めた。

「ねえバド」

「何?」

「ずっとここにいて? 私達、一緒に暮らしましょう?」

猫撫で声で甘えるように言ってくる姉。その彼女の甘く濃厚な香水の香りに、口の中が甘ったるくなるような錯覚を起こす。

「姉さん、それは出来ないよ」

「どうして!？」

ビアーナはショックで顔を歪めた。落ち着いた声でバドは話す。
「オレにはやらなくてはならないことがあるんだ……だからここに居続けることは出来ない」

「やらなくてはならないことって何？ 私よりも、そのことのほうが大事だって言うの!？」

興奮して声を荒げる姉にバドは苦悩した。

「姉さん分かってくれ。オレは魔物ハンターとして魔物の被害に遭う人を助けたい。オレの育ての親である師匠は今、異世界からこの世界に侵入しようとする魔物と戦っている。オレに出来ることは、この世界にいる魔物を狩ることだ。もう……“時間がないんだ”」「時間が無いつてどういうこと!？」

「このままでは世界がどうなってしまうか分からないんだ」

「世界が終わるとでも言うの!？」

目を血走らせる姉に対し冷静にバドは言った。

「そうなるかもしれない」

ビアーナは更に興奮した。

「世界が終わるかもしれないのに、あなたと離れるなんて出来ないわ！ あなたがいなくなったら私は生きて行けない……世界が終わったも同然よ!」

ビアーナは半狂乱になり悲鳴に近い声で叫んだ。

「終わらせないためにオレは……!」

バドが言う途中

「？」

ビアーナの唇がそれを遮った。姉と弟の唇が密着する。

「!？」

バドは彼女の身体をはね除けた。彼女がよろめく。その反動でぶつかったテーブルの上のカップが倒れ、その中身が零れた。

「……」

ビアーナは悲しい瞳で弟を見詰めた。バドは何も言わず立ち上がると出口に向かった。

「待って!?!」

慌ててビアーナは彼を呼び止めるが、そのまま彼は部屋から出て行った。

第五話・引力【再会編】（後書き）

是非、次話も御覧くださいませ。

第六話・引力【離別編】（前書き）

予定外のNewキャラ登場でちよっぴり遊んじゃいました（<―>）

第六話：引力【離別編】

「あつ、バド!？」

アークが叫んだ。仲間達と宿屋に入ろうとした所へ丁度バドが歩いて来たのである。

「オレ達はここに泊まるが、お前はどつする?」

ゲアンが尋ねると

「オレもここに泊まる」

バドは静かにそう答えた。

彼らは店の中に入り、受付を済ませる。

「女子は向こうの部屋に行ってくれ。男子は二手に別れよう」
いつものようにゲアンが促し

「え? みんな一緒じゃないの?」

アークは疑問の表情を浮かべた。

「一部屋にベッドが二台までしか無いらしい」

「そうなんだあ……」

アークは団欒が好きなので少しがっかりした。

「じゃあ、アークとアールが同じ部屋でいいか?」

アークとアール・グレーが頷く。

部屋割りが決まり、それぞれの部屋に別れた。

寢床に着くとゲアンは隣りのベッドで目を閉じて仰向けになっているバドに声を掛けた。

「バド」

「何だ?」

バドはきつくそう返した。普段微笑の堪えない彼から笑顔が消え、何かに苛立っているようにも見える。

「何かあったのか?」

「別に」

バドはそう冷たく言い放ち、反転してゲアンに背を向けた。

「そうか……おやすみ」

翌朝、彼らが店を出ると

「姉さん!？」

店の前にビアーナが立っていた。昨日と同じ服を着て、やつれたようにも見える。

「いつからここに……」

「バド、もう行ってしまうの?」

力のない表情でビアーナは言った。

「ああ」

バドは彼女と目を合わせずにそう答える。

「行かないで! お願い!？」

ビアーナは駆け寄り、バドを抱き締めた。

「!」

バドは拒絶するように彼女の身体を自分の身体から引き離す。

「いやっ!」

彼女は激しく抵抗し、再び彼に抱き付いた。

「絶対に行かせない!」

「……」

それを見ていた仲間達は皆啞然とした。

「何だか、恋人同士みたい」

ジャスマミンがぼそつと呟く。

「……」

レミアは切ない瞳で彼らの様子を見ていた。

「姉さん、離してくれ!」

「いやよ! あなたのいない生活なんてかんがえられない!」

ビアーナは爪を立てたり、精一杯の力を使って必死でバドにしが

みついた。

「もう……いい加減にしてくれ……」

込み上げる感情を抑え、それに堪えるように彼は声を吐き出した。
ビアーナの手が緩む。

「バド、お願い。私の側にいて？ 離れたくないの……お願い！」

彼女は泣きながら哀願し、彼にすがりついた。

バドは彼女の震える肩に手を乗せる。

「姉さん、オレは姉さんの“恋人”じゃないんだよ」

「！？」

ビアーナはあまりの絶望で地面に泣き崩れた。

一行は自家用の船に乗り、その町から遠ざかって行った。

彼らとその町を訪れたというのが、そもそも奇妙な話だった。依頼とその町は全く関係がなかったからである。行きはバドが梶を操っていたが、その行く途中で不思議なことが起きた。そこから発する目に見えない何かに引き付けられたのである。そしてその町に入った結果あの再会という劇的な出来事に出くわした。

「バド、これで良かったのか？」

「何故そんなことを聞く？」

バドは鋭い目でゲアンを睨んだ。

「せっかくお前は本当の家族に会えたのに、また離れ離れになってしまったから……」

「姉さんのことか？」

「ああ……お前はあの人を拒んでいたが、あのまま家族との暮らしに一生を捧げても良かったはずだ」

「お前は知らないからだ！ オレの姉さんはなあ、オレのことを弟して見ちゃいない」

「どづいことだ？」

「見てるだけでも分かるだろ？ オレへの異常なまでの執着心、オレを見る眼差し、言動、全てが普通じゃない。オレは弟ではなく

“男”として見られている」

「そんな、お前のことを弟として溺愛しているだけじゃ……」

「だからって“あんなこと”！？」

バドはその先の言葉を飲み込んだ。

「もういい……とにかくあんなことは早く忘れたいんだ！」

初めて見せるバドの取り乱した様子に、ゲアンもその様子を見ていた仲間達も心配になった。

「分かった。その話はもうやめよう」

ゲアンはそれ以上そのことを追求するのはやめた。バドは沈黙したまま依頼された土地へと船を進める。

まるで奇妙なあの“引力”を断ち切るかのように……

ANOTHER WORLD “禍根Xの原本”

第六話・引力【離別編】（後書き）

是非、次話も御覧くださいませ。

第七話：〈婿探し〉 美のコンテスト【前編】

今回の仕事内容は実に漠然として難解でもあった。

ドチュールでは近年男子の出生率の低下に悩まされ、王はその対策を考えた。その一つが過去彼らが引き受けた鉱石マデイラカイト採掘の件である。それにより解決したかのように思われたが、問題は成長した男子の数であった。女子すら少数なのに対し男子は更に少なく、せつかく手に入れたそのマデイラカイト（秘薬）も意味をなさない。何よりもさいなまれるのは王室だった。ドチュール王工フブロッソと王妃マキアーナの間にはなんと一子しか授からず、それがあのマージュ姫だった。

王は世継ぎのことを考え姫君に結婚するよう促したが、彼女はそれをかたくなに拒絶した。その理由は姫君のたんなるわがままでし
かなく

「ゲアンよりハンサムな人」

「ゲアンより強くて知性のある人」

「ゲアンより私に尽くしてくれる人」

彼女はそれらを条件として挙げたのである。しかしゲアンは類を見ないほどの美男子で、ましてやその国内にそれに見合う男子は存在しなかった。唯一考えられる人材はバドだったが

「あの人は遊んでそうだから駄目」
と姫は断った。

そんな時だった。ある一報が王の耳に届いたのである。それは美を競うコンテストが行われるという知らせだった。そのコンテストは男女混合で競われる為、優勝すると多額の賞金が渡されるという。参加資格は一切問わず、世界中から人が集まるらしかった。それだけ規模が広がるコンテストなら相当な美男子が来ることも期待出来る
と睨んだ王は、彼らに偵察を依頼したのである。

しかし偵察と言っても予選のみしか観覧はできない為、参加して

も良さそうなメンバーとして彼らが有力候補に適切だと判断されたのだった。

やがて彼らの乗った船はその目的地の港に到着した。停泊して彼らは船を降りたが、どこか不安げな顔をしていることにバドは不審感を抱いた。

「安心しろ。ここで間違いない」と念を押すが

「……」
「どうしたんだみんな？」

沈黙している仲間達の反応にバドは困惑した。

「バド、みんなお前のことを心配しているんだ」

ゲアンにそう言われバドが仲間達を見てみると皆、哀しげな目で彼を見詰めていた。彼は言い様のない自己嫌悪に陥る。

「……！」
ゲアンが彼の肩に手を置いた。

「よし、コンテストが終わったら今夜は息抜きしてみんなで呑もう」

「イェーイ！ 呑も呑も〜！」

すっかりその気になって浮かれるアーク。

「アークは子供だからジューズよ」

「……」

ジャスマインの言葉にアークの動きが一瞬止まる。が

「無礼講フ〜っ！」

すぐに取り直して陽気に雄叫びをあげた。

気分が少し解きほぐれた所で、彼らは午後から行われるコンテストの参加を申込に向かった。

受付は性別年齢ともに不明で緑のスーツを着たガマガエル似の人間だった。彼らがそれぞれ名簿に自分の名前を記入すると、その受付の者は妙に甲高い声で言った。

「本日のお題」はこちらのドレスと燕尾服です」

そしてマジシャンのような手付きで机の下に用意してあったトランクを開けた。皆は茫然とそれを見ていた。そして出てきたのは2mもありそうな赤いロングドレスとやたらと後ろの裾が長い黒の燕尾服だった。

「お題」って……そんなのあったんだ？ てか裾長すぎ。虫みた
い」

アークは失笑し、他の仲間達は絶句した。

「てゆうか誰も来てないんだけど」

アークがぼやく。

「参加申込は郵送で出来ますので、そちらでされた方が多いと思われます」

受付の者は親切にそう説明した。

「そうなんだあ……」

とそこへ一人の旅人が現れた。背丈はアークと同じぐらい。つばの広い帽子を目深に被り、土色のマントのような物を羽織っている。全体的に薄汚い印象で、このコンテストに参加する人間とはとても思えない。

「こちらに名前をご記入下さい」

受付の者が言い、旅人は名前を記入した。

「本日のお題は……」

と受付の者が衣装を見せる。

「そっち」

と旅人が衣装を選び番号札を受け取った。

「では健闘を祈ります」

受付の事務的な言葉を背に旅人は去って行った。

「あれ？ 何か落ちてる」

アークは地面に落ちている丸い物を拾った。それは金属のピンバツチのようだった。だいぶ汚れていたが指で擦ると銀色に輝き、文字が刻まれているのが見えてきた。

「“二ナ”のバツチだ……」

バドが呟きアークは首を傾げた。

「二ナ？」

「ああ、ハンターの妖怪だ」

「ハンターの妖怪？ 魔物ハンターじゃなくて？」

「魔物ハンターの妖怪だ」

「はっ!？」

アークは頭の中が混乱し、周りの仲間は首を傾げた。

「二ナはユニセックスな妖怪で、魔物ハンターをしている」

「どういうこと？ 訳分かんないんだけど……妖怪と魔物って一緒じゃないの？ それにユニセックスって何？」

「ユニセックスとは性別が関係無いということだ。あいつは性別を自在に変えることができる」

「へ〜〜え凄い!？」

アークは感心した。

「で？ 妖怪と魔物ってどう違うの？」

「さあ」

「？」

バドの思わぬ返答にアークは困惑した。

「オレにもよく分からないが、あいつは違うと言い張る。もともとは人間だったらしく魔物と一緒にされたくないらしい」

「何で妖怪になっちゃったの？」

「定かではないが、呪いの類いだろう。母親の胎内にいる時から異変が始まっていらしい」

「そうなんだあ……あの人もいろいろ大変なんだねえ」

とそこまで話終えると

「本当にそう思うか？」

「!?!」

その声にアークは思わず飛び上がった。振り向くと彼の背後にさ
つきの旅人がいた。

「二ナ？」

聞き覚えのある声だったのでバドはそう呟いた。

「嘘?!?! う……わあああゝ!?!」

アークは怯えてバドにしがみつき、彼の背後に隠れた。

「失礼だな。化け物でも見たような顔して」

旅人は不機嫌な顔でそう言った。

「だって、よ、“妖怪”でしょ……?」

「妖怪と化け物を一緒にするな!」

二ナがそう怒鳴った時

「あ??」

帽子が風に煽られ、ふわりと飛んだ。すると中から素顔が現れる。
金髪の髪がほどけるように優雅に揺れ、しなやかに肩を滑り全体が
下に垂れ下がった。その長さは胸の辺りまでであった。肌は透き通る
ように白く、ふつくらとした唇は紅を差したように赤みがある。瞳
は硝子細工のような水色をしていて睫毛が長く密集し上下とも綺麗
にカールしていた。

皆その可憐な容姿に目を奪われるが……

「かわいいと思っただろ」

二ナは照れもせずそう言った。

「!?!……」

アークは二ナと目が合い、頬を赤らめる。

「惚れるなよ? オレは男にも女にも興味がないんだから」

可憐な美少女姿の二ナは男前な言い方でそう言った。

そんな中、二ナのことを見慣れているバドは飛ばされた帽子を拾
って二ナに渡す。

「ありがとう」

二ナはそれを受け取り、また被った。

「何で？」

アークは疑問の表情を浮かべ、二ナは答えた。

「男のオレが女を好きになっても、女のオレはその女のことを好きになれない。だからやめたんだ。恋愛なんか馬鹿ばかしくって」

「なら、どっちかを選べばいいんじゃない。性別自分で変えられるんでしょ？」

「……」

何故か二ナは言葉に詰まった。

「？」

「女の子がいいんじゃない、かわいいし。手始めにアークと付き合い
つてみたら？」

「ジャスミンがちよっかいを出す。」

「そうだな」

何故か納得するアール・グレー

暖かく見守るレミア

「？……」

アークは照れて赤面した。すると二ナが口を開く。

「断る」

「!?!」

アークはシヨックで固まった。

「オレはもつと頼れる男がいい。お前は頼りないから駄目だ」

そう言った二ナに悪気はなかったが、アークはかなりへこんだ。

「頼りないんだ……オレ」

「アーク元氣出して？」

「頑張れ」

仲間達が慰める。

「二ナ」

バドが歩み寄った。

「お前は女で参加しろ。そうすれば優勝は間違いないだろう」

「お前達も出るんだろ？ そしたら分かんないぜ……」

「オレ達と手を組もう」

バドは美しい切れ長の瞳を細めて不敵な笑みを浮かべた。すると

二ナはほんのり頬を赤くした。

「な、何だ？ 詐欺師みたいに……」

バドの微笑を見て拳動不審に二ナの瞳が泳ぐ。

「オレ達が勝つてもお前に分け前をやる。その代わりに……付いて来て欲しい場所がある」

「付いて来て欲しい場所」？

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

い！？

二ナは否定して首を横に激しく降った。

「……………」

それを見ていた周りの人間は不思議そうな顔をしていた。

「バド」

ゲアンがバドに耳打ちする。

「彼女をドチユールに連れて行く気か？」

バドが微笑する。

「お前に対抗できる奴はあいつしかいない」

「コンテストの中から探せばいいじゃないか？」

「見付かれば、そいつにする」

この光景を見た二ナは

何だ、この美しい二つの“巨塔”は！？ モデル事務所か？

うわっ…………お前達。ち、近い！ か、顔が近すぎるぞ！ と一人

興奮していた。

予選開始時刻が迫った。会場となったのは見晴らしのよい痩せ地で、参加者はそこに設置された壇上に立つ。各地から多くの参加者と観客が押しよせ、会場は人で生め尽くされていた。

「緊張するわ」

ジャスミンは持ち前の抜群なプロポーションで衣装のドレスを難なく着こなしていた。

「私、自信がないわ……………」

一方レミアは不安な表情で、着替えの順番待ちをしていた。

「？」

他の列から着替え終えた女性が個室から出て来る。その姿が綺麗だったので、レミアは更に自信をなくした。

「大丈夫よ」

ジャスミンは励ました。

レミアの前の女性が着替えを終えて個室から出て来ると、レミアは緊張しながら個室に入って行った。

「……………」

その衣装を着たレミアは愕然とした。ドレスはベアトップに透명한肩紐が付いているタイプの物だったが、普段服に隠れた肩や胸元が露出され、日焼けしていない白い肌がその赤いドレスに弱々しく映って見えた。その大人びたデザインのドレスは少女の華奢な身体に似つかわしく無く、彼女の身体はその迫力に完全に負けているようだった。まるで自分がまだ子供だということを浮き彫りにするよう。

「どっしり………」

急かすようなノックがして、彼女は不安な気持ちに押し潰されながら個室を出た。

「大丈夫だから」

ジャスミンに慰められながら、レミアは浮かない表情で審査会場へと向かった。するとアークとアール・グレーの姿を発見した。

「あっ、いたいた！」

気が付いた彼らはすぐに駆け寄って来た。

「うわあ〜綺麗！」

「アークもかわいいわよ」

「かわいいっ……………」

ジャスミンの褒め言葉にアークは苦笑いした。

「アール、似合うじゃない？」

「……」
アールは照れくさそうにジャスミンから目を逸らす。

「……」
レミアは自信がないので俯いていた。

そこへゲアンとバドが現れる。

「すまん。待たせたな」

「済まない」

二人は長身なので異常に裾が長い燕尾服の衣装も引きずることなく着こなしていた。“前から見れば”高貴な紳士のようだ。

「わああ……素敵!？」

ジャスミンは二人の燕尾服姿にうっとりとした感嘆の溜め息を漏らす。

レミアはまだ俯いていた。

「ん、どうした？」

バドが彼女に声をかける。

「自信がないんですって、慰めてあげて？」

困った顔でジャスミンが言った。

「そうか……レミア、顔を上げて？」

「……」

レミアは少しずつ顔を上げて行った。黒い革靴、黒いズボン、燕尾服が視界に入り 彼女を見下ろす長身のバドの顔が見えた。

彼女が完全に顔を上げると

「綺麗だ」

バドはそう言って優しく微笑んだ。

「……」

レミアは仄かに顔を赤くした。

「ええ、わたくし司会進行を勤めさせていただきますグリーンティです」

コンテストが始まり、司会者が挨拶した。

「あつ」

アークは思わず声を上げる。司会者はさっき受付にいた人間と同じだった。

「審査員の先生方を紹介します。まずは本日のコンテストの主催者であり、衣装デザインも手掛けたデザイナーのグリーンチャ先生です」
「あれっ？」

審査員席にも同じ人間がいた。アークは混乱する。

「同じ人が二人いる……」

他の参加者達の一部はそのことに気付いていたが、皆そのことに無関心だった。

「ええ、本日のコンテストはグリーンチャ先生のニューブランド『グリングリン』の新作を参加者に衣装として着てもらっ、お披露目兼チャリテイイベントです。今回観覧された皆様から受け取った料金の一部は、環境保護団体に寄付されます。次に審査方法の説明に入らせていただきます。」

この辺の説明から徐々に参加者達の緊張感が増してくる。

「参加者はこちらの壇上に向かって自分をアピールしてください。

審査員と観覧の皆様は、それを見てお手持ちのカラーカードを上げてください。青が不合格、黄色が見送り、赤が合格になります。数の確認測定は、あちらの野鳥の会の皆さんにお願いしました」

すると待機していた野鳥の会の団体が計数器でカチカチとカウントする真似をしてみせた。

「では1〜10番の方は壇上に向かってください。」
司会者が促し、ついに審査が始まった。

審査は10人ずつ行われたが一行は990番だったので、なかなか順番が回ってこなそうだった。彼らの次が二十だったが

「
ぶつぶつと何やら不満の言葉をぼやき、不服な表情をしていた。というのも衣装が気に入らなかつたからである。」

くそ~~~~何でだ？ 何でこんなにオレは赤が似合わないんだああ~~~~！？ と悔しそうに顔を引きつらせていた。

第七話：〈婿探し〉 美のコンテスト【前編】（後書き）

是非、次話も御覧くださいませ。

第八話：〈婿探し〉 美のコンテスト【後編】

コンテストの予選はほとんど流れ作業で進んだ。何しろ人数が多いためそうなったようだ。合格者には赤、見送りには黄のカードが渡され、それが準決勝進出パスポートだった。やがて一行の順番が回ってきた。彼らの次が最終で二ナと同時審査だった。

彼らが壇上になると観客と審査員の視線が注がれた。観客のほとんどは女性で、彼女達の熱い視線はほとんどゲアンとバドに集中していた。

「……！」

これは圧倒的に不利だぞ！？

二ナは焦りを感じたが、

よし、これでどうだ！ と男性をターゲットにとびっきりのスマイルを振りまいた。

「おおおおお……」

それをくらった男性達は彼女にメロメロになった。それに負けじとジャスミンはダンサーらしくセクシーなポーズで、アール・グレイはぎこちないながらも笑顔を作り、アークは愛嬌たっぷりのかわいいキャラで、レミアは恥ずかしそうに純粋な少女でそれぞれに票を集めた。その結果

「カードを上げてください」

グループ参加の一行に青カードは出されず、ほとんど赤カードで合格。二ナは男性票を全て集め、やはり合格した。

「準決勝はこちらの作業着を着てもらいます」

司会者のグリーンティがその衣装を広げて見せた。

「な、何で作業着……？」

アークがやく。合格者達は皆啞然とした。

「グリーンチャ先生のブランド『グリーングリーン』のコンセプトは『グリーンアンドクリーン』。『緑とクリーンな環境』です。この作業

着は自然環境を綺麗にして欲しいという願いを込めて作られました。これを着こなせる人こそ主催者が求める真のビューティ。グリーンチヤ先生の票のみ無条件で合格、優勝となります」
とは言うものの彼らが、いざそれに着替えてみるとなんだか微妙な感じだった。

「これ着こなしてるって言われてもあんま嬉しくない……」

「似合ってるわよアーク」

と小悪魔のように笑うジャスミンと

「嘘〜」

渋い顔をするアーク。

「……」

レミアは予想通り似合わず、アール・グレーと二人沈黙していた。
「何でええ〜!?!?」

そこに作業着に着替えたゲアンとバドが現れアークは驚愕した。

「何で作業着着ても格好良いの〜!?!?」

「二ナはまだか?」

アークの驚きは特に気にせずバドが尋ねた。

「あっ!?!?」

他の参加者に紛れている二ナをアークが発見する。

「!?!?」

すると二ナはバドの背後に隠れた。アークが覗こうとすると二ナは恥ずかしがってそっぽを向く。

「見るなっ!」

「大丈夫だって。みんなも着てるし〜」

「大丈夫じゃないっ!」

そう言っつて二ナはアークから逃げて周り込んだが、アーク以外の仲間に丸見えだった。

「二ナ?」

ジャスミンが声をかけ

「?」

はつとして二ナが振り向くと後ろでジャスミンや仲間達が見ていた。

「うわああ〜見るなあ〜!?!」

二ナは恥ずかしがって縮こまる。

「ははは……」

バドはおかしそうに笑った。

「笑うな、笑うなあ〜!」

「ふふふ……」

笑うバド。

「笑うなあ〜」

ぽかぽかと彼を叩く二ナ。

「かわいいじゃん?」

と周り込んで来たアークに二ナは憎らしげにイーツと歯を見せた。

準決勝はグループ参加が認められず個人戦になった。

「このコンテスト、先生かバドが優勝しそう……」

アークはダボダボの作業着を着て、ふて腐れた顔でそう吐き捨てた。

二ナは婿の有力候補だったが、他に相応しい人間がいなにか一行はチエックしていた。

「あの人なんか、なかなかハンサムだけど……」

ゲアンと見比べてジャスミンは溜め息を吐く。

「ねえ、あの人なんか良くない?」

アークが見付けた人物は背が高く、肩まであるウェーブの黒髪で横を向いて参加者と話をしていた。体格が良く、巧ましい。

「うっ〜ん」

ジャスミンは複雑な顔をした。

「厳しいなあ〜」

いっそのことゲアン本人が婿になればいいのにと思つかもしれないが、彼がそうしないのにも姫が彼以外と言ったのにも理由があった。

姫はゲアンが好きだった。しかし自分がいくらアピールしてもゲアンは姫としてしか見てくれない。キスの後もそれは変わらず、隔たりを感じていた。しかし彼を忘れることもできない彼女は考えた。彼より素敵な男性と結婚しよう！　それが彼女の意地だった。

一方ゲアンは彼女の気持ちに気付いていないわけではなかった。しかし受け入れようとしないのは、固く閉ざされた彼の心に原因がある。彼は10歳の時故郷を魔物に破滅され、愛する家族や友達を亡くし、心に深い傷を負ってから大事な人を失うことを恐れるようになった。友人や仲間として付き合い合ふことは可能だが、恋人のような特別な関係には抵抗があった。それを失ったら今度こそ立ち直れないという恐怖心が付きまとうからだ。

そしてもう一つ彼には使命のようなものがあつた。故郷の惨劇の後倒れた自分を助けてくれたフォガードの言葉

『世界を救う為にその能力を伝授した。この世に危機が訪れた時その能力を發揮するのだ』

その時はまだ訪れていないはずだ。しかしフォガードは異世界に行つて闘っている　“その時”は近い……

自分に恋愛にのめり込んでいる暇はない。一人の人の為ではなく、世界の為にこの能力を使つて使命を全うせねばならない。その為にフォガードは彼を“勇者”に育てあげたのだ。

「ええ、では準決勝を開始します」

予選は観客のカードと審査員の付けた点数で合否を決めることになっていた。

「36番パルファムさん」

呼ばれたその男性は肩まであるウェーブの黒髪で、小麦色に日焼けした肌と鍛えた肉体を見せびらかすように衣装のボタンを第四まで開けていた。

「あつ、さつきの……!!」

アークは目を見開く。その男性は先程アーク達が見たウェーブヘアの男性だった。

「あの人が受かるかな？」

その結果は

「カードを上げてください」

観客達がカードを上げ、野鳥の会が計数機でカチカチとカウントした。

「赤40、黄20、青15！ では審査員の皆様の点数は……!!？」

審査員が点数札を上げる。

「7点、8点、5点、6点、グリーンチャ先生の判定はっ？……」

会場内が緊迫する。グリーンチャは札を掴み……

「!!」

上げなかった。

「おっと、まだ出ないようです。合計26点、パルファムさんぎりぎり合格です！」

「おおおお……」

会場内に少しどよめき上がる。

「あの人が合格したじゃん」

アークは密かにその男性に期待していた。その後も彼らは男性をチェックしていたが

「結構いるじゃんイケメンっ」

一つの関門をクリアしたただけあってなかなかの美男美女が見付かった。

「くそくそなかなか手強いなあ……」

かわいい少女や綺麗な女性を見て二ナが苛立って歯ざしりしている

と大丈夫だ。お前のほうがかわいい」

とバドは微笑した。

「……っバド！ お前、絶対優勝しろよ？」

二ナが長身のバドを下から睨む。するとバドはボタンに手を掛け「オレも第四まで開けたら合格できるかな？」

と呟いた。

「や、やめる！ お、お前がそんな……そんなことをしたら……し、刺激が強すぎる！」

二ナは顔を真っ赤にして取り乱した。レミアも何気に赤面している。

「ふふっ」

バドはそれを見て面白そうに吹き出した。

準決勝は終了した

「何かあつけなかつたね最後……」

審査結果はアークが審査員の点数が24点で不合格。レミアも25点で惜しくも不合格。アール・グレーは赤カードが無くて不合格。ジャスマンは26点でぎりぎり合格。バドは36点で悠々と合格。

ゲアンは……

「出たっ！？」

「おおおおくくく！？」

歓声が巻き起こる。

「グリーンチャ先生のカードが！ ついに……出ましたあああ
っ
!?!」

司会者のグリンティも興奮気味に叫んだ。

「996番ゲアンさんが優勝です！ ええ、グリーンチャ先生が合格者を選ばれたので準決勝ですが、これにてコンテストは終了させていただきます。皆様お疲れ様でした。また次回お会い致しましよ
う」

という結末だった。肝心の婿探しのことだが、目を付けた参加者は皆プライドが高く

「一緒に呑みに行きませんか？」

という美人なジャスミンの誘いにも乗ってはくれなかった。が、一人だけ断らない男性がいた。

「喜んでえ〜！」

何かおかしな反応だ……？

「彼が了解してくれたわ」

その男性を連れて陽気にジャスミンは言ったのだが

「？」

何か視線がおかしい……？

「よろしく〜！」

上目使いでバドやゲアンに視線を送るその姿 彼らは察していた。
た。

「あつ、私いパルファムつけていいます。よろしく〜」

「オレはバド……です」

ごつい手でぶりぶりしながら握手を求め、額から冷汗が出るバド。

「ゲアンです」

普段冷静沈着なゲアンの額にも冷汗が。

そして全員握手を終えたが妙な雰囲気になってしまった。

「オレは呑まないからあの民宿に行く」

「え〜何で？ ニナも一緒に呑もうよお？」

アークは二ナを引き止めるが、そのままスタスタと歩き出した。バドが後を追う。

「二ナ！」

二ナが立ち止まり、バドが何やら話していた。少しして話が終わるとバドだけ戻ってきた。

「何話してたの？」

アークが尋ねる。

「待ち合わせの約束だ。明日あの民宿で待ち合わせすることにした」

「あの子、女の子じゃないの？“オレ”って言ってたけど」

目を丸くして、きよとんとした顔でパルファムが尋ねた。

「……女だ」

バドが答える。

「そうなんだあ？ びっくりした〜あんなにかわいくて男だったらどうしようかと思っちゃった〜」

パルファムははにかんだ。巧ましい身体をくねらせて。

「……」

仲間達はそれを見て無言になる。皆思うことは同じだった。

第八話：〈婿探し〉 美のコンテスト【後編】（後書き）

是非、次話も御覧くださいませ。

第九話：〈婿探し〉 呑み会【前編】

「呑み会って外だったんだ……」

酒屋に向かう途中アークがぼやく。

「お店で子供が飲んでたらまずいでしょ？」

そう言うジャスミンも未成年だ。

「まあね〜そうだけど……」

アークはすねたように少し口を尖らせる。

「お酒のことなら任せて。あたしが特製カクテル作ってあげるから
〜！ うふっ」

やたらと陽気にしているパルファムを見て、それ絶対、飲みたくない。とアークは心から思った。

買い物を終えると彼らは場所探しに向かう。やがて森林の中にアスレチックが並ぶ公園を見つけ、そこに決めた。丁度良い感じの木のテーブルがあり、そこに酒やツマミを並べた。

「できたあ〜！ 特製カクテルう〜バドさん飲んでみてえ〜？」

そう言いパルファムが紙コップに入った怪しい色の飲み物をバドに渡す。側にはアルコール度数の高い、ジンやウォッカやウイスキーのミニボトルが。

「それを見たバドの表情は固まった。

「大丈夫よ〜安心してえ？ 私いお店でこっこの造ってるからあ

〜」
「“お店”？ って」

アークはその単語に反応した。

それって×××バー？

などと考えながら。

「うふっ、子供には、ひ・み・っ」

「……」

人差し指を立てるパルファムを見てアークの全身に悪寒が駆け巡る。

「どうぞお〜」

バドは困惑してそれを凝視した。その様子にいたたまれなくなつたアークが言った。

「バドはビールが好きなんだよね!」

「……………」

ところが、助け船を出したつもりがこの沈黙。何故? とアークは戸惑つた。するとアール・グレーがそつと彼に伝えた。

「……………そのネタ(?)は禁句だと思う」

分かる人には分かる話だ。この呑み会はバドを元気付けようとゲアンが考案したものだったが、バドがそうなつた原因は姉とのいざこざ(第五、六話参照)に関係がある。その姉の名がビアーナ……何故禁句なのか、分かる人には分かる話である。

「えっ? 何で?」

アークはきよんとしていた。パルファムは乙女のようなきらきらした瞳でバドを眺め、バドは無言でそれに口を付けた。が

「うわ……………ッ!」

と叫び、顔を歪めた。

「うふつ、大丈夫?」

穏やかに微笑するパルファム。気の毒そうに見詰める仲間達。

「大丈夫かバド? これで口直しするか?」

とレッドアイ(カクテルの一種)の入ったコップを差し出す微酔いのゲアン。微妙にこれもタブーが入っている。

「……………ちよつと出歩いて来る」

バドは席を立った。

「すぐに戻って来いよ〜!」

というゲアンの声を背にバドは獣道の奥へと消えて行つた。

「お前……………かわいいなあ?」

「?」

ゲアンから思いもよらない言葉を言われ、レミアはびっくりした。
「ゲアン……？」

酔っているのでは？ と彼のコップの中を覗き込むと空^{から}だった。

「ちょ、ちよっと……！？」

彼女に迫るゲアン。レミアは慌てて逃げようとするがゲアンは覆い被さろうとした。

「キャッ！」

レミアはぎゅっと目を閉じる。

「ゲアンっ！」

アール・グレーがそれを止めた。

「大丈夫かよゲアン？」

アール・グレーはやれやれというようにゲアンを誘導して席に座らせた。レミアは怖かったのか、半泣き状態だった。

「アール、お前は本当に良い子だな？」

「……」

完全に酔っ払っているゲアンの問い掛けにアール・グレーは苦笑した。が

「お前は本当にかわいいなあ？」

と今度は自分が迫られた。男だからと油断してヘーゼルナッツの殻を剥いていたアール・グレーは反応に遅れ

「！？」

唇を奪われた。

「ワオ？」

呑気に感嘆の声をあげるアーク。

「どうしよう！ 次はあたし？」

と期待に胸を踊らすパルファム。

「ひっく！」

黙々と飲み続けるジャスミン。

「あたし、ちよっと行って来る！」

レミアはそう言い残して去って行った。

「クスツ！」

「何だよ？」

自分の顔を見て急に笑ったゲアンをアール・グレーは睨んだ。

「ひひひひひ……！」

まるで魔物てきのような笑い方である。

「もう！ どうか行けっ！」

アールは腹が立ち、吞まずにはいられなくなった。しかし……自分まで酔ったら介抱してあげる人間がいなくなるなと思い、控え目に飲んだ。

「ゲアンくこつちいらっしや〜い」

パルファムがゲアンを引きずるように連れて行く。

これで酔いが冷めるかもなとアール・グレーは少し安心した。

「ゲアン、あなたも私のカクテル飲んでみるう〜？ 遠慮しないでいいわよあ〜」

また怪しげな色のカクテルを勧めるパルファムだったが

「いらん」

はつきりとした口調で断るゲアン。

「そ、そう〜？ 残念だわあ〜……」

次なる作戦を練るパルファムは 　　そうだわ！？ 　　と何か閃いた。

「ねえ〜ゲアン？」

「何だ？」

「レッドアイ飲みたくない？」

「何だそれ？」

「さっきあなたが飲んでたやつよあ。もう〜酔ってるんだからあ」

とゲアンの背中を軽くはたく。

「っ！」

その衝撃が強く、ゲアンは前のめりになった。

「やったあ〜大袈裟なんだからあ〜」

パルファムは軽くはたいたつもりだったが

「お前……今の怪力だったぞ！」

とゲアンは切れていた。パルファムの鍛えあげられた肉体のスナップの利いた一発は普通の人の“軽く”をかなり超えた“一撃”だった。おねの力恐るべし。

「ごめんなさあ〜い」

泣き真似をするパルファム。

「……………」

ゲアンは無視して黙々とツマミを食べ始めた。パルファムは逸る気持ちを抑えながら、テーブルの下の足は貧乏揺すりで激しく揺れていた。

「ねえゲアン？」

「何だ？」

「いいわよ……キスしても」

もじもじするパルファム。

「何でだ？」

「さっきあの子にしてたじゃない？ あたしにもOKよっ。うふっ」
両手を顎の辺で合わせ、顔を傾けてぶりぶりするパルファム。

「有り得ない」

ゲアンは断固としてそれを断った。

「何それ!？」

「だってお前、“おっさん”じゃん」

「!？」

シヨックで固まるパルファム。

「先生キャラ替わってるから」

と突っ込むアーク。それは放ったまま、ゲアンはアークの側に近付いて行った。

「アーク、お前は本当にかわいいなあ？」

一方あれからあてもなく歩いてきたバドは、途中でさっきと同じ作りのイスとテーブルを見付けた。そこに腰掛けると肘を突いてうなだれる。

姉さんは今頃どうしているのだろう。あそこまで突き放す必要があったのか？

なんてオレは子供^{ガキ}みたいなことを……！

彼は自己嫌悪に陥っていた。もう一度会いに行けばいいのかもしれない。しかし辛くなるだけだ。二度目はあっても三度目があるという保証はない。

「時間がない」と彼が言ったのは、でまかせなどではなかった。フオガードが異世界に行ったというのは世界が危機にさらされているという証拠だ。この世界も、そして彼自身の身にもその危機は訪れている。

もう、時間がない……

「？」

ふと気配を感じた彼が後ろを振り向くと

「レミア？」

レミアの姿があった。

「ごめんなさい。勝手に付いてきて……」

レミアは不安な顔をした。バドの性格などをまだ把握しきれていない為、扱いの仕方が分からなかったのだ。

「レミア……」

そう言ったバドの表情には笑みが見えない。

「何だ？」

その淡白な返事が冷めているように感じられる。やはり来ない方が良かったのかとレミアは余計不安に駆られた。

するとバドは無表情のまま静かに言った。

「オレは冷たい男だ」

レミアは唾然とした。何故急に彼がそんなことを言うのかが分からずに。

バドは話を続けた。

「一生会えないかもしれないと分かっていたながら、たった一人の姉を見捨てた」

「見捨てただなんて……また会いに行けばいいじゃない？」

「そうかもしれないな」

バドは美しい切れ長の瞳を細め、微かに微笑した。

「この世界が続くのなら、また会いに行くよ」

「？」

意味深気なことを言われたが、その意味を理解できずにレミアは困惑した。

「どういうこと？ 続くのなら……て」

「世界は今、危機にさらされている」

「？」

危機と言われてレミアは大きな茶系色の瞳を見開いた。

「オレ達の師は今、異世界へ行き魔物の進出を阻んでいる。この世界からでは阻止しきれないからだ。それはこの世界の危機を意味する」

「……！？」

その事実で衝撃を受けたのは確かだったが、レミアはまだ実感が持てなかった。

「もう、時間がない」

バドは彼女の前でもまたその言葉を吐いた。その言葉を発した時、彼が儚く消えてしまいそうに見え、レミアは哀しみを覚える。

「それなら余計、会いに行つたほうがいいんじゃない？」

「姉と同じ考えなんだな」

バドは表情を曇らせた。切れ長の瞳は鳥肌の立つような美しい凄味を帯びている。

「オレだつて分かつてる……本当はすぐにでも会いに行き、謝れば済むことだと。それは簡単に思えるかもしれない。だがオレには無理だ。姉を受け入れる余地などない。こんな冷たい弟のせいで、姉は自ら命を断つてしまうかもしれない……」

「そんな……まさか、大丈夫よ。きつとあなたが帰つて来ることを願つて待つてるわよ」

レミアは元気付けようとしたがバドは沈んだ表情に澱んだ笑みを浮かべた。

「それは残酷だな。オレはもう“一生”帰ることはないのだから」

レミアとバドは仲間達のいた場所へと戻つた。

「バド……！」

すると情けない声でアークが駆け寄つて来た。彼は泣きそうな顔でバドにしがみつく。

「どうしたんだアーク？」

バドが尋ねた。

「先生が……変なんだ」

「？」

「……」

レミアとバドは首を傾げた。

「見てよあれ！」

アークが指差したほうを見るとジャスミンに迫るゲアンの姿が。

「お前、かわいいなあ？」

「……」

ジャスミンは酔っているのかぼーっとしている。ゲアンは彼女に更に接近した。顔を近付け……

「ほらあゝゝ！？」

とアークは切れつつも、見物している。

「しまった……」

「何が？」

アークがバドを見ると彼は悔む表情をしていた。

「ゲアン（あいつ）は飲むとやばいんだ……」

「ちよつとお！ 知ってるならもっと早く言ってよゝ！？ オレ、

先生に“ファーストキス”奪われちゃったじゃんゝ！？」

アークは顔をくしゃくしゃに歪めて地団太を踏んだ。

「えゝゝ……！？」

レミアは思わず口元に手を当てる。

「すまん。すっかり忘れてた……」

「ちよつとおゝバドさん、どこ行ってたのよおゝ？」

パルファムが不機嫌な顔で物申した。

「ゲアン（あの子）どうにかしてよ？」

鼻息が荒く、かなりご立腹のようだ。

「今なんとかする」

バドが行こうとすると

「ちよつと聞いてえゝ？」

とパルファムが彼の腕を掴んだ。

「あの子あたしにだけキスしようとないのよお〜？ 失礼しちゃうわあ〜！ あれ、本当に酔ってるのお〜！？ 人選んでない〜？」
パルファムは酷く不服を感じているようだった。

「あたしはコンテストで上位まで行った女よお？（ ）この美貌だしい？ なのに何であたしだけスルーなわけええ　　〜っ！」

最後の一言は特に怒りが込められていた。

「はは……」

バドは慰めの言葉も見付からず、乾いた笑いをした。

「アール、ちよつと手伝ってくれるか？」

「そんなことをしたらジャスミン（あいつ）に怒られる」

アール・グレーはむすつとした顔でそう言った。いつになく不機嫌だ。

「？」

首を傾げるバドをアークが小突いた。

「好きなんじゃない？ ジャスミン。先生のこと」

「……」

バドは複雑な心境になるが

「あああ〜……」

ゲアンとジャスミンの激しいキスシーンをすっかりやじ馬気分で眺めるアーク。ジャスミンはゲアンの首に手を回し、ノリノリだった。

「まずいな、あれは」

アール・グレーは冷めた声でそう言った。ジャスミンの手が怪しくゲアンの身体を撫でている。

「……」

レミアは恥ずかしくて顔の前を両手で隠した。

「来い、アール！」

放って置くわけにもいかず、バドはアール・グレーに呼び掛け、アール・グレーは仕方なく立ち上がった。バドがゲアンをアール・グレーがジャスミンを捕らえ、その事態の悪化は免れた。

「ゲアン、しつかりしろ？」

呆れたようにバドは言った。ゲアンはまだ酔いが覚めず目が座っていない。そして

「バド……？」

そう呟くとふらふらと席を立ち、酒に手を伸ばした。

「もうやめとけ！」

バドがそれを取り上げる。

「さあ、もう終わりにするぞ？」

バドは片付け始めるが

「バド、オレ酔ってなんかいないよ」

とろんとした目でゲアンは言った。

「酔ってるよ」

バドは困ったように苦笑する。

「お前が早く戻って来ないからだぞ？」

バドを睨むゲアン。

「すまんすまん」

「今夜の呑み会は……ひっく……お前のために……ひっく……企画

したんだぞ？」

「そうか」

「お前が呑……っく……まなきゃ……ひっ……意味がないんだぞ？」

……っく」

「……」

「バド！ これを飲めっ！」

ゲアンはバドの前に酒の入ったコップを突き出した。バドはそれを飲み干す。

「まだいけそうだなあ？」

ゲアンが酒を注ごうとするがバドはコップを退かした。

「もう、いらなからな？」

「飲まないのか……？」

ゲアンの表情が曇っていく。

「ああ、もう飲んだし」

バドはそう言い苦笑した。するとゲアンは空ろな目でバドの顔を凝視した。

「……？」

バドはゲアンに飲まされた強い酒で少しぼーっとしている。

「じゃあ、キスする」

ゲアンは横からバドに抱き付き

「嫌っ……！！？」

レミアの短い悲鳴が鳴る　と同時にゲアンはバドの唇を奪っていた。

「……」

バドは前にもあったことなので、特に反応は示さず

「気が済んだか？」

と冷静だった。

「バド……」

「ん？」

ゲアンが今度は泣き出しそうな顔をする。

「どうした？」

突然ゲアンが彼を抱き締めて叫んだ。

「バド、死なないでくれ！」

「どうしたんだ急に？」

バドは戸惑った。

「死んじゃ駄目だ！」

「うん……まだ死なないよ」

「“まだ”なんて言うな！？　お前は絶対死んじゃ駄目だ！」

ゲアンは必死で叫んでいる。意識がある仲間達はぼんやりとその光景を見ていた。

「分かった……努力するよ」

酒に酔った勢いで普段思っていたことが無意識に出たのだろうと思ったバドは優しくそう返した。

ゲアンが彼を睨む。

「お前が死んだら、オレも死ぬからな？」

その言葉ですっかり酔いが覚めたバドの表情が凍り付いた。

「ゲアン……二度とそんなことを言うな」

その鋭い眼光はたとえゲアンであつても素面しよふの時に直視すれば一瞬呼吸が止まったであろう。それだけ強い眼差しだった。

第九話：〈婿探し〉 呑み会【前編】（後書き）

是非、次話もご覧くださいませ。

第十話：〈婿探し〉 呑み会【後編】

ゲアンとジャスミンはすっかり酔い潰れ、アークとアール・グレイは微酔いだった。パルファムは酒豪らしく意識があつたのでバドと二人でゲアンの腕を肩に乗せて担ぎ、レミアとアール・グレイとアークはふらついて足下がおぼつかないジャスミンを支えながら宿屋へ向かった。

「危なかったね」

アークが言った。彼らが店に入った時は既にほとんどの部屋が埋まっており、空室は三部屋しかなかった。おそらくコンテストの影響だろう。彼らはキーを受け取りそれぞれの部屋へと向かった。

とりあえずバドとパルファムは協力してゲアンを部屋に連れて行き、ベッドに寝かせた。室内にはベッドが二台並んでいる。三人いるがどうしたものかとバドは考え込んだ。するとパルファムは隣のベッドの上に座り

「安心して？ ここを引くとね、ほらベッドが出てくるの」

とベッドの下を引くと補助用のベッドが出てきた。

「あたしね、去年もあのコンテストに出席してえ、この宿屋に泊まったから知ってたの」

そう言いながら黒いウェービーヘアを指に巻き付けるパルファムの姿は、けっしてかわいくは見えなかった。

「だが、オレ達にそのベッドは狭すぎる……」

バドは長身で明らかにそのベッドには収まらず、パルファムはといつと彼ほど長身ではなかったが、筋肉隆々なその身体にはだいぶ窮屈に思えた。

「大丈夫よ。あたしがこれで寝るから」

「いや、そういう訳には……」

バドの脳裏に最悪の事態が駆け巡る。ゲアンのベッドの隣にバドが寝て、その下の補助ベッドにパルファムが寝たとする。ニヤリと不気味な笑みを浮かべるパルファムは……

「!?」

考えただけでも恐ろしかった。絶対に、絶対に駄目だそれは！

バドは嫌な妄想を追い払おうと頭を振る。

「何想像してるの？」

パルファムに怪しげな目で顔を覗き込まれ、バドの背中に悪寒が走った。

「うふっ、大丈夫よ。“何もしない”から」

「……」

しかしそんな言葉が信じられるはずもなく、バドは苦悩した。パルファムは誘うような視線を彼に向け、警戒せずにはいられなかった。酔い潰れて無防備なゲアンのことも襲いかねない。なんて厄介な人物と関わってしまったことか。とんだ災難であった。

「かわいい寝顔」

すやすやと眠るゲアンの顔を眺め、パルファムは微笑んでいた。

「……！」

バドの顔が引きつる。彼が部屋を出たらゲアンに何かしでかすかもしれない。ここは 仕方ない……

「パルファムさん」

彼はパルファムに歩み寄り、跪いた。

「なあに〜？」

パルファムが不思議そうに、上目使いで彼を見詰める。バドは彼の額に手を当てた。美しい切れ長の瞳を細め、微笑する。

「ん？」

パルファムは乙女のように瞳を輝かせ、きよとんとした。

「ぐっすり眠れるように」

バドはその瞳を見詰め 呪文を唱えた。

「……」

パルファムの目が空ろになり、脱力してベッドに崩れる。

「おやすみ」

バドはそう言い、部屋を出て行った。

同じ頃、他の仲間達はジャスミンを支えながら部屋の前までやって来た。

「さあ、着いたわよジャスミン」

酔いが覚めないジャスミンをいたわるようにレミアは優しく声をかけるが

「……」

ジャスミンはそこでぼーっと立ち止まり動かなくなった。

「ちよつとおく歩いてよ〜？」

アークは苛立つようにそうばやき、アール・グレーも優れない表情だった。少し強引に連れ込もうとするがジャスミンは激しく抵抗し、仲間の手を振り払って床にしゃがみ込んだ。

「どうしたのジャスミン？」

レミアが問い掛けるが返事はなく、三人はその場に立ち尽くしてしまつた。

「どうした？」

とそこへバドがやって来た。

「ジャスミンが嫌がつて部屋に入らないんだよ。急に座りこんじゃうし、ちよー訳分かんないんだけど……」

アークは呆れたように掌を上に向けてそう言った。ジャスミンは冷たい床に両足を外側にして座り込み、壁をじっと睨んでいる。するとアール・グレーがバドの側へ歩み寄り、そつと伝えた。

「……」

それを聞いたバドは困惑するが、アール・グレーは『頼む!』と手振り表情で哀願した。

「……………」
仕方なくバドはそれを聞き入れ、ジャスミンの側へ行き彼女を抱き上げる。アークは冷めた目でそれを見詰め、レミアは複雑な表情をしていた。

「開けてくれ」
ドアの前でバドが言い、アール・グレーがドアを開け彼らは中へと入って行った。

バドがジャスミンをベッドへ運ぶ。

「ん〜ゲアン……………」
降ろす瞬間そう呟き、ジャスミンの手足がバドの首や身体に絡みつく。

「っ!」
一気に彼女の体重がかかり、バドはバランスを崩して彼女に覆い被さった。

「ジャスミン…………っオレはゲアンじゃない。バドだ!」

呻くように彼が言ったその瞬間、ジャスミンはバドの唇にキスをした。

「……………」
一瞬戸惑うが、すぐにバドは彼女の手や足を退かして上体を起こす。

「……………」
アール・グレーは無言でそれを見詰めていた。驚きはなく、その表情はただ沈んでいる。

「いつもこういうのか…………?」
少しやつれ気味でバドは尋ねた。

「ああ…………すまなかった」
アール・グレーは暗い表情でそう返す。

「まあ、仕方ないな。酒が入ってるし」

バドは苦笑した。

二人が部屋を出るとアークは眠そうに大きな欠伸をしており、レミアは不安気な表情だった。

「アーク、もう手伝うことはないから部屋に行っていざぞ」

「はい」

伸びをしながらアークは自分の部屋へと向かった。

「アール、お前ももう遅いから行っていいぞ」

「分かった」

アール・グレーはバドとレミアを交互に見てからそう言い、部屋へと歩いて行く。

そこにレミアが残った。

「……」

「……」

無言のバドをレミアが見詰める。そして目が合うとバドは逸らした。

「何で目を逸らすの？」

「……」

バドがちらりとレミアを見ると怒った顔をしていた。それを見た彼がまた目を逸らす。

「あっ、ほらまた逸らした！」

バドがもう一度レミアを見るともつと不機嫌な顔をしていた。口を尖らせ、彼を睨む澄んだ瞳。その大きな赤茶色の瞳はいじけているようにも見え……

「……」

バドが彼女を抱き締める。その予期せぬ彼の行動にレミアは啞然とした。大きな目を見開き、瞬きすることすら忘れ。

「レミア……」

「え？」

彼女は戸惑いながら顔を上げ、長身のバドの顔を見た。

「？」

するとバドは前屈みになり、彼女の額にキスした。

「しずらいな」

そう呟き、切れ長の目を細めて苦笑する。

「……………」

その言葉と彼の僅かに照れたような微笑を見て、レミアはとても恥ずかしくなった。一気に顔が紅潮する。そんな彼女にバドは優しく、とろけてしまいそうなほど甘い微笑を見せ、レミアの顔は更に赤くなった。

「クスツ、もう遅いし寝ようか？」

「え……………ええ」

彼女の頭の中はまだ混乱していた。

何で今キスしたの？ 何で抱きしめたり……………何で？

そのことばかりが頭の中を渦巻いている。表情も動きも完全に停止していた。

「おやすみ」

そう言うとバドは彼女の髪にキスした。そのまま自分の部屋へと歩いて行く。

「……………」

レミアはその場に佇み、完全に放心状態だった。そして声に出さずに彼女は叫んだ。

眠れない……………！

第十話：〈婿探し〉 呑み会〔後編〕
(後書き)

是非、次話も御覧くださいませ。

第十一話： 〈婿探し〉 婿役のいきさつ【声】

バドが部屋に戻るとパルファムはベッドから手足をはみ出して豪快なイビキを立てていた。ゲアンは静かに目を閉じて眠っている。バドはドアを閉めた。するとゲアンが寝返りを打ち、瞼を開けた。「悪い、起こしてしまったか……」

バドは静かに詫びた。するとゲアンはベッドから起き上がり、眼鏡をかけてドアまで歩いて来た。

「どこへ行くんだ？」

「付いて来てくれ」

ゲアンはそう答えたが、無表情で意思もなく動いているようだった。た。

「おい、待て！」

ゲアンは黙って受付を通り過ぎて行き、慌ててバドは店員に外出許可を得る。

「ゲアン！」

店を出ると闇夜に消えかけたゲアンの後ろ姿が見えた。近辺に佇む店は全て閉店し、家々の窓からは僅かに灯が漏れていたがそれ以外は闇に包まれていた。道の脇に一定間隔で並ぶ街頭が灯っていたが赤い石畳は闇に溶け込んでおり、だいぶ視界が悪かった。その闇の中をためらいもなくゲアンは突き進んで行く。バドはそれを奇妙に感じていたが黙って付いて行ってみることにした。

「？」

やがてゲアンは足を止めた。そこは町外れの教会で、彼はその扉を開けて中へと入って行く。そこは無人の廃墟だった。

「何故こんな所を知っている？　ここへ来たことがあるのか？」

そうとしか思えなかったが

「いや、初めてだ」

ゲアンは否定した。

「何故ここへ入ったんだ？」

再びバドは尋ねるが

「分らん」

ゲアンはそう答えた。部屋の中は暗く、僅かに月明りが窓から差し込んでいた。冷たい空気と静けさが漂う。時間が経つに連れ目が慣れてきて、ぼんやりと室内が見えて来たが灯がないとほとんど何も見えない。ゲアンが動きだし、しゃがんで何かを拾った。それは蝋燭だったらしく、手をかざして魔法で彼は火を灯す。

「よく、そんなもの見付けたな」

バドは思わず感心したが

「何もかも“この時のため”に用意されている」

淡々とだが意味あり気にゲアンは言った。

「この時のため？ どういうことだ」

バドは不思議に思い、尋ねるが

「そんな気がする」

「……」

何だ気のせいかな？ と問い詰めるのをやめた。

風が吹き抜ける。窓が軋む音が響き、どこからともく不思議な声が聞こえて来た。

『ゲアン、そしてバドよ……』

「フォガード!？」

バドは叫んだ。懐かしいその声は彼らの師の声だった。ゲアンはやっと目が覚めたように鈍い反応を示す。

『そうだフォガード（私）だ。私がゲアンの身体を操り、ここまで“誘導”した』

「そうだったのか……」
どつりで様子がおかしかったはずである。

『いいか、よく聞け』

フォガードの低く凜とした声が風が吹き抜けるように不思議な響きを立てる。バドとゲアンは冷静にそれを聞いていた。

『私はこの世に存在しなくなった』

「!?!」

その言葉は衝撃的だった。

『私は異世界で魔物と戦うために肉体から魂だけ抜けだしていた。それがあまりに長引いたため、我が身は朽ち果て、屍となった。そしてあの世へ行き、そのことにより力を増した』

「死んで力が増したのか？」

『そうだ』

「……」

それについてバドは何か考えを巡らすように沈黙した。

「バド？」

空を見ながら思いに耽る彼の表情から、それが思わしくないことだとゲアンには予想が付いた。

『忠告しておく』

「何だ？」

ゲアンが鋭く聞き返す。

『どんなことがあるうと惑わされるな』

それは漠然としていたが彼らの心に強く響いた。

『信じる心を失った時、“歪み”が広がり魔物がやって来る』

「歪みとは何だ？」

『空間がゆがめられて出来たものだ。その歪みに邪悪な念が溜ると魔物が誕生することもある』

ゲアンの脳裏に過去の記憶が過ぎる。

「もしかしてドチュールの……！？」（第二話参照）

『そうだ』

あの時遭遇した魔物はまさにそれだったのだ。人間の邪悪な念により生まれた魔物はそう言っていた。それが特殊な現象ではなく……こうしている間にもどこかで邪念により生まれた魔物が猛威を奮っているのかもしれないということなのか。

途方もない話よ

そう言っていたのは単なる脅しではなく、事実だったというのか？ やはり“あれ”で終わりではなく……

「その歪みを塞ぐことは出来ないのか？」

悲劇を食い止めなくてはならない。そのためにゲアン（かれ）は勇者になったのだ。希望を捨ててはいけない。その方法さえ分かれば……

『残念ながら、それは不可能に近い』
返ってきたのは絶望的な答えだった。

「何故だ!？」
ゲアンは聞き返す。

『その歪みを塞ぐには、この世から邪念を一切絶たねばならないからだ』

「……………」
ゲアンは言葉を失うが、バドは冷静だった。
「その歪みは何故出来たんだ？」

『魔物がこの世界に入れるよう……“人間”が作った』

二人は驚愕した。

「人間が……!？」
「どういうことだ!？」

『人間の中には魔術を使う者が存在する。それを欲や恨み、憎しみ

を晴らすために禁断魔法で魔物を呼び出し、それを何度も繰り返すうちに異世界とこの世界との間に歪みが出来たのだ」

「フォガード、あなたがこの世にいなかった今、オレ達はこの世界を救うことはできるのか!？」

ゲアンは声を荒げた。

『惑わされるな! 言ったはずだ……どんなことがあるうと惑わされてはならない。お前達はこれから邪悪な魂に導かれ、悪の根源へと向かうことになる。それにより救われる者もあるだろう。しかしそれは全ての人間ではない。お前達にできることは魔の存在を減少させ、侵略を阻むこと。誰もがこの状況を人間が悪化させたと認めはしないだろう。だがお前達が生うとして無駄だと思ふな!必ずそれを 天が見ているのだから……』

フォガードの声はそこで途切れた。

第十一話：〈婿探し〉 婿役のいきさつ【声】（後書き）

是非、次話も御覧くださいませ

第十二話： 〈婿探し〉 婿役のいきさつ【悲恋編】

二人が宿屋に戻った頃にはもう夜の闇は薄くなり、空はだいぶ明るくなり初めていた。彼らはすでに眠気を通り越し、活性化されたように脳も視野も活動していたが、ひとたびベッドに横たわると激しい睡魔に襲われる。そして二人はそのまま眠りに着いた。

丁度心地良い眠りに入った頃、それを邪魔するかのよう朝が訪れた。

ノックの音が部屋に響く。それは最初夢の中と混同し、脳も身体も判断できずにいた。

再びノックの音がする。瞼が開き、その音を確かな音として聴覚が捕らえる。

「誰だ？」

最初に目覚めたのはバドだった。薄目を開け、半身を起こしながらドアの向こうの相手に問い掛ける。

「アークだよ」

その声を聞くと彼はドアまで行き、錠前を外した。

「おはよう……」

ドアを開け、眠たそうに目を擦る。

「おは……よ」

アークの表情が固まった。

「あ、あのさ……」

バドの姿を見てである。本人にその自覚はないらしく

「何だ？」

と目覚めきれない表情で髪を掻き上げていた。

「セクシーすぎるから上も着てね。“いるし”……」

その時バドは上半身裸だった。鍛えあげ、ほどよい筋肉のついた肉体美をもろに露にしていたのである。アークの横にはアール・グレーがあり、少し下がった位置にジャスミンとレミアの姿が見えた。

彼女達は恥ずかしそうにそれを“見ている”。

「ああ……じゃあ先に出て待っていてくれ」

「わかった」

アークや仲間達を先に行かせ、着替えを済ませるとさっそく二人を起こしにかかる。

魔法で深い眠りに着くパルファムを見て

ここまで連れて来たのは失敗だったかもしれないな。このまま眠らせておこうか……

と一瞬迷ったが、魔法を解かないわけにもいかずゲアンの後に起こすことにした。

二日酔いとまではいかなかったが、睡眠不足で疲れの抜けないゲアンは欠伸をしながらベッドから起き上がった。衣服の乱れを直し、髪を素早く櫛で整える。

バドは睡眠呪文を解く呪文を唱え、パルファムを起こした。

「あら？」

彼だけは呪文の熟睡効果のため、すつきりとしたお目覚めだった。ぱっちりと開いたその瞳は乙女のような輝きを放っていたが、見た目はごついおっさんだった。といっても実年齢20歳である。

彼らは店を出て仲間達と合流した。このあとは二ナと民宿で合流し、いよいよドチュール王国へと向かう。果たしてこの二人のどちらかを姫は気に入ってくれるのだろうか。二ナはともかく、パルファムは黙っていれば決して見劣りしない、なかなかの二枚目と言える。日焼けした褐色に近い肌、角張った顎、額の奥に窪んだような彫りの深い目と垂直に伸びた柱のような鼻、肩まである漆黒のウェービーヘア、体型もぶ厚い胸板や太い首が逞しく、非常にパワフルだ。充分外見の男性らしさだけは満たしてくれよう　そうであつてほしい……

しかし、あのしゃべり方をどうにかしなければならぬのだ。演技してくれるだろうか。

「？」

ふと大事なことを言い忘れていたことに気付いたバドは小声でゲアンに尋ねた。

「昨晚、パルファム（かれ）に“例”のことを話したか？」

「……いや、覚えていないが多分、話してないと思う」

ゲアンに昨晚の記憶はないようだったが、パルファムの緊張感のない様子からして、きっと話していないのだと予想ができた。

ちらりと横を見ると彼の横をキープするようにパルファムが歩いていた。

確かに見た目は悪くないんだが……

とバドは少し憂鬱な眼差しをパルファムに向ける。

「どうしたの？」

その視線に気付いたパルファムは彼のほうを向いた。

「あ、いや、何でも……」

バドは誤魔化して視線を逸らす、それがパルファムには“照れているように見えたらしく”

「うふっ、かわいい」

とご機嫌な笑みを浮かべていた。

ジャスミンと並んで彼らの後ろを歩くレミアは煮え切らない複雑な心境だった。

民宿で二ナと合流した。二ナもパルファムも黙って付いてくるが、そろそろ言わなくてはならない。バドは話を切り出すことにした。港に向かう途中の街角で足を止める。

「二ナとあなたに話しておかなければならないことがあります」

仲間達は知っていることだが、そのことを聞いた二人がどういう反応を示すのかが心配でもあった。

「何だ急に改まって？ 緊張する言い方だな……」

可憐な金髪の美少女姿の二ナがぼやく。

「どうぞ、聞かせて？」

貴婦人っぽい口調のおっさん姿なパルファムが促す。

バドは言葉を吐き出した。

「 姫の前で、婿候補役を演じてほしい」

「？」

「？」

それを聞いた二ナとパルファムは目を丸くし、同時に言葉を発した。

「 姫”の”

“ 婿候補” 〳〵つっ！？」

驚くのも無理はなかった。

と同時に二ナは言葉巧みに自分を誘惑したバドと、勝手な妄想を描いていた自分の馬鹿さ加減に落胆し、悔恨の念と憤りをバドにぶちまけた。

「くそく騙したな！？ “いい所” だつて言うから付いて来たのに

……全然いい所じゃないじゃないかああ！」

泣きたかった。せつかくバドと二人きりで“大人の営み”を経験できると思っていたのに、夢に描いていたのに。仲間付きな上、よりによって見知らぬ姫君の婿候補を演じろとはいったいどういう落ち（？）なのか……

この詐欺師め ！？

二ナは悔しさと憎しみの混ざった目で長身のバドを下から睨んだ。しかしちつとも怖くはなかった。むしろその怒った顔は、もっとからかいたくなるほど愛くるしかった。

穏やかな口調でバドは続けた。

「気に入られなくても構いません。ただ、その時は男性らしい話の方や立ち振る舞いをしていただきたいのです。それが我々の信用問題にも関わり、その対応の仕方により今後どうお付き合いしていく

かが変わって来ます」

彼の瞳が魅惑の色を醸し出す。切れ長で妙な色気を感じさせるその瞳は不思議な魔力を持っているかのようだった。見詰められるとそのグレーの宝石に引き込まれ、我を忘れてしまう。

好きにして……とパルファムは心の中で呟いた。彼のためなら、どんな困難にも立ち向かえる、そう思った。美しいこの男が語る話の内容は疑惑の香りがぶんぶん漂っているが、その甘い言葉と美貌の誘惑は、あまりに魅力的で余計な妄想を抱かせた。

「あだし、あなたのために頑張るわ」

パルファムはバドの両手を取り、そう誓う。その瞳の輝きはまるで恋心を抱く純粋な乙女のようなようだった。少なくとも彼の心の中の自分像は“美化された美女の姿”で、完全に別人だった。

「ありがとう」

バドは微笑を返した。しかしそれは一つの取引が成立した仕事人の営業スマイルだろう。哀れなパルファムであった。

「……」

二ナは冷たい視線でそのやり取りを見ていた。逃げなかったのはバドに抗議したかったのと、まだ離れたくないという複雑な気持ち絡み合っていたからである。

「言い方が不適切だったことは謝る。申し訳なかった。だが頼む！協力してくれないか？」

バドは念入りに懇願した。

「そんなことをして、もしオレが婿に決まったらどうするんだ？」

「？」

バドは少しうろたえた。二ナの顔は真剣で、どうやら本気でそう心配しているらしかった。

「大丈夫だ」

“多分”という疑問符をバドは飲み込んだ。あの姫は結局ゲアンでなければ駄目なんだ、という勝手な解釈をして。

「大丈夫じゃないっ！」

突然ニナは逃げ出した。泣きながらがむしゃらに駆けて行き
「っ!?!」

何かに躓いて道端につんのめる。

「ニナ!?!」

バドは仲間達の足を止めると、自分はニナの側に駆け寄った。

「うううううう……」

ニナは声を出して泣いている。

「見せてみる」

転んだ時、辛うじて付いた掌からは血が滲んでいた。彼はその手を優しく握り、瞑想で直す。

「うわあああ……ああ!」

激しい雄叫びのような豪快な泣き声を上げるニナ。

通り掛かった人の冷ややかな視線、非難の声がバドに浴びせられる。

「朝っぱらから……」

「かわいそうに」

「喧嘩かしら?」

バドはニナの手を取り立ち上がらせようとするが、ニナは手を振り払って動こうとしない。

「しょうがないなあ……」

仕方なくバドはニナを地面から抱き上げ、そのまま会話を進めることにした。

「どうしても協力してくれないのか?」

「……!?!」

彼の腕に抱えられ、体と体が密着し、顔の距離が近付いたことにニナはしどろもどろになっていた。

「……」

静かに返答を待ち、見詰めてくる彼の瞳はあまりに魅力的だった。こんな綺麗な瞳で見続けられたら簡単に落ちてしまい、何もかも許してしまいそうだ……

「お、降ろせっ！」

焦って二ナが叫ぶ。バドは言われた通り、地面に二ナを降ろしてやった。

「オレは……」

胸の内に隠れた不安の闇が二ナの表情を曇らせた。

「オレが婿に選ばれても、お前はそれでいいのか？」

声は聞き取るのがやっとなほど小さく沈んでいる。

「え？ いや、そんなことは……」

バドはたじろぎ、二ナは 哀しかった。

バドに他人の婿役を頼まれるなんて、彼は自分のことなどなんとも思っていないからだ！

そう思うと胸が張り裂けそうだった。

初めて会った時、彼は少女のように可愛らしい美少年だった。その頃二ナは何かと面倒の少ない男の身体で生活し、ハンター業をこなしていた。その頃のこと走馬灯のように頭の中を駆け巡る。お互い美貌と才能を同業者に妬まれ、心の奥に言い知れぬ影を潜める二人は何か同じ空気のようなものを感じ、すぐに打ち解けた。そして初めて杯をかわした日 二ナは知った。ウォツカ（酒）を飲むと急速に変身することを。

女の姿になつてから彼を見た時、一目で恋に落ちた。見たこともないその清らかな美貌は衝撃的だった。それが今では“殺人的”な魅惑の美貌へと変わっていた。あの時とは違い、包容力と妖艶おんなさが加わり、濃厚な魅力を掻き立てている。どれほど多くの外敵が彼の肉体を求め、その絶大なる美貌はどれだけの女の肉体を喰い荒らしたことだろう。気が付けば遠い存在になっていた彼と一度でいい

交わりたい

男子として生きる道を選ばざるをえないのなら、その前に……

「抱いてくれ」

二ナは言った。もう、隠すことなどできなかった。意地を張る気力も失っていた。ずっと恋焦がれてきた彼の自分に対する気持ちへの疎外感を知り、女体おんなを捨てる決心をしたのである。

「……？」

彼は戸惑っていたが二ナは長身の彼の胸に顔を埋めた。

「好きだ。バド……」

身体が熱くなる。このまま誰もいない二人だけの空間へ行きたい。誰にも邪魔されず、彼を一人占めにしたかった。

「二ナ……？」

バドは困惑しながら二ナの身体を離れた。確かに二ナはかわいい。随分なついてくれて、愛くるしかった。しかし彼にとって二ナはかわいい妹、もしくは弟のような存在だった。故に定着してしまったその見方を今更換えることなどできない。彼女の気持ちに気付いていないわけでもなかったが、駄目なのだ。

彼は仲間の視線を気にしたが、無意識に死角となる奥まった場所へと入り込んでいたため、幸いにもこの予期せぬ事態を彼らに目撃されずに済んでいた。深い安堵の溜め息が零れる。

「済まない。オレはお前を抱くことはできない」

「好きな女でもいるのか!？」

二ナの体内の血液が逆流し、激しい追求心が芽生え、彼を攻め立てた。

「分からない」

彼はそう答えたが明らかに動揺し、一瞬目が泳いだ。

「そうか……」

二ナはそれに気付いてしまった。愕然として肩を落とす。

「さっきの話だが、もし協力してくれるのなら、黙って付いて来て

くれ」

完全に振られたな

二ナは頭の中が空っぽになり、情熱の嵐はあっけなく消沈していった。

「分かった」

そして、黙って彼の後を付いて行くことにした……

第十二話：〈婿探し〉 婿役のいきさつ【悲恋編】（後書き）

是非、次話も御覧くださいませ。

第十三話： 〈婿探し〉 婿役のいきさつ【変身・対戦・対面編】

一行は自家用の船に乗ると海を渡り、ドチユール王国のある大陸を目指した。穏やかな海を行く途中、イルカが飛び上がる場面に遭遇するなど、喉かな航海を満喫させた。

「着いたぞ」

マドレーンの港に到着し、船を降りる。そこから先は馬車でドチユールに向かうことにした。

「やっぱここが一番落ち着くなあ〜」

大きく両手を広げ、アークは伸びをした。住み慣れた土地に帰って来てほっとしたのである。それはレミアやジャスミン達兄妹も同じであった。

「へえ〜喉かで素敵なおねえ〜!？」

ほとんど未開拓なその村は森林など自然の景色で溢れている。すっかり都会暮らしに染まっているパルファムには新鮮で、感動した彼は目を輝かせた。

「ところで二ナはいつ変身するの？」

アークは疑問を投げ掛けるが、二ナはあまり答えたくなかった。固い決意をした後である。一度男体に変身したら、もう二度と女体には戻らないと決めたのだ。男体になってしまえば女体の時好きだった相手への恋愛感情も消え、忘れられる。バドのことも。だが女体である今はまだそのことを引きずっており、この気持ちを捨ててしまうことも辛かった。

ところがアークは二ナがこんな気持ちでいるなど知るよしもなく、好奇心たっぷりに変身を待ちわびていた。

ああ、自分はこんなに哀しみに打ちひしがれているのに

断崖絶壁から不幸の谷底へと真つ逆さまに墜ちようとしていると
いうのに……

「青々としたこの空が憎い！」

雲一つない晴天に照り付ける太陽が憎い！

そして無邪気にはしゃぐ……“アーク（こいつ）”があああゝゝ
ゝっ！

「ぐえ……！？」

アークが呻く。

「？」

仲間達は皆唾然とした。いきなり二ナが彼の首を締め付けたからである。「冗談か悪ふざけだろうと済ませていたが、そのうちあまりにも苦しがるアークを見てやっとそれが冗談でなかったことに気付く。

「二ナ！？」

慌てて仲間達が助けてやるが

「お……っげほっ！……遅いよっ！？」

その時にはかなり咳込み、衰弱していた。

「大丈夫？」

レミアは普通に心配していたが、ジャスミンは

「もつと加減しなくちゃ」と呑気なことを言い、アール・グレーはただただ呆れていた。バドが二ナを見ると二ナは不機嫌な顔でそっぽを向く。

「……」

自分が原因の一つだろうと思ったバドは表情を曇らせた。

「二ナに話しておきたいことがある。どこかで時間を潰してもらえるか？」

バドはゲアンに耳打ちした。長身の彼らの交わす小声の会話は他の仲間達の耳には届かない。

「分かった。じゃあ、城下町にある喫茶店で待っている」

ゲアンはそう返し、アークは

「ずるいな塔^{タワー}トーク」とぼやいた。

「ちよつと来てくれ」

バドに促され、戸惑いながらも二ナは彼の後を付いて行く。

「どうしたのかしら？」

「さあ……」

疑問を浮かべるジャスミンと不安で浮かない表情をするレミアは、二人の後ろ姿を目で追っていた。二人が角を曲がり、視界から消える……

「二ナ」

森林が生い茂る森の前に差し掛かると立ち止まり、バドが言った。

「何だ？」

ぶっきらぼうに二ナが返す。

「お前がどうしても気が進まないというのなら、婿の権は断ってもいいぞ」

二ナは大きく目を見開いた。

「何で今更!？」

「お前が辛そうに見えるからだ」

バドは静かにそう言った。

二ナはそれを否定するように吐き捨てる。

「大丈夫だ!」

「本当か？」

「本当だ!」

「そうか……」

バドは思考を巡らせるように空^{くう}を眺めた。

「だが、あの姫君がお前を選ばないとも限らない……」

姫はゲアン以上の男を求めていた。しかし分からなくなっていた。振られて極限状態に陥ったとき、女は何をしでかすか分からない。過去にそんな経験がなくもなかった。やけを起こしてパルファムを選ばないとも限らない。二ナのことも。

「……………」

二ナは弱々しい微笑を見せた。それはなるようにしかならない、とでも言っているようだった。それが痛々しく、彼の胸は痛んだ。

「何か欲しい物はないか？」

「欲しい物？」

「ああ、お前が候補とはいえ媚役を引き受けてくれた礼がしたい」「欲しい物……………」

二ナは考え込む。その顔をバドは見詰めた。

『何が欲しい？』

心の中にバドに質問された場面が浮かび、二ナは頬を紅くした。

「オレは……………」

言葉が声に出せず、頭の中でうるさく喚き出す。

「お前の……………」

「オレの？」

これは警戒しているな？ と二ナは察した。きつと“そっち”のことを言おうとしているのだと……………そうではなかったが、恥ずかしくなかった。

「物じゃなくてもいいか？」

俯き加減で二ナは言った。

「あ、ああ……………“抱くこと”意外であれば」

やはりそのことか、と二ナは鼻で笑う。

「じゃあ……………」

そこからまた恥ずかしくて言葉が声に出せなくなった。自分で自分を励まして、やっと声に出す。

密着した。彼の唇と二ナの唇が優しく触れ合い、今まで感じたことのない喜びが込み上げてくる。こんなに彼を近くに感じたことはなかった。もつと長くそれを求め、離れられなくなる。感情が高ぶり、二ナは自らも唇を寄せ、重ねた。呼吸が熱くなる。

もう駄目だ……もう止められない。もつと続けて。もつと……
「すまん」

途切れた。彼は違ったのだ。

この瞬間を永遠に閉じ込めておきたかったのに。

「バド……」

涙が溢れた。男体になってしまえばこの感情は消えてしまう。最後に 抱き締めてほしかった。彼の胸に顔を埋め、温もりを感じ、ゆっくりと呼吸する。彼の手が遠ざけようと肩に触れ

「最後だ！」

鋭い口調でふりきるように言い放った。

バドの手が緩む。

「最後？」

二ナは彼のこと欲しくてたまらなかった。近付けば近付くほど愛しさを感じ、続きが欲しくなる。その感情を捨てるのだ。だからもう少しだけ……

「……」

バドは何も言わずに応じていたが、あまり彼を困らせすぎては気の毒だと思った二ナは少し幸せに酔いしれてから顔を上げた。

「バド、オレの変身する姿を見てくれないか？」

「!？」

思いもよらない二ナの発言にバドは戸惑い、切れ長の目を見開いた。

「ふふ、そんなにビビるなよ。変身するからといって男になるだけだ」

二人は森の奥に侵入した。自然に囲まれ、もともと人の少ない村だが、辺りに人がいないかバドは確認する。

「大丈夫だ。誰もいな……」

言い終える前に二ナは服を脱いでいた。

「!?!?……」

慌てるバドに二ナが叫ぶ。

「バド！ 見てくれ」

服が地面に落ち、全身が露になる。バドは戸惑いながら二ナの裸を見た。

「……」

白い肌を上向きでおわん型の胸。その先端はピンク色で、くびれた腰から骨盤の張った腹部、太股へと滑らかな曲線を描いている。

つま先まで続く全身の白い肌が眩しい。それは子犬のように懐いて、子猫のように飛び回っていたいつもの二ナとは違い“女性”を感じさせる姿だった。汚れないその身体は天使の清らかさと女体の持つなまめかしさが絶妙に混ざり合っている。

彼が女性の裸を見たのはこれが初めてではなかった。抱いた女の数も不確かだが少なくない。だが今目の前にある裸はそれとは全く別物に感じられ、衝撃的だった。

二ナは彼に向かって穏やかに微笑した。

「最後まで見ててくれ」

ゆっくりと両手を広げ、顔を天に向ける。両手から乳白色のベールが現れ、円を描くように腕を動かし、全身を包み込んで行く。

「ああああ……!」

悲鳴が上がった。苦痛にもがくようなその声に、思わずバドは顔を歪めた。あのベールの中で“事”が始まっている。性別が変わるのだ。それは想像を絶するものだろう。それは僅かな時間だったが彼にはとても長く感じられた。やがて呻き声が止み、静かにベールが幕を開けた。頭が先に出て、そのままゆっくりと立ち上がると

「!？」

紛れもない男体になった二ナが姿を現した。それは滑らかな曲線を描く身体ではなく、直線的な男の肉体だ。二ナは何事もなかったかのように地面に脱ぎ捨てた服を着た。その服は男女体兼用にしており、サイズにゆとりのあるものだった。

「終わったぞ。さあ行こうか」

男体になった二ナはまるで別人のようだった。女体の時と違い、ほとんど無表情で冷めた印象を受ける。つい先程まで悲観に暮れていたあの純粹で愛くるしい少女の人格は何処へ行ってしまったのだろう。この姿の時の二ナを知らないわけではないが、バドは戸惑ってしまった。こんなだったか？ と。

「オレの名前は二ナじゃなくて、“トレゾウ”と呼んでくれ」

「トレゾウ？」

「この姿で“二ナ”は変だろ？」

そうだなとバドは納得した。

彼らは森を抜け仲間達の待つ喫茶店に向かった。仲間達が二ナのこの姿を見たらどう反応するだろう。別人を連れて来たと疑われるかもしれない。不思議と顔はあまり似ていないのだ。無表情すぎるのが原因かもしれない。確かに端正な顔立ちには美男子とも言えるが、無愛想すぎる。

店に入ると仲間達は三つのテーブルに分かれて座っていた。変身後の二ナを見た彼らの反応は微妙でぼかんとしていた。髪の色と年齢が同じ少年に二ナの服を着せただけではないか？ と疑ってしまふ。顔は似てると言えば似ている程度だし、体型も弛みのある服装では違いを判断しづらい。そして何よりも変身場面を見ていない彼らには、漠然としてしか受け止められなかったのだ。

「トレゾウと呼んでくれ」

無表情な顔で元二ナこと、トレゾウは言った。

「“トレゾウ”？」

「かわいい〜！」

その名前は仲間達に意外と好評で、愛着を込めて呼ばれるようになった。新しい仲間ができたように歓迎され、トレゾウは戸惑った。ふとバドは疑問を感じて呟く。

「ところで“あの人”はどこへ行ったんだ？」

「パルファムさん？ 何か『おめかししてくるわ』ってトイレに行つたよ」

アークが答え

「そうか」とバドは一息つくと、トレゾウの分も珈琲を注文した。テーブルに頬杖を突き、空を見て物思いにふける。

「……」

そんな彼を不安な眼差しでレミアは見詰めていた。こうして戻ってきたものの、彼と二ナがああ後どうなったのかが気になっていた。声をかけたかったが、仲間の前では聞きづらい。ましてや隣りにトレゾウが座っているのは尚更だ。

「おまたせえ〜」

とそこに着替えを終えたパルファムが現れた。

「おおお〜イケてるじゃん！？」

アークは絶賛した。パルファムは得意気な笑みを浮かべ、気取ったポーズを取ってみせる。漆黒のウェービーヘアをジェルを撫で付けオールバックに流し、貸衣装屋で借りた貴族風のひらひらしたシヤツが結構様になっていた。逞しい体格のため多少ズボンが窮屈にも見えるが、全体のバランスはいいので見栄えは悪くないはずだ。

「あら、もしかして二ナちゃんじゃない？」

トレゾウを見てパルファムが言った。

「二ナじゃない。“トレゾウ”だ」

「“トレゾウ”？ かわいいい〜！」

パルファムは瞳を輝かせ、トレゾウを愛情を込めるようにぎゅゅと椅子ごと抱き締めた。

「く、苦しい……っ！」

その馬鹿力にトレゾウの身体の骨のあちこちが軋んで悲鳴を上げる。

「あら、ごめんなさい……うふふっ」

お茶目な感じで言うパルファム。その姿はやはりイカついおっさんだ。

「……」

トレゾウの額に妙な脂汗が滲むが、取り乱すこともなくむっつりと黙っていた。

「本当に元二ナちゃん？ あんまり似てないわねえ？」

無愛想な顔で珈琲を飲むトレゾウを首を傾げながら眺めるパルファムに、ぶっきらぼうにトレゾウは言った。

「本当だ。バドが変身する所を見ていた」

「……？」

仲間達の視線がバドに集中する。

「何でバドだけ！？ オレも見たかったな」

アークは拗ねるように口をへの字に曲げた。

「お前達には見せられない。“全裸”になるからな」

「全裸……！？」

トレゾウの言葉にアークは思わず赤面した。二ナの淫らな姿がもやもやと目に浮かび

「恥ずかしいっ！」と隣りにいたアール・グレーにじゃれて抱き付く。

バドは咳払いした。

「二ナ……トレゾウの服を借りに行かないか？」

それから一行は貸衣装屋へ行き、トレゾウ用の服を借りるとその足でドチュール城に向かった。

「うわああ、何か凄い!？」

ゲアンとバド以外はドチュール王国城内に入るのが初めてだった。ドチュールの青空教室に通っていた仲間達もその様子までは見たことがなかったのだ。過去に一度幻の宮殿に入ったことがあったが、それとはまた別の豪華な空間がここにある。煉瓦^{れんが}を積み上げた頑丈な壁は重圧感と安定感があり、赤褐色の微妙な風合いはだいぶ年期が入っているように見える。中央の入口から城内に繋がる通路は一面の大理石が敷き詰められ、両脇に槍を持った兵士が数名構えていた。中央に敷かれた赤い絨毯が彼らを歓迎する。

「どうぞ、両陛下と姫が首を長くしてお待ちにございます」

兵士から伝言を受け、一行はそのまま城の奥へと案内された。

「こちらへどうぞ」

巨大なシャンデリアがいくつも天井からぶら下がるその部屋は王の間であった。それを形作っている見事なクリスタルは蝋燭の火が点らなくとも日の光を反射して、屈折が織り成すその虹色のグラデーションが透明で幻想的な光を奏でており、それだけでも充分なインテリアに見える。かと思えば王の玉座に用いられた赤い布の光沢は実になまめかしく、磨いたような光沢を放っていた。隣りに座る后は白い孔雀の羽根のような扇子で優雅に顔を仰いでいる。その隣に慎ましく姫君は座っていた。

それらを見慣れない仲間の一部はまざまざと住む世界の違いを実感させられるが、それはまるで別の生き物を見ているような感覚でもあった。

「綺麗……」

アークは思わず感嘆の声を漏らす。姫君は金髪に映える水色を基調としたパフスリーブの控え目なドレスを身に纏い、しとやかに座っていた。裾や縁にあしらわれたさり気ないレース加工が過度に主張しすぎず、清楚な雰囲気を与えている。

肩まである金色の髪、小さな唇に差した桃色の口紅、仄かに色付いた頬、蜂蜜色した丸い瞳を囲むカールした長い睫毛はまるで人形のようなだった。これだけの美貌を兼ね備えた彼女を何ゆえこのゲアンは振ってしまったのか、仲間の一部は理解できずにいた。他の一部の者は彼がディータを愛しているからだと自分を納得させる。少なくともディータの存在をよく知るアークとレミアとバドはそう思っていた。ディータという女性はゲアンにとって最愛の“恋人”だと、そう信じ。

なんて綺麗な人なんだ……

そう心の中で囁いたのはトレゾウだ。彼は清楚で可憐な女性が好きだった。

見た所姫君は淑やかで、優しそうで、首など細くて華奢でか弱く見える。それにあのきらきらした瞳はなんと美しいことだろう。流れ星……いや、夜空一面に瞬く星の光 星空そのものだ。いやいや、湖に反射した朝日の穏やかな光だろう。小さな口も大好物（？）だ。口でかいヒステリーな女は苦手だしな。ああ、貴方をこの手で包んであげたい……

姫君の外見はトレゾウの好みに命中だった。すぐにも食べてしまいたいほど気に入り、興奮気味になる。

「姫の婿を志願する者は前へ出よ」

王に呼ばれ、パルファムにバドが促した。

「先に行ってくれ」

「分かったわ」

パルファムは立ち上がった。どうどうとした足取りで前に進み出

る。

何〜っ!?

トレゾウは切れた。何でオレを先にしなかったんだ!? と激しい憎悪の眼でバドを睨む。

オレが野犬だったら貴様を今噛み殺しているぞっ!

グロい発想だ。トレゾウは根暗なのかもしれない。

パルファムの身のこなしは紳士的に映った。間違ってもお力マには見えないはずだ。お辞儀のしかたから跪く姿勢まで全て完璧だ。中身を知らない人が見たらきつと惚れ惚れするだろう。

「名を何と申す?」

王が尋ねた。

「パルファムと申します」

挨拶が済むと姫と二人での会話がなされた。彼女は言葉少なく、二言三言話すとそっけなくパルファムを下がらせた。パルファムは落ち着いた様子でもとの位置に戻る。予想通りだが残念そうな様子は全くない。彼は女性に興味がないのだ。

「次」

トレゾウは躍り出したいほどの気持ちをなんとか抑え、前に進み出た。度胸が座つていのか、緊張よりむしろ期待に胸が膨らむ。挨拶を済ませ姫と対面した。

「お会いできて光栄です。今まで生きて来て、これほどまでに感動したことはございません」

「ありがとうございます」

姫は微笑した。柔らかくてそれはまるで砂糖菓子のように甘かった。

なんて甘い微笑をする人なんだろう。とろける蜂蜜のようだ。息も甘いんだろうか? 全身が甘いマジパンでできているようだ。甘い空気が漂っている。確かめたい……

完全に虜になったトレゾウの頭の中は暴走していた。

姫君の婿選びは終了した。彼女が下した決断は……

「じゃあ、ゲアンと対戦して勝った方と婚約するわ」と言ったのである。

「かわいい顔してどSだろ？ あの姫」

控え室で王室から借りた防具を装備しながらトレゾウは悪態をついた。姫の要望に答えて彼とゲアンはその対戦を受けることにしたのである。パルファムは

「あたし、剣なんて使うの怖い〜」と断念した。

「大丈夫か？ 加減したほうがいいよな？」

外見は知性的で洗練された美男子で、血生臭い戦いとは縁がなさそうなゲアンを見て、トレゾウは心配していた。彼は魔物ハンターの中でトップクラスを誇る剣の腕前だ。殺してしまわないかと不安になる。

と、横にいたバドは軽く微笑した。

「大丈夫だ安心しろ。ゲアン（こいつ）は一応勇者として育てられ、やわじゃない。倒れたら治療してやるから思う存分やればいい。だが、急所は外せよ？」

「何！ “勇者”だと!？」

トレゾウは目を見開いた。

「勇者が何でこんな所にいるんだ!？」

素朴だが、もつともな質問だ。

「勇者と言っても肩書きだ。ふだんは普通に生活している。オレ達は危機を救う時のために勇者として存在する」

「どついつことだ？ “オレ達” って……お前も勇者みたいじゃないか！？」

ますます混乱するトレゾウにバドは苦笑する。

「そうだな。オレは肩書きが嫌いでハンターになったが、そうなれるようにと育てられたからな」

「……」

トレゾウは首を捻り

「もういいっ！」と煩わしそうに吐き捨てた。

対戦の場選ばれたのは城から数km離れた空き地だった。そこは剣士達がよく決闘の場として使用する場所でもあり、切り崩した木々の跡が古びた年輪をさらけ出した切り株となって残っている。森林の伐採が進んだその土地は、周囲を覆っていた木々が姿を消したため雨風の影響を受けやすく、農地として使用されることはなかった。そしてそこは水捌けが悪く、雨が降ると文字通り泥試合を演出させた。

対戦者の二人と兵士、仲間がその地に降り立つ。姫は侍女達と馬車の中で見物することにした。

「姫は殺し合いが見たいわけではない。それを肝に命じておけ。魔法も禁止だ」

審判役の兵士がゲアンとトレゾウに忠告する。

二人の介添人として、バドがそれを掛け持つことになった。謝って死に至るような怪我を負った場合にも対応できるようにと一応、形としてそう決まったのである。

開け放たれた土地ではあったが決闘の場合と同じく、距離は15

歩の範囲内とされ、そこにチヨークで線が引かれた。

「地味な対戦になりそうだな」

トレゾウは辺りを見ながら不満の声を漏らす。

この距離であれば派手な戦法も限られてしまう。だが、それにより技術が試されることも確かだ。ゲアンとトレゾウの身長差は12cm。ゲアンの高位置からの攻撃はトレゾウには死角になりやすいため、常にある程度距離をおくことが必要だ。しかし、同時に低位置はゲアンの死角になりやすい。この利点と欠点をどう生かすかが勝敗を決める一つの要素だと言えた。

「選べ」

別の兵士が剣の入ったケースを見せる。入っていたのは片手両手持ち両用のバスタードソードだった。長さはおよそ1メートルの細身で、刺すこと、切ることに適した剣の間の雑種剣とも言われている。

「え？ この剣じゃ駄目なのか？」

トレゾウは戸惑う。

「公平に行うため、こちらが用意したものを使ってもらおう」

淡々とした説明にトレゾウは駄々をこねるように口を曲げた。

「何いゝゝゝ？ この剣は、あのコロモドラゴンを倒した時に使った剣だぞ！ 分かるか？ あの固い、ガッツ／＼チガチのコロモに覆われて、しかも分厚う／＼い皮をこ／＼、サクツ！ と鮮やかに一刃両断した、それはそれは立派な剣なんだぞおお／＼！？」

「立派なら尚更だ」

「く……う／＼くそくそくそくそくそおお／＼っ！」

さらりと交わす兵士に地団太を踏むトレゾウ。一方、ゲアンは冷静に自分用の剣を選んでいった。

「お前も早く選べ」

兵士に促され

「ゝゝ……！！」

トレゾウは胸につかえた蟠りわだかまを抑えつつ、やむを得ず剣を選ぶ。

「ああ、もう、これでいいっ！」

二人は兵士から、それぞれ剣を受け取った。

「では、始めるぞ」

兵士に促され、ゲアンとトレゾウは礼を交わす。仲間達は邪魔にならぬよう、離れた位置から立って見守り、姫は馬車の中のクツシヨンに凭れ、侍女と向かい合いながら寛いだ姿勢で眺めていた。そのゆとりは勇者であるゲアンが負けるはずがないという確信からなるもので、彼を打ち負かすほどの者が現れることも僅かながら期待を寄せ、娯楽のように見届けることにしたのである。どちらが勝っても姫にとつては、ある意味嬉しいことだった。

「大丈夫かしら……」

レミアは不安でたまらなかった。教える意外でゲアンが人と剣を交える姿を見たことがない。それはバド以外も同じだったが

「どっちが勝つと思う？」

「いや、やっぱり先生が勝つでしょう？」

ジャスミンとアークは試合を見に来た観客のような会話を交わし……」

寡黙なアール・グレーは真剣に見ているが、何を考えているのかわからない。

「ドキドキするわ」

パルファムはまるで自分の王子様を見詰めるような眼差しを送り、浮かれていた。

介添え人のバドは対戦者達を鋭く見据えているが、楽しんでいるようにも見える。

ゲアンとトレゾウの視線が衝突した。眼鏡の奥に鋭く、挑むような光を宿したゲアンの瞳と、無邪気だが獣を狩るハンターのようなトレゾウの瞳が絡み合い、見えない凶器の存在を連想させた。無駄とも言えるこの戦いを二人は楽しんでいたのである。

「始め！」

合図がした。一本の糸を張り巡らしたような、繊細で神経質な緊迫の時が出現する。数歩距離を置き、身構える両者。その眼差しは探るように相手を見据え、互いに仕掛ける機会を探っていた。

こうして争いとは無縁の国の平穏な空の下、味方同士の対戦が幕を開けたのである……

第十三話：〈婿探し〉 婿役のいきさつ【変身・対戦・対面編】（後書き）

是非、次話も御覧くださいませ。

第十四話： 〈婿探し〉 婿役のいきさつ【対戦の行方】（前書き）

消えてしまった次話のほうはほぼ復元したので、近日公開します。
細部が変わってしまいました。前回触れなかった部分を加えたり
してるので再読していただけたら何よりですm（――）m

第十四話：〈婿探し〉 婿役のいきさつ【対戦の行方】

松明が燃えていた。地面の安定する場所に台を据えてそれを刺し込み、審判役とは別の兵士が見張っている。松の根に染み込んだ松脂を燃料とするそれは持続時間が長いため、通常より華奢に加工されていた。制限時間はその寿命により決まる。風は感じるほどなかったが、それは僅かな空気の振動にも反応して滑らかに揺れた。燃料を燃やす弾ける音は、その命の消滅に向かって躍動しているかのようなようだ。

互いになかなか一步を踏み出さないゲアンとトレゾウ。双方の闘いもその火が燃え尽きるまでのこと。このまま終わってしまったえば滑稽なだけだった。

それが延々と続くかのように思われた。その立ち入る隙のない空間が不意に破られる。

飛来した。

先に仕掛けたのはトレゾウだった。地面を蹴り上げたのがいつなのか、凡人の目には確認できなかった。ゲアンの頭上に狙いを定めるその瞬間だけが、一瞬止まったように見える。と同時に、トレゾウが垂直に振り上げた剣に反射した太陽光が放射状に白光を撒き散らす。それを仰ぎ見たゲアンの眼鏡もまた、陽光を浴びていた。

“見るを聞き、聞くを見る”

研ぎ澄まされた。

視覚ではなく、聴覚とその他の五感を巡らせることで相手の位置と動作を感覚で捕らえ、瞬時に防御体制を整える。

十代に入り、しだいに視力が低下したゲアンに師であるフォガー

ドのその教えはハンデをより軽減させることに役立つた。実戦は試合とは違い、どんな悪条件が待ち構えているかわからない。それが闇であつたり、また獣のごとく気配を消した不意打ちであるかもしれないのだ。それに対応できるようにするのが“見るを聞き、聞くを見る”という教えだった。それは例え一つの感覚が閉ざされようとも、他の感覚で補えばいいということである。

頭上に襲いかかる一太刀をゲアンは斜めに構えた剣で受け止め、鋼同士の衝突が青白い火花を散らした。

「ああ……！？」

アークやジャスミンはどよめきの声を漏らし、寡黙で冷静なアル・グレーは息を呑んでいた。それでも目を逸らさずに彼らはその闘いに見入っていたが、レミアは恐怖と不安で一刻も早くこの闘いが終わって欲しいと思った。どちらかが倒れるまで終わらないだろう。だが、どちらも死なずに終わって欲しいと願う。

「ゲアンでなければ、今ので死んでいたな」

関心したようにバドはそう呟き、頼もしいその姿に賞賛し、期待を込めるような笑みを浮かべた。

彼だけが両者の武勇を目にしたことがある。ここしばらくは目にする機会が無かったため成長のほどを知らないが、知りうる限りで二人の実力は甲乙付けがたいものだった。

トレゾウの身体が引力に従い落下する。

そして地面に着地しようとしたその刹那、片手に持ち替えたゲアンの剣が鋭い釜のように弧を描き、横殴りに振るわれた。

誰もが真つ二つにされたトレゾウの無残な姿を想像する。

「殺す気か？」

トレゾウだ。冗談ではない、と顔を引きつらせている。左からの攻撃 自分の右に当たる方向からの一太刀を交わしたトレゾウは、瞬時にゲアンの右肩を軸に、ほぼ平行に飛躍していた。

これこそ、人間とは異質の妖怪と化した彼に与えられた、並外れた身体能力の成せる技なのだ。

そして今度こそ地面に足が付いた瞬間。

防御が空いていたゲアンの左側を首筋目掛けて、トレゾウが斜め一直線に剣を振るう。

「ゲアン!？」

「二ナ……じゃなくてトレゾウ!」

仲間達の絶叫に似た叫び声が飛び

「っ……!？」

“彼”の息が止まった。

ゲアンはトレゾウの攻撃を鉄製の鎧の腕部分で防御し、トレゾウはゲアンの右に移動した剣の一撃を左脇腹にまともに食らい、それが肋骨に響いたため、一瞬の呼吸を止めたのだった。激痛に顔を歪ませ、目には涙を浮かべている。

「く……そ……っ」

トレゾウは地面に頽おそくれた。

「トレゾウ!？」

仲間達から悲鳴に似た不安の声が巻き起こる。

ゲアンは剣を地面に突き刺し、介添人のバドを呼んだ。

「肋骨ろっこつか……」

トレゾウの怪我の具合を見てバドが呟く。鎖帷子チェーンメイルを着ていたため大事には至らなかったが、見事に切り裂かれた皮の鎧が、鋭い剣の切れ味とその衝撃の強さを物語っていた。

「……くっ」

トレゾウの口から漏れる呻うめき声は生々しく、その苦痛を伝えたように見ている者の顔までも歪ませた。

バドは介添人のみ許可された治癒魔法を彼に施す。

そして数分ほどして患部から手を放すと言った。

「もう大丈夫だろう」

それを聞いたトレゾウはゆっくりと上体を起こす。

「直った」

けるっとした顔で彼は言うところかめるように軽く飛び跳ねた。そ

れを見た仲間達は安堵する。

対戦を再開した。

「今度はさつきみたいな手には乗らないぞ！」

長身のゲアンを鋭く見据え、トレゾウは宣言した。

眉を吊り上げ、人差し指をゲアンに向けて突き出す。意気込んだ

その強い眼差し、様子ともどこか憎めない。そこはやっぱり“二

ナ”と同じだ。

「痛いのは嫌いだからな」

続けて真剣にそう言ったのはギャグではない。本人はいたって真

面目だった。

「……」

ゲアンは一瞬無表情になるが、ふと鼻で笑った。

それに不快感を覚えたトレゾウは鋭い眼で睨み返す。

「何で笑う？」

その問い掛けがゲアンには何故か少し愉快そうだった。

「身体はある程度、痛め付けたほうが強くなることを知っているか

？」

その発言に思わずトレゾウは眉を潜めた。

「お前そんなキャラだったのか……？」

訝しげに、そして退き気味にゲアンを見詰め、完全に警戒しきつ

ていた。

「勇者がそんな残酷なことやっていいのか？ 勇者が人をいたぶっ

ていいのか！？」

最後の言葉は吠えていた。それは強い警戒心の表れだ。

彼は実戦では負けたことがほとんどない。それは

“痛いのは嫌いだから”まさにそれが理由だった。そうならない

ようにと今までやられる前に敵を打ちのめしてきたのだ。そして、

この男 ゲアンとはもうやりあいたくはなかった。やればまた痛

い目に遭うと確信してしまったからである。

傍はたから見ても完全に逃げ腰のトレゾウにゲアンは微笑した。

「これは試合だからな」

実に愉快そうだった。その笑みがトレゾウには、だんだん悪魔の微笑に見えてきた。

「お前……っ、本性を現したなっ！」

大魔王にでも遭遇した時のように鋭くそう吐き捨て、勇敢に剣を構えたトレゾウだったが……

「はっ!？」

そうしてみても初めて気が付いた。

はめられた!？……と

しかし、気付いた時には遅かった。ゲアンの構えた剣と視線は完全にこちらへと向けられていたのである。

第十四話：〈婿探し〉 婿役のいきさつ【対戦の行方】（後書き）

5・6 本日誤って投稿済みの第十五話を削除してしまいました。
現在記憶を辿りつつ、再執筆中です。大筋・結末などは変わりませ
んが、記憶の範囲内なので細部が変わってしまうと思います。途中
までしか読んでいなかった方ごめんなさい！（T|T）号泣

第十五話：〈婿探し〉 婿役のいきさつ【対戦の結末】（前書き）

6・8 あ、ありえない設定ミスに気付き、急遽修正しました！（汗）
汗） 剣を握っているのに“あの技”をさせてしまったので……

5・9 付け足した部分と思い出せず復元できなかった部分を足したら、消える前より3000文字近く減ってしまいました（T|T）

小ネタ（恋愛）も加えたので是非読んでやってくださいませ。

第十五話： 〈婿探し〉 婿役のいきさつ【対戦の結末】

こ、この光景は前にも見たことがあるぞ!?

対峙する敵を前に、トレゾウの記憶の断片に彷彿とした何かがある。

そうだ！ 蛇メタルに立ち向かうダムネズミ……

あの時ダムネズミ（あいつ）は勇敢だった。適うはずもない敵を相手に怯むことなく立ち向かい、むき出しにしたあの大きな前歯を忘れはしない。今のオレが置かれている状況はまさにその時と同じ。

『蛇メタルに立ち向かうダムネズミ』とはまさにこのこと！

勝手にことわざを作るトレゾウ。

彼は自分を奮い立たせ、前進した。中段に構えた剣で、敵であるゲアンの下腹部目掛けて突き刺しにかかる。そこは鎧の保護がされていない箇所だ。

その猛獣さながらの突進をゲアンは身を翻してかわし、それを予測していたトレゾウはそこで急停止すると

「っ！」

そこからゲアンの身体を軸にして、階段を駆け上がるがごとく飛躍する。その時ゲアンの手首にトレゾウの体重が一気に押し掛かり、ゲアンは顔をしかめ、思わず握っていた剣を手から離れた。

「うりゃああああっ！」

その彼の脳天目掛けてトレゾウが剣を振りかぶる。

「キヤ！」

思わずレミアは目を瞑り、顔の前に両手を当てる。

「やっ！」

パルファムも同じようにするが、開いた掌の指の隙間から目を丸くして覗き見ていた。

「……………」

馬車から見物する姫君は緊張と興奮が高まった。

「あっ？」

アークだ。次に見た光景に釘付けになる。

「白羽取りっ!？」

ゲアンが頭上に振り掛かる剣を見事、その両手で挟んで受け止めていたのだ。

「キヤー素敵よゲアン! 惚れちゃいそう〜」

「そんなこと言ってる場合じゃないんだけど」

目をハートにしてゲアンに黄色い声援を送るパルファムに呆れて、冷たい視線を送るアークだったが

「あ」

次にゲアンがとつた行動に顔が歪んだ。

「痛い………たいたいたいたいたい〜!」

思わず悲鳴が漏れる。ゲアンが両手で剣を挟んだまま、それを横に移動させたのだ。

「くくくく………!」

トレゾウが負けじと移動したその剣をゲアンの額に戻す。

「……………」

それをまたゲアンが額から遠ざけるように横に移動させ、トレゾウが戻し………が繰り返され

「ああああ………!」

悲痛などよめきが巻き起こる。誰もがその光景に顔を引き吊らせた。ゲアンが剣を挟んだまま移動させる度に、その掌に鋭利な刃が食い込むようで痛々しかった。

と、ふとした瞬間そこへ風が舞い踊った。それを正面に受けたゲアンの髪が舞い上がり、額をさらけ出す。

次の瞬間。ゲアンの手と手の間を剣が擦り抜け

「あ」

彼の額に直下した。

「キヤアアア！」

そこから鮮血が飛沫を上げ、溢れた血液が鼻筋を通って屈折し、頬を伝う。

「いやっ！……」

その惨事を見ていられなくなったレミアはその光景に背を向け、泣き付くようにジャスミンに身を預ける。

「待て！」

審判役の兵士が鋭い口調で制止すると、対戦はそこで一時中断された。

即、介添人のバドが治療に向かう。

「ザックリいったな」

地面に座したゲアンの額患部を見てバドは苦笑した。直径5センチほどの傷口からは、ザクロのように赤い血がどくどくと流出していた。彼はそこに手をかざし、治癒魔法を放つ。徐々に傷口が塞がって行き、やがて完治すると王室が用意した清潔な布で血糊を拭き去る。

「ありがとう」

治療を終えると早くもゲアンの意識は戦場へと向かっていた。さつそうと立ち上がる。

本来の趣旨とは無関係に、彼はこの戦いを楽しんでいた。久方振りに出会った強敵に傷を負わされ、血が騒ぐ。彼の日に当たると金色を帯びるベージュ色の髪に残った血痕が生々しく、勇ましい。その髪が風に舞い、黒いスクエア型眼鏡の全貌をさらけ出した。その奥にある切れ長で青い瞳に宿る勇壮な光が映し出される。それは彼が持つ『勇者』の肩書きには不似合いで、いささか冷酷そうにも見えた。かといってそれは決して邪悪なものではないはずなのだが、そう感じさせてしまうのは彼が持つその美貌が反映したためだろう。

彼は戦場に向かって一步を踏み出した。

「待て」

「？」

呼び止められて振り向くと、バドが近付いてきて眼鏡を外した。
「何故、外す？」

ゲアンは数回瞬きした。突然ぼやけた視界と不意にバドがとったその行動に困惑してしまう。

「掛けなくても心配で分かるだろ」

「そうだが……これでは、こっちが不利になるじゃないか」

ゲアンは不満気に小首を傾げ、少し口を尖らせてバドを睨む。

バドは彼に詰め寄った。

「こつでもしないとトレゾウ（あいつ）はお前に勝てない。お前が勝つたら“意味がない”だろ？」

「……」

確かにそうだった。この対戦は姫の婿を決定する最終関門と言っている。トレゾウは姫のことを気に入っていたし、姫自身もこの対戦に勝てば彼を婿にすると言っていたのだ。ここはゲアンがトレゾウに勝ちを譲るのが妥当だろう。それで万事収まりが着くというもの。

と分かっているのだが

「……」

わざと負けることが不服なゲアンであった。瞳に不満の色が浮かぶ。

すると不意にバドが何かを差し出した。

「？」

受け取ったゲアンの手にはずしりとした鉄の重みが伝わる。それは鉄製の兜だった。

「トレゾウ（あいつ）は一度痛い目に遭うと死に物狂いで反撃するからな。頭をかち割られないようにそれを被っておけ」

こんなものを被ったら更に視界が狭まる上に、重さで動きまでも鈍くなる。もしかして、バドはオレのことが嫌いなのか？

ふとそんな考えが思考の片隅を過ぎるゲアンだった。

「お前ら！ 何をイチャついている（？）」

痺れを切らしたトレゾウの怒気を孕んだ声が飛ぶ。

「では、うまくやってくれ」

「……」

悪意を持ってか、否か、微笑でバドは送り出した。

ゲアンは兜を抱えて位置に着くと、そこで兜を被った。途端、鉄の囲いが出現し、視界と音を遮断する。

「ほお、今度はそれを被って完全防御か」

だから強くなったとは微塵も思っていないトレゾウの言葉だった。審判役の兵士が下がり、対戦者同士が剣を構える。

「始め」

対戦が再開した。

「キエエエエ〜ツツ！」

トレゾウの人間離れした（妖怪です）裂帛の叫びが響く。ゲアンはまず防御体勢をとった。黙っていてもトレゾウの容赦ない攻撃が繰り出される。首だけを狙った連続攻撃だ。

ゲアンは最初それを防御することしかできなかった。

こういう状況に陥った時の訓練もしておくべきだったな……

と苦笑し、今更ながらに痛感した。

そんな彼に無邪気な破壊者トレゾウの攻撃が続く。疲れを知らないのか、その攻撃を一向に休めようとはしない。それもでたらめではなく、確実に狙った部位を捕らえようとする。その時繰り出される“切る”、“刺す”、の連続攻撃を防御しながら、ゲアンは身体で感じとった。次第に迫る瞬間の微かな空気の流れ、気配を感知できるようになってきた。いつの間にか避けることは可能になる。このまま行けば……

そう思ったが、“負けなくてはならない”と強く暗示をかけて思いつどまる。そんな彼の葛藤も露知らず、相変わらず勢いが止まらぬトレゾウだった。狙うのはやはり首だ。わざと負けるにしろ、致

命傷を負わされることを避けたかったゲアンは、トレゾウから離れるように背後に引かれた線に向かって後退した。

「おっと、逃げるのはナシだぞ」

それを許さぬトレゾウが飛来して前に立ち塞がり

「……っ！」

思わず、頭の中で舌打ちするゲアンだった。

その対戦が始まってから既に三十分が経過していた。制限時間を示す松明は未だ赤々とした炎をくゆらせているが、いつしか雲行きが怪しくなっていた。上空に暗雲が浮かび、地上に闇を作り始めたのだ。

「曇ってきたわね」

「……」

「遠くで雷鳴ってない？」

「やだ。私、雷が苦手なのに……」

「え〜っ、あたしも雷怖あ〜い！」

それを見上げた仲間達から、不安の声が飛び交う。

すぐさま伝言役の兵士が姫君の下へと駆け付け、帰途を勧めるが

「まだ遠くだし。続行して」

と軽く受け流され、姫君はまたすぐに見物体勢に戻ってしまった。

仕方なく兵士は引き下がり、対戦を続行された。

「あなたはどっちが勝つと思う？」

兵士がいなくなるとすぐ、姫君は侍女に問い掛けた。

「……」

侍女は言葉を詰まらせる。本当は王室勤めの女性にも好感度の高いゲアンを応援していた彼女だったが、今その意思を示すわけにはいかなかった。ゲアンはこの姫君を振った男だ。幸いにもこの時優勢なのはトレゾウであったし、その様子は剣術に疎い素人の目から見ても歴然としていた。もちろんこう答える。

「私は、あの少年が勝つのではないかと思えます」

少年とはトレゾウのことである。

気持ちとは裏腹なことを言いながらも、そう答えた彼女の言葉に白々しさはでなかった。

「そつよね〜?」

姫君の表情が輝いた。それは得意気で『私の目に狂いはなかった』
とでも言いたげな、喜悦に満ちた表情だった。

この間も雷鳴は唸りを上げていた。対戦も続き、位置を変えながらトレゾウは攻め続けていた。

「防御ばかりするな。つまらないじゃないか」

「……」

トレゾウは駄々をこねた。玩具で遊ぶ言葉のように無邪気な調子ではあったが、ゲアンはそれを相手にはしてられない。

あの線を越えなくては……

その間も響いていた雷鳴は、地面や空が割れてしまうのではないかというほどの低い轟音を響かせ、すぐにまた伝言役の兵士が姫君の下へと駆け付けた。

「まだ行けるわよ」

しかし彼女は強情で、淡泊にそう受け流されてしまった。そんな彼女のわがままに伝言役の兵士は頭を抱えるばかりだった。

雷鳴はいよいよ本格的になって行くが、かえってそれはいい演出効果となってしまう、姫君マージユの闘争心を掻き立てた。気分は高揚し、盛り上がるばかりである。

「キャ！」

侍女がつい悲鳴を上げた。ふいに白光が一带に広がった瞬間だっ

た。その後、間隔を空けてから雷鳴の轟音が鳴り響く。それは不気味に落雷が起きることを暗示させているようだった。姫君はあんな調子だったが側にいた侍女はすっかり怯えていた。落雷の度にびくつきしてしまふ。

そして、ふいにまた辺りに白光が広がった。その直後

今までにない凄まじい炸裂音とともに轟音の刃が、ある一点に直撃した。ジグザグを天に描いたような、その見事な雷光が直撃した先は剣だった。

天に向かって掲げられたその剣を握り締め、屹立するのはトレゾウだ。雷電の放射熱により、剣は墨化し、彼自身もまた鎧ごと焼け焦げ、煙が発生していた。彼はそのまま燃え尽きてしまったかのようになり直立不動となっている。

「なんてことだ!？」

「可哀相に。衝撃のあまり、身体が硬直してしまったんだ……」

その姿を目の当たりにした者からは、そんな哀れむ声が上がった。誰もが彼の絶命を悟ったが……

「？」

その身体が微動した。

「おお……」

「動いたぞ!？」

左右に首を曲げるトレゾウ。

「周りに落ちると危険だから、避雷針になった」

ケロツとした口調でそう言った彼だったが、身体には応えていたようでも、顔を引き吊らせていた。普通の人間であればまず即死だったが、彼は妖怪である。その可能性をどこまで秘めているものか、彼自身も知らなかったが……ただものではないことは確かだ、というようにしておこう。

「生きてたぞ!？」

周りにいた者はその生還を褒め称えるかのように感嘆の声を上げた。

その様子を見ていた姫君はすっかり感動してしまっていた。

「なんて勇敢なの！ 彼こそ私が求めていた理想の男性像そのものだわ……」

と大絶賛だったが

「姫、それよりも早くここから離れないと危険です！」

伝言役の兵士に叱るように促される。

トレゾウは墨化してしまった剣を道具係に差し出した。

「これじゃあ使えない。替えてくれ」

とツンとした表情で訴えるが

「馬鹿を言うな！ この雷で続けられるわけがなかるう。試合は中止だ！」

と叱責された。

「松明はまだ消えてない！」

と反駁するトレゾウだったが

「松明は関係ない！」

と一掃され、あっさりとはそれは棄却されてしまった。

この後伝言役の兵士の懇願するような説得により、姫君がようやく折れ、その対戦は幕を閉じた。

城に戻るとさっそく、姫君とトレゾウの婚約を祝う宴の準備がなされた。姫君はその身支度に、トレゾウも男性の召使に連れられて支度に向かった。トレゾウはぶっきらぼうな表情で召使いの後ろを歩く。白亜の壁が続いていた。この国の王の好みなのか、城内は白を基調とした造りが目立っていた。白い廊下を進む途中、壁に立て

掛けられた何枚もの肖像画を目にした。下に歴代の王の名が記されている。それをぼんやり眺めるトレゾウは

みんな同じ顔だ

と思った。

いくらか進み、まず案内されたのは風呂場だった。そこに入った途端、無言だった二人の男性召使いが口々に言った。

「どうしたらそうなるんです？」

「煙突からでも落ちたんですか？」

トレゾウの煤けたように焼け焦げてボロボロの服と身体を見て、二人は疑問の表情を浮かべた。

「雷に撃たれただけだ」

あっけらかんとした口調で言ったトレゾウのその話をどこまで信じて良いものか分からなかった二人は

「あはははは」

笑っておいた。

「お前ら、いつもこんなにちまちまやってるのか!？」

広い浴場でトレゾウの憤慨した声が反響する。彼の身体を入念にスポンジで洗う二人の召使いに切れていた。

「そうですが……何か？」

「無いのか!？ ゴシゴシタオルっ!」

「?」

「?」

二人の召使いはきよとんとした。

「ゴシゴシ……何ですか？」

「何ですか？」

同じ言葉を返され

「お前ら双子かつ!？」

余計に苛立つトレゾウだった。そんな悪戦苦闘を続けながらも、風呂から上がったトレゾウは、結果的にはもとの肌より白くなっていた。薄いガウンだけ着せられ、次に案内された部屋で正式な衣装に着替えることになった。さっきの召使い達がまた担当し、衣装を用意した。

やっぱりこういふのを着せられるのか……

用意されたのは黒いタキシードとそのアクセサリー類で、そのことを窮屈にも感じたが、それよりも……

「……」

急に無言になり、たんたんと作業を続ける二人の召使いがだんだん絡繰り人形に見えてきた彼は

「……っお前ら! 気持ち悪いから、何かしゃべれ!」

そのことに憤慨した。

「しゃべれと言われましても……」

「何をしゃべればいいですか?」

「……っっ」

噛み合わない二人の召使にすっかりペースを狂わされたトレゾウは、そのやり取りを完全に放棄した。

主役の姫君とトレゾウが支度を終えて着席すると宴が始まった。それは正式な発表をする前祝いのようなもので、城内にいる者達だけで行われた。

「これでこの国も存続することができる」

「マージユも良い男性ひつが見付かって良かったわ……」

国王は国の存続に安堵し、王妃は娘の婿が見付かったことを喜んだ。

その宴は規模を縮小していながらも、充分盛大なものだった。広間に何台もの丸いテーブルを並べ、クリスタルグラスに注がれたワインやシャンパン、大皿に盛った鳥の丸焼き、色彩鮮やかな野菜や果物の盛り合わせが次々と運ばれる。それらを輝かせる天井のシャンデリアの灯。その煌びやかな光景に、目を奪われたのはアーケだけではなかった。

「オレ達には贅沢すぎるよね？　なんかちょー浮きまくりなんだけど」

そう言いながらも損しないようにと喜びながら料理を味わうアーケだった。

「クスッ」

そんな彼を見ていつになく上品に笑うジャスミンだったが、口には出さないながらも食する度、感動の連続だった。

この頃ゲアンは、国王に呼ばれて席を外していた。

「あ〜ん。ほら、口開けて。食べさせてあげる」

地元か？　というほど緊張感のないのはパルファムだ。彼はアル・グレーを新たな標的に、スプーンで毒を差し出した。

「いえ、結構です」

大人の対応を心掛けるが、額から冷汗が出るアール・グレーだった。

「……………」

緊張してなかなか食が進まないのはレミアだ。頼杖を突いている彼女に優しい声が掛かる。

「これ、美味しいぞ？」

「えっ…………？」

さりげなく気を配ったのはバドだった。年下で不安になりやすい彼女を和ませようとしたのだ。緊張を解きほぐそうと柔らかな微笑を送るが

「!?!」

レミアは悩殺されてしまった。彼女の大きな赤茶色の目が瞳孔まで開く。

「ん?」

バドは小首を傾げ、その瞳を見詰めた。

「……!」

しどろもどろになったレミアの目が泳ぎ

直視しないで!

声に出さずに目でそう訴える。

彼の瞳は綺麗すぎたのだ。切れ長で透き通るようなグレーは、まるでガラス細工のようだった。深く入った目頭と全体を結ぶ鋭角なラインが鋭い印象を与えつつ、そこに男性的で大人の色気が混ざっている。それに四秒 いやもつと、見詰められた途端恋に落ちてしまいそうだった。

「……」

その瞳が逸らされる。彼は軽く脇を見て笑った。

「?」

レミアは何故そうしたのか分からず、困惑してその様子を見詰めた。

「どうしたの?」

そう尋ねる彼女を見ずに笑う彼は照れていた。嬉しくて、つい幸せな笑みが零れてしまうのだ。だが、その真意を解せないレミアは不安気で泣きそうだ。それがまた可愛くて仕方ない。

「ふ………何でもないよ」

「?」

レミアは首を傾げるが、いつの間にか気持ちぐ安らいでいた。

姫君の隣りでトレゾウはやはり料理を楽しんでいた。彼は緊張というものを知らない。一国の姫君を横にしても食欲旺盛だった。

「このフルーツ、シユワシヤワしてうまいな」

とぼやきながら果物の盛り合わせをほとんど噛まずに飲んでいる。

「あんまり食べすぎると酔っちゃうわよ」

「へ？」

姫君の言葉にトレゾウはフォークを握る手が止まり、ぼかんと間の抜けたような表情になる。

「そのシロツプ、“お酒”が入ってるから」

「？」

トレゾウは驚いた表情をしたはずだったが、酔っていたので瞋だけ置いて行かれたように眉だけ上がった。

「ひやはははは！」

それを見た姫君は馬鹿笑いし、はっとしてそれに気付いてから、恥ずかしそうに口許を手で隠す。

和やかな時が流れ、このまま何事もなく無事にこの祝宴が終わるはずだったが

間もなく事態が急変する。それもあっけなく……

相変わらずフルーツ盛りを食べ続けていたトレゾウだったが、次第に異変に気付き始めた。

景色がブレる。焦点が合わない。何だか揺られているような感覚。意識が朦朧とし、声が遠くに聞こえる。その視線を姫君に移動させると

笑っていない。

歪んで行く。

怯えるように

目が、口が開かれる。

「あなた“誰？”」

自分を見詰める姫君の絶望する表情がはつきりと目に映しだされる。トレゾウはふと視線を下に移して驚愕した。

フィンガーボールに映った自分のその姿は、トレゾウ　その人ではなく

“二ナ”だった……

第十五話：〈婿探し〉 婿役のいきさつ【対戦の結末】（後書き）

嗚呼、やっと10000アクセス超えた…orz

何故か前話のアクセス数があまり増えずに最終話ばかりが増え続け、その差がどんどん広がっていくという不思議な現象が……（-_-;）
できれば飛ばさないで読んでください（TOT）/
そこは繋がってますから〜！！（泣）

第十六話：〈婿探し〉 その結論として…（前書き）

これまで同じサブタイトル繋がりでしたが、この回（16話）以降からは書き方が変わったので、続けてお読みください。繋がってます。ややこしくしてすみません！

第十六話：〈婿探し〉 その結論として…

トレゾウが女の体に戻ってしまい、姫との婚約は破談となった。そうなってしまうたことを女体化したトレゾウ「二ナは姫や国王、王妃、そして仲間達に深く謝罪した。

アルコールを接種すると変身をしなくても性別が変わることを二ナは分かっていたが、目の前に並んだ御馳走に目が眩み、すっかり油断してしまっていた。アルコールがワインやビール以外にも使われるとは考えもしなかったのである。普段アルコール入りのデザートなど口にしなない二ナ、トレゾウにとってあのデザートは、まさに初体験の品だった。そんなわけで悪意がなかったことを説明し、さらには面前で酒を飲み、それを実証して見せた。すると啞然としたのは王や妃だけではなかった。古くから付き合っているバドすらもである。彼は今日までそのことを知らなかったのだ。

一行は城門を抜け、下りた跳ね橋を渡り、ドチュール城を後にした。

町で貸衣装を返しに行つてからも彼等の周りには重たい空気が立ち込めていた。店の中でのやりとり以外は誰も口を閉ざしている。店を出ると二ナが軽い身のこなしで先頭に進み出た。

「二ナ！」

そのまま消え去りそうに思ったバドが呼び掛ける。すると二ナが立ち止まり、くるつと振り向いた。旅先で遭遇した時のだぶついた土色のマントが閃く。無骨で大きな帽子に小さな顔が埋もれそうになっている。

「オレはもう用無しだろ？　じゃあな、役に立てなくて悪かった」

帽子の鍔越しから人形みたいなくなりつとした目を覗かせて、二ナは味気無く言い捨てた。

「待て」

駆け寄ったバドが二ナの肩に触れる。

二ナは煩わしそうに首を横に巡らし、視線だけ背後に向けた。

「何だ？ もう用は済んだだろ」

「謝りたいんだ」

「謝りたい？ 何をだ？」

二ナは怪訝そうに眉根を寄せ、長身のバドの双眸を見据えた。

「バド、そのことはオレが……」

「いい、オレが話す。誘ったのはオレなんだ」

詰め寄ってそつと囁いたゲアンを下がらせ、バドが言葉を紡いだ。

「パルファムさんも」

「え？ あたしも？」

何かしらとルンルン気分のパルファム。彼は爪先立ち気味の軽い足取りで、バドの側に赴いた。鼻歌混じりの彼の後ろで、仲間達から深刻な空気が流れる。

「二ナとあなたに姫の婿役をお願いしたのは、ある条件にあなた方が相応しいと判断したからだったのです」

パルファムが促す。

「条件、どんな？」

「姫は結婚相手の基準を “ゲアンよりも心身ともに格上で、美男子であること” が条件にしたのです」

「……」

「……」

パルファムはきよとんとし、二ナはむっつりとしていた。

「え、あの顔”よりつてことでしょ？」

パルファムがゲアンを尻目に見やる。

「そうねえ、系統は違っけど、あなたの審美眼は間違っと思ってないと思っわ。私的にはこの美貌もありかなって感じだし」

ないないないない……

アークが頭を振って、小声でそれを否定した。

「……」

二ナはまだむっつりとしていた。

バドはパルファムを黙殺し、続きのもっとも言い辛い部分を口に
する。

「しかしそれは形だけのつもりでした。姫はゲアン以外とは結婚す
ることを望んでいないのです。それであんな無理な条件を……」

パルファムが哀れむように表情を曇らせ、胸の前で両手を包み、
遠い目をする。

「分かるわ、姫の気持ち……ゲアンのことが好きなのね。だからや
けになってるんだわ。ああ、かわいそうな姫様。同じ“女”として、
慰めてあげたい」

女じゃないし。アークが独語する。

おじさんだから。ジャスミンが毒を吐く。

「どちらも婿に選ばれるようなことにはなりませんでしたが、利用
してしまったことをお詫び致します」

バドが頭を下げ、見ていた他の仲間は皆気まずくなる。

「だから何だ」

重たい空気が切り裂かれた。その声の主に皆の視線が集中した。

二ナだった。懐疑的な眼でバドを見据えている。

「その“おっさん”はどうだか知らないが」

「おっさん!?……」

二ナに言われたショックで、パルファムの顔が固まる。

二ナの言葉が続く。

「オレはお前がそう企んでたことにうすうす気付いていた。分かっ
てて利用されたんだ。分かかって婿になるために男に変身して、そ
のまま一生男の姿のまま生きる道を選んだんだ。男になった時のオ
レはお前のことを好きじゃないから、好きな感情を持たないから、
その感情が消えるから……っ！」

二ナはバドを見据え、語尾は嗚咽混じりに吐き出した。長い睫毛に縁取られた丸い目から大粒の涙が零れる。丸めた指でそれを拭いながら、唇をへの字に曲げてバドを睨む。

「二ナ……」

堪らず口からその名が零れ、バドは二ナの肩に触れた。抱き寄せると、二ナは彼の胸に頭を押し付けて呻いた。そんな彼女がバドには、壊れやすく繊細なガラス細工のように映る。

「すまなかった。お前がそんな覚悟を決めていたなんて思わなかった。辛い思いをさせて悪かった」

「……っっ！」

二ナはバドの服をくしゃっと鷲掴みにして、そこに哀しみをぶつけるかのように嗚咽を上げる。

バドは二ナのやわらかな金色の髪を撫でながら言葉を継いだ。

「だが、選ばれなくて良かった。この姿のお前に会えなくなってしまうたら、哀しすぎる」

「バド……」

二ナがさつと顔を上げ、バドを仰ぎ見た。ぴたりと泣き止み、ケロツとした表情をしている。

「どういう意味だ。前はあんなことを言っておきながら、本当はオレのことが好きなのか？ 惚れてるのか!？」

二ナは興奮して、目玉をぎんぎんに見開く。穴が開きそうなほどバドの顔を凝視して、その思考を探った。

バドの唇が動き、その答えが紡がれる。

「お前のことはかわいいと思ってる。女の時も男の時もな」

「男の時もだと?……変な意味か?」

不可解そうに睨む二ナにバドは

「いや」と軽い微笑を交えながら否定する。

「オレにとつて女の時のお前は妹で、男の時のお前は弟みたいにかわいい存在なんだ」

「何……っっ!?!」

期待していた答えと違ったため、二ナはバドに向かって不満をぶつけた。

「お前、そうやって女心を弄んで泣かしてきたな！？……くそくそくそくそ……っつうっつうっ」

二ナはまた泣き出し

「お前なんか嫌いだあ〜」と地面にくずおれるようにしゃがみ込む。「でもな、二ナ」

その傍らにしゃがんでバドは話しかけた。二ナがむくつと顔を上げる。

「恋人は仲違いして別れる日が来るかもしれないが、兄弟は喧嘩しても、離れて暮らしてもずっと兄弟として繋がってる。オレ達は兄弟みたいなものだから、ずっと繋がっていられるんだ。関係が切れることなく」

「切れることなく……？」

円らな瞳で問い掛ける二ナにバドは優しい声で

「そうだ」と返す。そこに添えられた穏やかな微笑に二ナの心は安らいでいった。

「ずっと繋がっていたいだろ？」

「おう……」

脳の片隅で、遠回しに恋人にはなれないと仄めかされていると分かっていた、こんな言い方をする彼を“ずるい”とも思うのだが、そんな時の彼の声や表情はまさに魔法だった。まるで抗うことができなかつた。そんな台詞をそんな顔で言われたら、どんな凶暴な野獣でもあつという間に手懐けられてしまうだろう。分かっているが、反発できない二ナだった。

こうして二ナとバドの関係も落ち着き(?)一件落ち着いた。

パルファムは明日から仕事らしく、慌しく持っていたバッグの中から名刺を取り出すと「お店に遊びに来てね」と全員に配ってから、

ANOTHER WORLD “禍根Xの原本”

去
っ
て
い
っ
た。

第十七話：変事

マージュ姫の婿捜しで集った仲間達は解散して、各自日常の生活に戻った。一悶着あってからバドと和解した二ナだったが、あの後バドに照れながら

「団体行動は苦手だ」

と言い、残留の誘いを断った。そして

「オレにはさすらいが似合うからな」

男前な口調でそう言い残すと、バドら一行のもとを離れて行った。土色のマントをなびかせて、華奢な少女の小振りな頭には明らかに不釣り合いな鍔広の帽子を揺らしながら歩くその後ろ姿は、滑稽でさすらいの旅人そのものであった。

「暑く暑い……」

畑仕事を手伝っていたアークは流れる額の汗を首にかけたタオルで拭いた。大気中に陽炎がゆらめき、景色が波打って見える。

この地方は一年を通して気候が暖かく、春は短くその分夏が長期に渡って続き、秋冬は変化に乏しい。厳しい寒さはあつという間に去り、すぐに春が訪れる。今はその丁度春の時期だったが、快晴の陽光は肌をじりじりと焦がすように強かった。

ゲアンを師事してアークがこの村で暮らすようになってから早三年。ゲアンが講師を勤める青空教室に行く日以外は、農家の畑仕事の手伝いや雑用をやって稼いでいた。その仕事にも慣れてきたが、この灼熱を思わせる直射日光の熱は苦手だった。暑さにへたばりそうになりながら涼を求めて、漁師か海女さんに転職しようかな？などと考えてしまう。

他の仲間はというとジャスミン、アールグレイの双子兄妹は近隣の街に出稼ぎに出ていた。アールグレイはアークとともに畑仕事に

参加しようと考えていたのだが、妹のジャスミンは

「日焼けは嫌っ！」と反発した。彼女なりの自分の踊り娘としての理想形スタイルがあるらしいのと、活気のある都会で発散したかったようだ。兄のアールグレイに

「たまには人前に出て披露しないと腕が鈍なまっちゃうわ」と相手にも利があることを述べつつ我を張った。アールグレイはそんな妹の性格と扱いを熟知しているので、あえて意を唱えることなく黙ってそれに従ったのである。アークは残念そうに……ジャスミンがイイ感じに日焼けしたら、もっとセクシーになりそうだったのに、見たかったなあ……と嘆き、小麦色に日焼けしたジャスミンが過激に露出した踊り娘の衣装を身に着けて、くびれた腰に手を当てた挑発的なポーズでアークを誘惑しているというエッチな妄想をしてしまうのであった。

それはさておきレミアはというと、彼女はデューダに付いているいろと教わっているようであった。ときに二人で市場へ出かけて食材を仕入れたり、裁縫を習ったりしていた。

女性らしさを兼ね備えた年長のデューダに、レミアは憧れを抱いていた。以前ゲアンに思いを寄せていた頃は、彼女の気立ての良さや美しい容貌が妬ましかったが、新たな恋が始まってからは胸裡に宿る陰の部分が姿を消して心が晴れ、彼女を同姓の先輩として自然と慕うようになっていた。母娘二人きりの生活が長く兄弟がいないレミアにとって、いまやデューダは理想的な姉のような存在になっていた。

そしてバドだが、彼はハンターの仕事で各地を回る日々を過ごしており、この日は早朝から出かけていた。

夕刻、空はうつすらと暮れかけていたが日が延びたため、まだ明るかった。ゲアンはドチュールの城前広場で民衆対象の青空教室の講師（ドチュール王提案）、使者、その他の急務に携わる職務を与

えられていた。過去に王から“勇者”という特異な称号も授けられており、彼はドチュール王のお気に入りでもあった。

彼は今、城を後にして帰宅の路に着いていた。夕餉漂う城下町に、馬蹄が石畳を蹴る音が軽やかに響く。彼は葦毛の牡馬に乗って街道を抜けて行つた。平服姿で腰帯に長剣を差し、革地の雑嚢を肩から腰にかけて斜めに背負つただけの軽装であつた。勤務時は支給された制服を着ることを義務付けられており、雑嚢の中にはそれが入つていた。翌日それを着て他国を訪問する任を授かつており、アイロン掛けまでされた制服を汚さないために袋に入れていたのである。

丘や谷を越え、森林地帯を抜けて馬を駆ること数時間。遠方に集落の明かりが転々と見えて来た。彼が住んでいるロゼブル村だ。空は暮色を増した青灰色に染まり、大気も涼しく感じられる。彼は馬を馭して少し速度を緩めた。平らにならただけのでこぼこ道が続いている。その道をさらに奥へと進んで行つた。

ゲアンが家に着く数十分ほど前。

帰宅したジャスミンは荒れていた。衣装の上にケープを羽織つたまま、どかつと食卓の椅子に腰を下ろすと、深いスリット入りのワンピース姿で堂々と足を組んだ。肉付きの良い乳白色の太股が露になる。スリットがはだけて片足の付け根辺りまでを無防備にさらした姿が艶めかしい。

「ウォー！」

アークには嬉しい光景であつたが

「~~~~っつ！」

当人はそんなことは気にもならないようであつた。それよりも何かに対して懊悩しているのか、非常に悔しそうに顔をくしゃつとしかめたり、悪態を付いていた。心配したレミアが気を利かせて、水

を注いだ杯を渡す。

「ありがと……」

受け取るなりジャスミンはぐいっとそれを一気に飲み干して、叩き付けるような勢いで卓に置いた。

「なんかあったの？」

アークが居心地悪くその場を去ろうとしたアールグレイにそっと尋ねる。

「……」

アールグレイは浮かない顔をしたが、アークを奥にある台所に連れ出してから言った。

「行った先で行儀マナーの悪い客がいたんだ……」

話によると二人はいつものように道端で踊りと笛の芸を披露していたのだという。そこへ頭にターバンを巻いた船乗り風の男が近付いてきた。連れの男性もいたが後ろで見物していたらしい。ターバンの男は他の見物客に構わずその間隙からジャスミンに接近した。ニヤニヤしながら女性を恥辱する聞くに耐えない悪罵を吐きながら彼は手を伸ばし……

ジャスミンの豊満な胸を触った。

激怒したジャスミンは

「何すんのよっ！」

相手の頬に痛烈な平手打ちをお見舞いした。あとは二人でそのまま逃げるようにと村まで一目散に帰って来たのだという。

「あららあ……」

アークは苦笑した。他人事のようなのである。男のアークには、女性が他人に胸を触られるという屈辱の重さがいまいち伝わらなかつたらしい。ちよつとしたおかしな話を聞いた、といった程度の反応だった。

そこへ衣擦れの音がして、もう一人が帰宅したことを報せた。片紐の雑嚢を斜め掛けにして背中に背負い、腰に剣を帯びた長身の男性だった。その姿を発見するなりジャスミンが駆け寄った。

「ゲアンくっ！」

ジャスマミンは悲しみにくれた表情で彼の胸に飛び込んだ。

「どうした？」

受け止めたゲアンはそう問い掛け、胸の中で怯えるように縮こまるジャスマミンの体をそっと離れた。

ジャスマミンが顔を上げる。サファイアを思わせる水色の大きな瞳が潤んで光輝いている。

「酷い目に遭ったの……」

「……」

ゲアンは一瞬困惑したが

「話を聞こう」

と優しく彼女の背中に手を回し、食卓の置かれた広間に誘導した。そこに残っていたレミアは席を外して台所へ移動する。去り際にゲアンは

「すまない」と彼女に目配せした。

ジャスマミンはケープを脱いでまとめた。ゲアンは椅子を引いて彼女を席に着かせた後、荷物を床に下ろして向かいの席に座った。

ジャスマミンは何故か落ち着きなく視線を動かした。周りの目が気になるのかとゲアンが思っていると

「こっちに来て……」とジャスマミンが上目使いで甘え、ゲアンを隣に座らせた。

ジャスマミンは泣きそうな表情でこの経緯を語った。

「ね、酷いでしょ？ その男、私の胸をこっやって触ったのよ！」

ジャスマミンは自分の胸をむぎゅうつと握って再現して見せた。

「本当最低っ」

とぶるつと身震いして両手で体を抱き締める。豊満な胸が中央に寄せられて深い谷間ができた。

「……」

黙って聞いていたゲアンの唇が動く。

「しばらくはそこには行かないほうがいいかもしれないな」

「そんなあ〜……」

ジャスミンは首を横に傾けてがっくりと肩を落とす。尻目にゲアンの顔を見た。谷間に興味を示す様子は見られなかった。ジャスミンは不満そうに口を尖らせる。

「あそこ取締が甘くて気に入ってたのになあ……」

「そういう所は進められない。おそらく治安が悪い地域だろう。殴った相手にまた遭遇して、因縁を付けられないとも限らない」

「襲われたらゲアンがそいつをやっつけてよあ？」

ジャスミンは猫撫で声を出し、上目使いで媚態を示した。

「そういう人間とは関わらないほうがいい」

しかしゲアンは淡白にそう言っただけで席を立った。ジャスミンの肩を慰めるように軽く叩くと、荷物を持って階段を上っていく。

「……〜っつ！」

一人取り残されたジャスミンは悶々とし、ゲアンに対して密かに敵愾心を燃やすのであった。

「食事の後、皆に話したいことがある」

食卓を囲む仲間に向けてゲアンが切り出した。

長方形の卓の向かい側の席に座するアークが表情を曇らせる。スプーンをすくう手を止めて、スプーンを皿に置いた。

「バドがまだ帰って来てないよ？……」

バドとは幼少の頃からの知り合いで、彼にとっても懐いているアークは、彼の不在中に改まった話　とくに依頼の話をしてほしくなかった。バドは卓絶した剣士であり、戦士としても兄貴分としてもアークは尊敬している。冒険に彼は欠かせない存在であり、彼がないとアークは寂しいのだった。

その様子を見て隣席のアルグレイをはじめ他の者も大人しくな

り、物音を立てないようにと気を使った。

ゲアンが眼鏡越しに見える美しい切れ長の瞳を細めて微笑した。「あいつはいつ帰って来るか分からないから、帰って来たら話すことにする」

ゲアンの微笑は柔和で宥められていると分かるのだが、少しバドに対して彼は冷たいというか、乾いた印象がある。あまりべたべたするのも考え物だが……

そんなことを思いつつ、アークはとりあえず重たくだが頷いた。

食事を終えてとりあえず食器を洗い場へ運び、全員着席したのを見計らってからゲアンが話を始めた。

「ドチュール国王陛下からあるお話をいただいた」

それはドチュールと隣国との国境南西部で起きた。

大陸西端から流れているキュラー河は、ドチュールと隣国を跨いでさらに東へと続いている。問題は丁度その境目で発生した。河の両側にはもともと森林が存在していたが、それは数百年ほど前からほとんど変わらぬ地形であり、森林の面積が大幅に変化したという報告もされていなかった。

先月のことである。隣国モンスレーで騒動が起きた。その森林が河に接近していると、宮廷画家が言い出したのである。小高い丘の上に建つ屋敷の上から見下ろした景色を描こうとしたところ、彼はその変化に気づいたという。それを聞きつけたモンスレー国王は兵士を送ってそれを確認しに行かせ、話が事実であることが判明した。しかし王はその件を軽んじて扱い、兵士らに拡大したと思われる樹木を伐採させるに止どまった。

ところが数日後また画家が騒ぎ出し、異変が発覚した。かの森の樹木が異常繁殖していたのである。今度は樹木が河にまで葉を広げ、通行の妨げになってしまっていた。

「これは魔の類たくいの仕業かもしれぬ」

さすがに今度は軽視することもできずにそう訝った王は、森の実

態を探るべく歩兵、騎兵の合計約百名あまりの部隊を編成し、森の最深部まで潜入することを命じて彼らを現場に派遣した。

「それでどうなったの？……」

アークは小さな戦慄を覚えながら、好奇心からそう尋ねた。他の者は息を潜めて聞き入っていた。

ゲアンが言葉を紡ぐ。

「兵は、ほぼ壊滅したそうだ」

「なんで、何があったの？」

アークは話に食いついて前のめりになり、目は驚愕に見開かれていた。

「生き残った兵士はその衝撃で精神失調を来し、まともに話ができない状態らしい」

前途が閉ざされたかのようなゲアンの台詞に、他の者は唸るだけで言葉を失った。

「じゃあ、どうするの？ そのまま放置されちゃうの？」

アークだけが納得いかずに疑問をぶつけた。

ゲアンは静かに頭を振った。

「？」

純粋な少年の澄んだ瞳で見詰めるアークの肩に、ゲアンが手を置く。

「再調査しに行く」

「え……？」

アークはきよんとした。が、すぐに慌てて問う。

「まさか、先生が？」

「……」

ゲアンが静かに頷く。

「この話を伺った時にそうすることに決めた」

「そんな、百人も兵士が行って全滅しかけたぐらい危険な場所なんだよ？ そんな場所になんで先生が行かなくちゃいけないの！？」

「あの河が塞がれてしまうと船での移動ができなくなり、物資の輸送などに遅れが生じてしまう。これはドチュールとモンスレーだけの問題ではない。他の国にも影響が起きてしまう。早急な対応が必要なんだ」

「でも……」

アークは反論しなかったが、言葉が見付からず言葉を詰まらせた。哀しく一吠えする子犬のような顔をする。

ゲアンは目を細めた。宥めるようにアークの顔を見る。そのまま彼を抱き寄せた。

「大丈夫だ、アーク。オレはこう見えても偉大な魔術師に育てられた男だ。師から授かった能力は、ちからこういう時のためにある」

アークが顔を上げてゲアンを見る。目が潤んでいた。

「でも、やっぱり……」

「そうよゲアン、一人で行くなんて危険すぎるわ！」

堪らなくなったジャスミンの反駁する声が飛んだ。

「オレもそう思う」

アールグレイも反対した。

「その話、もう受けちゃったの？」

か細い声でレミアが尋ねた。そうでないことを願う眼差しがそこにあった。

「……」

ゲアンは何も言わず俄かに微笑した。

「そんな……」

アークが絶望に目を見張る。

「死んじゃうかもしれないんだよ！？ そんな話断ってよ、ねえ、先生！」

アークはゲアンの体を揺さぶって、必死で説得しようとした。

「……分かった」

「え？」

アークの瞳が輝く。ゲアンは自分の両腕を掴んでいるアークの手

に自分の片方の手を乗せた。

「誰か同伴してくれる人間を探してみる」

「って……そんな人見付かるの!? 一人や二人増えたって意味ないんだよ? それにそんな所に来てくれるような命知らずのお人好しなんているわけないじゃん!？」

「多分いないだろうな」

「ちよつとお!……」

深刻そうに聞こえないほど屈託のないゲアンの口調に、アークは顔を紅潮させて憤慨した。というか呆れてしまった。

ゲアンがアークの背中に手を当てる。

「心配するな、強力な助っ人を探しておく。千人の兵よりも強力な奴をな」

そう言つて微笑した。そして寛ぐように親指に顎を乗せ、両掌で鼻梁までを包み込む。彼はその覆いの中で

“竜^{ドラゴン}を倒せるような奴を……”
その言葉を小さく独語した。

第十八話：狩人

「つくしっ！」

フェイカ大陸南東部ヴァンホー湿原に、青年のくしゃみが響いた。
「風邪か？」

「……かもしれん」

青年はどこかしら腑に落ちずに小首を傾げた。彼は馬に乗っており、連れの少年がいた。そちらは狼を巨大化したような紫色の獣に跨がっている。土色のマントと同系色の鍔広の帽子が細い少年の体型には不釣り合いな大きさを、後ろから見るとマントに乗っかるキノコのような。

青年のほうは均整のとれた長身で、背中に背負った見事な大剣がただものならぬ雰囲気を醸し出している。かなりの重量で、明らかに騎士が常用するような代物とは異なる。その勇ましさとは相反するように容姿は端麗でどこか魅惑的だ。髪はミディアムレイヤーで茶褐色をしている。端整な眉目上がった口角は挑戦的に映り、切れ長の瞳は女性が見たら目眩がしそうなほど美しく、男性的な色気を帯びていた。こんな二人の組み合わせは異様であり、たんなる旅人一行には見えないだろう。

この時すでに空は闇に浸食されかけていた。直に濃霧が発生して夜行性の生物が徘徊を始める。湿原はそう長くは続いていなかったが、地面のぬかるみに脚を取られやすく、彼らは通過にてこずっていたのだった。

「この先にあるヴァンホー温泉にでも浸かっていくか」

青年が馬を馱しながら、独り言のように呟いた。

「それならこの巨狼アマテラスを貸してやるから行ってこい。その間オレはこの辺で一休みしている」

「……」

少年の提案を聞いて、青年は束の間思案した。

「お前は入らないのか？」

「入らない。オレは平気だが、“二ナ”が嫌がってる」

少年はぶつきらぼうにそう返す。青年は不思議そうに小首を傾げた。

「二ナが？ 男になっている時も女体ニテの声が聞こえるのか？」

「声は聞こえない。意識が伝わってくるだけだ」

「ふくん」

青年は納得して頷いた。

「だがアマテラスはいい……ふっ」

「なんだその“ふっ”って笑いは！？」

少年は癪に触って指摘したが、青年の言い方をそのまま真似している所が笑いを誘う。

青年は含み笑いをして受け流した。視線を少年が乗った巨狼に移す。

「オレが乗ったら重くてアマテラスがかわいそうだ。この大剣だけでもかなりの重量だからな。なあ？」

彼が首を傾けて巨狼アマテラスに伺うと

「ぽっ」と巨狼はときめく乙女のような表情になった。主人の少年は目を疑った。

「アマテラス……お、お前“オス”だよな！？」

それに根拠はなく、齷つい外見や吠え声による判断でしかなかったが……

「それに何故バドに懐いてる？ お前を倒して主人になったのはこのオレなんだぞっ！？」

「こっちのほうの実力が上だと見抜いたんじゃないか」

さらつと青年バドが言った。悪意はなかったが（多分）、少年をからかうように悪戯な笑みを浮かべて。

「お前……っっ」

少年は込み上げる憤りに、わなわなと肩を震わせた。

「それならバド、オレと勝負しろ！？ 主人の強さをアマテラス（

そもそも何故この二人が行動をともしていたのかというところの経緯はこうだった。

仕事の依頼を受け、バドはヴァンホー湿原に向かっていた。ようやくその手前にある曠野に着いたのは、まだ日が落ちる前のことだった。視界の奥に森林地帯を見出した時、同時に彼はその手前に見覚えのある人影を発見した。鰐広の帽子に土色のマント。

「二ナ！」

彼は歓喜するように叫んだ。鰐広の帽子の主が振り向く。半ば帽子に埋もれたぶつきらぼうな顔がそこにあった。

「トレゾウだ！」

「ふふ……“二ナ”だ」

バドは嬉しそうに馬足を速めて駆け寄った。

「ストーカーか？」

帽子の主は少年だった。“さすらい”のトレゾウである。その顔を見てバドは「違う」と愉快げに笑った。

「仕事でヴァンホー湿原に向かっているんだ」

「ふん」

トレゾウは鼻で笑った。

「その獣はどうした。捕まえたのか？」

トレゾウが跨っている巨大な狼を見てバドが言った。紫色の体毛が頭部から尾にかけて体の表面を覆い、下顎から腹にかけては白い毛に切り替わっている。右目が銀、左目が濃黄色のオッドアイだ。

「まあ、そんなところだ」

トレゾウはふてぶてしい顔で言った。彼が乗っているのは魔獣の一種で、攻撃して負かすと手懐けることも可能であった。トレゾウの場合は襲われたので反撃したところ、獣が降参したのだが、持ち馬がなかった彼は「これは丁度いい！」と乗り物にすることにした。

“アマテラス”というのは彼が付けた呼称である。

「お前もあの張り紙を見て来たんだな。だが残念だったな、早い者勝ちだ。竜の首はオレが戴く」

「何のことだ？ オレが受けた依頼は竜の鱗を取ってくることだぞ」
「鱗？」

「ああ、そうだ。フェノル沼に棲む竜の鱗を」

「それなら丁度いい。オレが倒した竜の鱗をお前にやる」
「……」

バドの瞳が厳しいものに代わった。

「それはできない」

「何っ!？」

トレゾウが反発してバドを見据える。

「オレがしくじるとでも思ってるのか!？」

「いや、そうじゃない。竜を殺すと罰せられる可能性があるからだ。地域によっては神として崇められている種類もある。それに人的被害報告は受けていないとなると、お前が見たその張り紙は詐欺の可能性が高いな」

トレゾウは眉を潜めた。憤慨して、みるみる顔が紅潮していく。

「事務所の掲示板に貼ってあったんだぞ!？ そんなに怪しい仕事か!」

「ああ、あの掲示板か……あれには事務員の審査が入っていないからな。ハンター自身の目で見極めないといわけない」

「……金貨が百枚ももらえるんだぞ」

トレゾウがぼそつと言う。未練がましい目でバドを見詰める。

「あはは」とバドは乾いた笑い方をした。「やめとけやめとけ」と手を振る。トレゾウはその顔色を伺うように見据えた。

「……おいしい仕事だぞ」

「だから怪しいんだ。だいたい金貨百枚で竜が買えるか?」

「買えない」とぶつきらぼうな顔で首を振るトレゾウ。

「お前は強くなりすぎて感覚が狂ってしまったのかもしれないが、

竜を一人で倒しに行くなんて普通では考えられないことなんだぞ？
お前ならやっつてのけるだろうが、そんな大業を成し遂げた報酬が
たったの金貨百枚なわけがないだろ。そんな仕事は詐欺だ、絶対や
めておけ」

「……」

トレゾウは不満げに唇を歪ませた。

「ふん、早い者勝ちだ！」

突如、彼は強行に出た。巨狼をアマテラス駆って、廣野を突っ切り逃走する。

「おい！」

バドは素早く馬首を巡らした。その間にトレゾウは、背の高い雑
草の茂みに達していた。

と、それを追うようにして側方から地面を這って忍び寄る影があ
った。

蛇か？ そう思うより先にバドは動いていた。培ってきた経
験が危険を感知する。彼は腰間の柄に手を伸ばした。

すっと影が身を起こす。三メートルほどの高さになった。女性の
胴回りにはありそうなほど太く、数十メートルもの長さを持ったそれ
は、湿地帯などに棲息する蛇型の魔物だった。白灰色に黒の絞り染
めを施したような模様が全身を彩っている。その大蛇が大口を開い
て歪なひし形を形成し、今まさに人、巨狼もろとも飲み込もうとし
た

その瞬間。

「付与氷斬！」

氷の刃が空を裂いた。迸るその尖端が標的の肉に突き刺さる。

断末魔の叫び。

「黒タイダイン

！？」

振り向いて驚愕に目を^{みは}瞪るトレゾウ。その後には、頸部に短剣が突き刺さり今まさに息絶えようとしている大蛇の無惨な姿があった。その短剣から冷気が放出され、刺さった部分からみるみるうちに凍っていく。数十秒という短時間のうちに、大蛇の頭部から胴体にかけてが巨大な氷塊と化した。その重みに耐え兼ねて首が折れ、大きく地面を轟かせる。

「わっ！」

危うくぶつかりそうになってトレゾウは慌てた。近付いて来た青年をキツと睨む。

「危ないじゃないか!？」

青年はその傍らに来て手綱を引き、静かに馬を止めた。

「助けたんだが」

そう言った彼の口は綺麗に口角が上がっていて、笑ったかのようにも見えた。バドである。

ふとトレゾウが巨狼上から、地面に向かって手を伸ばした。

「やめろ、放っておけ」

バドが叫んだ。

トレゾウは地面に転がる大蛇の氷塊に向かって伸ばした掌を引っ込め、バドを見る。

「何でだ？ 呪文で氷を溶かして、お前の短剣を取ってやろうとしたのに」

バドは頭を^{かぶり}振った。

「それはそのまま放置して魔除けにする」

「何っ、魔除けだと？ 弱気なことを……」

トレゾウはいきり立ち、両手を地面のそれに向かって突き出した。

「極烈火！」

呪文が発動され、炎の帯が地面を走る。

「っ……」

炎の熱気が顔を扇ぎ、バドは馬を後退させて苦悶の息を漏らした。炎の帯が大蛇の頭部と胴体を舐めるように焼いていく。大気中に黒

煙と異臭が立ち込め、跡には炭と化した塊が二つ残った。

トレゾウは巨狼から降り、その焼け跡から短剣を拾う。黒く煤けて燻っており、もちろん超高温である。しかし
「取れたぞ」

彼はケロリとした顔でそれを掲げた。見た目こそ妖精のような美少年ではあるが、彼は一応“妖怪”である。人間の身体とはかなり強度が異なるのだった。

「冷めてから渡してくれ」

数年の付き合いがあつてそのことを知っているバドは、見慣れているので動じない。涼しげな面持ちで髪を掻き上げ、やれやれと失笑しただけであつた。少し馬を寄せて地面に転がる炭の塊を見下ろす。

「魔物まぶとはいえ、こうなつてしまうと憐れだな」

それを聞いたトレゾウは眉根を寄せた。

「甘いぞ！ お前いつからそんな優男になつた？ 背中に背負つているその剣は飾り物か！？ そんなことで竜ドラゴンと闘えるのか ！？」

激昂するトレゾウだったが、バドは気圧されることもなく余裕のある含み笑いを浮かべた。

「これにはいろいろと使い道がある。竜を狩る“以外”にも」
「……………」

それを聞いて唸るトレゾウ。彼は憎しみを込めてバドを睨んだ。

「仕方ない（？）、オレが付いて行つてやる！」

こうして二人は同行することになった。

二人は竜ドラゴンが棲息する沼へ行き、竜が身づくろいをしに岸に上がつて来るのを待った。やがてその瞬間が訪れた時、すかさずトレゾウが呪文を唱えた。そうして竜の動きを封じてからバドが大地を振動させる呪文を唱え、竜の体から古くなつた鱗を落とす。こうして剥れ落ちた鱗をバドが拾い集め、それを二人で山分けした。トレゾウはそれを高値で店に売りさばくことに決めて、今回は竜の首を諦めた。

これが二人が同行することになった大まかな経緯である。

「また、この男体すがたの時に会ったら覚悟しろよ……」
バドが消えた地点に立ち、そこから続く崖に近い急斜面を見下ろして、トレゾウは呪詛のようにそう呟いた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0006c/>

ANOTHER WORLD “禍根Xの原本”

2009年7月4日18時30分発行